
戦場のヴァルキュリア ~ ブルールの丘から ~

watershed

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場のヴァルキュリア ～ブルールの丘から～

【Nコード】

N9429X

【作者名】

W a t e r s h e d

【あらすじ】

国境の街ブルールに向かうガリア義勇軍。

故郷の奪還を目指すギンター少尉率いる第7小隊と共に、同じブルールを故郷とする古参の指揮官率いる義勇軍第4小隊がいた。待ち構える帝国軍防衛部隊との激しい攻防戦をくぐり抜け、彼らは故郷を取り戻せるのか

今作にはオリジナル要素があります。

プロローグ（前書き）

元教師の古参兵のエピソード。

舞台はブルール奪還戦、第7小隊との共闘作戦という設定に。

主人公はプライベート・ライアンのミラー大尉がモチーフ。

アリシアがいた孤児院の先生（保父？）という架空設定にしてみました。

登場キャラもほとんどオリジナル（皆サッカー選手の名前）。

第7小隊の面々も登場予定・・・

プロローグ

9月になったとはいえ、昼間ともなれば真夏かと思紛う陽射しが照りつけてくる。丘陵地帯に吹く風が、兵士たちにしほしの涼を与えている。なだらかな丘を染める鮮やかな緑と、延々と続く空の青が視界を埋め尽くしている。

丘を抜ける風が朝露に濡れた草を揺らし、牧歌的な景色に素朴な音を加えているはずのだが、低く唸る戦車の駆動音がそれら一切を掻き消して、兵士たちを「現実」につなぎとめていた。

彼らの「現実」とは、戦争である。

このガリアの地が戦火に飲まれてから半年が過ぎようとしていた。

征歴1935年3月15日、ヴィルトウールの故郷ブルールの街はガリアへ侵攻を開始した帝国軍の奇襲を受け、半日と経たずして彼らの手に落ちた。ヴィルトウールは街の自警団のひとりとして抵抗を試みるも、完全武装の帝国軍に蹂躪される故郷を目の前にして、為す術なく街を後にするしかなかった。

40歳を過ぎるヴィルトウールは、戦前ブルールにある孤児院で身寄りのない子供たちと暮らしていた。彼は元は教師であった。同じく教師で同僚のルーズという女性と出会い間もなく結婚したのだが、数年後に第一次ヨーロッパ大戦が勃発。ヴィルトウールも招集を受けて従軍した。

終戦後、ブルールに帰還するも、ほどなくしてルーズは病に倒れこの世を去ってしまう。ルーズの死後、ヴィルトウールはブルー

ルにただひとつある孤児院で働くようになる。その孤児院はルイズの父が開いたものであり、生前のルイズも子供たちの母親代わりとして過ごした場所でもあった。

ルイズとの間に子供を授かることはなかったが、エリックは孤児院で暮らす子供たちをわが子のように想いながら、義父とともに孤児院を守ってきた。

開戦がいよいよ近いという情勢になり、孤児院を閉鎖し義父と子供たちを首都ランドグリーズへと疎開させていたのだが、ヴィルトゥールは自警団として街に残り、防衛の任に当たっていたのだった。

ヴィルトゥールがブルールを追われて以降、戦況はガリアの敗色が濃厚となっていく。帝国軍は、戦車を中核とした機甲師団による火力と機動力を駆使し、電撃的にガリア領内に侵攻。わずか1ヶ月も立たないうちに首都ランドグリーズの眼前にあるヴァーゼルにまで至る。

首都陥落も想定される事態に陥るが、ランドグリーズへの街道が通る最重要拠点、ヴァーゼル橋の奪還を機にガリア軍が反攻に転じることになる。

そのヴァーゼル橋奪還作戦の先鋒となったのが、ガリア義勇軍第3中隊隷下の第7小隊であった。その第7小隊を指揮したのは、先の大戦でガリアの英雄となったベルゲン・ギウンター將軍の息子であるウエルキン・ギウンター少尉。

若干22歳のギウンター少尉は、対岸の敵陣地へ戦車で潜水渡河し奇襲をかけるという作戦を立案。小隊を率いての初陣であったが、これを見事成功に導く。

英雄の息子である青年将校率いる小隊が公国の窮地を救ったことで、一躍彼の名と義勇軍第7小隊の存在はガリア軍内に轟き、彼らは反攻の旗印となっていた。

その後も義勇軍第7小隊は、南部クローデンの帝国軍補給基地攻撃作戦、工業都市ファウゼン攻略作戦、マルベリー海岸制圧作戦と、立て続けに勝利を呼びこむ働きを見せ、ガリア軍はいよいよ領内の帝国軍を駆逐しようという局面に転じるに至った。

今回、ヴィルトゥール率いる義勇軍第3中隊隷下の第4小隊は、ギユンター少尉率いる第7小隊とともにブルール奪還戦の戦力として投入され、今まさに街を目指して進軍を続けているのであった。

これから取り戻そうとしている故郷ブルールを去ったあの日、ヴィルトゥールはギユンター少尉に出会った。

ギユンター少尉は、ヴィルトゥールと同じブルールの出身だった。ギユンター少尉は義理の妹であるイサラ・ギユンターと、かつてルイズやヴィルトゥールの下、孤児院で育ったアリシア・メルキオットという少女とともに、故ギユンター将軍がかつて駆っていた戦車でブルール撤退のしんがりとなって戦った。

ヴィルトゥールは前大戦に従軍した際、ギユンター将軍の指揮する部隊の兵士として国境付近の戦闘に参加した。将軍は卓越した戦況把握と無駄のない指揮でガリアへ勝利をもたらすとともに、ヴィルトゥールをはじめ多くの兵士の命を救った。

将軍は戦後ブルールで静かに余生を過ごしたが、戦時中に妻を亡くしたことで、将軍自身も間もなく病に伏し若くしてこの世を去ったこ

と、そして残されたご子息と養女がいることをヴィルトウールは人伝に知った。

その残された将軍のご子息が、ヴィルトウールをはじめブルールの人々の危機を救った。ヴィルトウールをはじめ、前大戦の戦火を知るブルールの者は皆、故郷を去るあの日、ギウンター将軍の姿をひとりの青年に重ねていた。

いざヴィルトウールがギウンター少尉と言葉交わしてみると、まるで軍人の息子とは思えぬほど物腰の柔らかい青年であった。ギウンター少尉を紹介したアリシアからは、彼と初めて会った時住民が避難を始めている最中に魚のスケッチをしていたのだと笑って聞かされた。

将軍の息子と屈託のない笑顔で話す少女は、ヴィルトウールにとって彼女がまだ幼い頃から知る存在だった。

アリシアは、もとはヴィルトウールの働く孤児院で育ち、戦前は街でただひとりマイスターの資格を持つパン職人のもとで働いていた。アリシアはルイーズがまだ病に伏せる以前から孤児院におり、ルイーズが生前よく面倒を見ていた女の子だった。

ルイーズの死後ヴィルトウールが孤児院で働くようになった頃には、彼女は子供たちの中でも年長になっていたので、よく彼を助け子供たちの面倒をみていた。パン屋で修行を始めてからも、練習でパンを焼いたと言っては孤児院の子供たちに届けてくれたりもした。

開戦の気配が近づいて、アリシアが勤める店も営業を止めると彼女は自警団へと入り、持ち前の面倒見の良さから自警団の分団長の任に就いた。そして、あの日彼女は帰郷していたギウンター少尉と出

会ったのだという。

ルイズが居なくなっただけからは自分をよく支えてくれ、子供のいないヴィルトゥールにとっては、アリシアは他の子供たちと同じく娘のように思う存在であった。

アリシアはブルールからランドグリーズへ避難したのち義勇軍へ志願し、ギユンター少尉と同じ第7小隊に配属となり彼の副官となっている。

ヴィルトゥールは不思議な気分だった。

かつて戦場で命を救ってくれた人物の息子に再び窮地を救われ、今は同じ戦場に立っている。その彼を引き合わせてくれたのは、娘のように思い成長を見守ってきた少女で、今は彼の傍らで自分と同じように戦場に向かう身だ。

3人が目指す先はそれぞれ同じ故郷であるブルールの街

ヴィルトゥールは、第7小隊が進んでいるであろう左手の丘の峰を見つめた。彼らの進む先を照らすかのように、雲間から一筋の光が射し込んでいた。

1・追憶（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第4小隊<

エリック・ヴィルトウル / 少尉 / 小隊長

>ガリア義勇軍第3中隊第7小隊<

ウェルキン・ギウンター / 少尉 / 小隊長

アリシア・メルキオット / 軍曹 / 小隊副官

1・追憶

眼前にはなだらかな丘が続き、その丘にはまだ青々とした草花が一面に生え広がっていて、少しずつではあるが故郷ブルールの風景に近づいていることが感じ取れた。他の土地の者が見れば同じような景色の連続でしかないかもしれないが、ブルール出身のヴィルトゥールには故郷の記憶を呼び起こさせる情景に映っていた。

朝に補給拠点を発ち、すでに帝国側の勢力圏内に入っていたが、これまで敵部隊との交戦はなかった。この国境周辺のブルール近郊に至っても帝国軍の姿は見当たらなかった。すなわちこの地域一帯に点在していたであろう敵部隊は皆、ナジアルへ向けて移動しているか、防衛本拠点であるブルールの街に集結していることを意味していた。

帝国軍はヴァーゼル橋を奪い返されて以降、ガリア軍の反攻が激しくなったことと、戦線拡大による補給線の延長、及び兵站面での遅れが重なったため各地で敗走を続けていた。ラグナイト資源が豊富な北部の工業都市ファウゼンを失ったことで、帝国軍の衰えはいよいよ本格的なものとなっていた。

帝国軍が局面を打開すべく、総攻撃に備えて主力部隊をナジアルへ集結させつつあるという噂は、多くの兵士の耳にも届いていた。ガリア正規軍をはじめ義勇軍の大半の部隊もナジアルでこれを迎え撃つべく投入されていたのだが、そうした折にあって今回のブルール奪還作戦の命が下った。第3中隊長であるエレノア・バーロツト大尉の肝入りで決まり、本隊に第7小隊が指名されたのだ。

そう遠くない帝国との決戦が控える時期に、連戦が続いているはず

の第7小隊を本隊に据えてまで、戦略的重要性の低い辺境の地であるブルールを奪還する意味があるのかと義勇軍内でも疑問の声が上がっていたという。今や義勇軍随一の精鋭となった第7小隊である。正規軍上層部では決戦の先鋒として第7小隊を据えるべきだと発言する者もいた。

軍上層部はもとより、義勇軍内の反対や疑問の声がある中で発令されたこのブルール奪還作戦。バロット中隊長自ら上層部に進言した背景には、先月のマルベリー海岸で死傷者を出した第7小隊のことが関係していた。戦死したのは、小隊の戦車操縦士であるイサラ・ギンター伍長であった。小隊長のギンター少尉のたった一人の家族で義理の妹である。彼女の死後、士気が沈んでいた第7小隊を慮って、彼らの再起を期すべく本作戦がバロット中隊長によって起案された。

これまで長く第7小隊の支援任務にっていたランツアート少尉指揮下の第1小隊が待機ということで、ヴィルトゥール率いる第4小隊へ支援任務がまわってきたのだ。ヴィルトゥール率いる第4小隊の任務は街の攻略を担う第7小隊の支援である。ブルールへ向けて進軍中である現在は、本隊である第7小隊の右翼側面を警戒、敗残兵や敵哨戒部隊の発見と掃討の任にあたっていた。

これまで第7小隊とは、ヴァーゼル橋奪還戦、バリアス砂漠の拠点制圧戦と同じ作戦に参加したが、直接支援する形で作戦をとみにするのは初めてのことだった。

「おじさんと初めて一緒に戦う作戦目標がブルールだなんて、すごい偶然だね！」

補給拠点を発つ前夜、ヴィルトゥールはアリシアから声を掛けられ

た。いつもの通り天真爛漫に見えるものの、まだ少し仲間を失った
悲しみを引きずっていること、そして故郷を取り戻すという内に秘
めた決意が彼女の表情から透けて見えた。

「ウエルキンはイサラの死を一人で背負いこんでいるみたいで．．．
彼の悲しみは私達の悲しみでもあるのに．．．」

ヴィルトウールが第7小隊の様子を訊ねると、アリシアの顔から強
がって見せていた笑顔が消え、我慢して抑えていた想いをこぼした
のだった。彼女の瞳が悲しみとともに、どこか戸惑いを湛えている
のをヴィルトウールは敏感に感じていた。

それはこれまでアリシアが見せてきた自分や孤児院の子供たち、義
勇軍の仲間を想う純粋な優しさからくるものとは少し違っているよ
うに思えた。

どこか臆病で、しかし深い愛しさを秘めていて、それが故に彼女の
心を惑わせている

「今、アリシアが彼にしてあげられることを素直にしてやればいい。
余計な気を遣わんでいいさ。彼だってアリシアや他の隊員が自分を
想っていてくれることは、ちゃんと分かっているはずだから。」
うんと頷いて精一杯の笑みを返したのだが、戸惑いの色は消えてい
なかった。孤児院で自分や子供たちと無邪気に触れ合っている頃の
ような笑顔ではなかった。

戦争が彼女を変えてしまった。戦争さえ無ければ訪れなかった悲し
みによって、彼女や仲間たちの心を歪めてしまっている。

自分もまた、すっかり変わってしまったのだろうか

2・作戦開始（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第4小队<
カレル・ユーゴヴィツチ / 曹長 / 小队副官
グリゲラ / 軍曹 / 戦車長
フローラン・ピレス / 伍長 / 通信兵
ボアズ・エシエン / 上等兵 / 偵察兵
ロワーヌ・バリー / 上等兵 / 偵察兵
アシユリー・プティ / 上等兵 / 戦車操縦士

2・作戦開始

「少尉、帝国の連中はもう引き上げたみたいですね。」

ランドグリース近郊ヴァーゼル市出身の22歳、カレル・ユーゴヴィッチ曹長が、のどかな緑の景色に浮かぶ異物を指して訊いていることは明らかだった。

左手前方に破壊され乗り捨てられた帝国軍のハーフトラックが見えた。以前に哨戒中の友軍にやられた斥候のものようだった。

「ブルールの街も放棄してくれていりゃいいんですけどね。」

続け様にユーゴヴィッチお得意のぼやきが口を衝いて出る。

「それはないな。ブルールは中部と北部の中間に位置している。中部方面に残っている部隊がナジアルを目指すなら、このブルールを経由したとしても不思議じゃない。」

副官のぼやきに対して、少し真面目に言葉を返してしまったかなと思っただが、平静を保って言葉を継いだ。

「バリアス砂漠以南の敵部隊がナジアルを目指して移動するなら、できる限り交戦を避けるためにガリア東部の警戒線を迂回しようとするはずだ。」

「中部の帝国軍はクロードンを失って以降まともに補給を受けられず、特に中部の敵部隊は孤立して消耗しきっていると聞いていますしね。」

言葉だけは大真面目に返したユーゴヴィッチだったが、その口調はまだ先ほどのぼやきと変わらない。

「そうなるよと遠回りであつてもこの国境周辺のブルールあたりまで迂回してナジアルを目指すはずだ。大規模な部隊は既に移動を終えていると聞くが、街の防衛部隊と取り残された中部方面の部隊がいくつか集まればそれなりの規模にはなっているだろう。」

「それじゃあ、敵さんの逃げ足が速いことを祈りたいですね。今頃ナジアルで飯にでもありついてくれてりゃ、俺たちに殺されなくて済むわけだし。」

お喋りなユーゴヴィッチは、とどめとばかりに少尉の背中に小言を浴びせた。

ユーゴヴィッチは第4小隊の副官であり、ヴィルトゥールとはヴァーゼル橋奪還戦からの付き合いになる。戦前はランドグリーズの大学に通っていたらしいが、大学の軍事教練課程では多くの学生がそうするような士官候補コースを履修せず、試験的に開かれていた特殊戦闘技能教練課程というコースを選択したらしい。

ユーゴヴィッチが以前語っていた話によると、少数部隊による敵勢力下への潜入、及び破壊工作や後方攪乱等の戦闘技術の習得を目的としたものであるという。

ヨーロッパでは小国であるガリアにとって、戦力の規模では敵国との勝負にならない。いかに数や物量で劣る戦力を駆使して敵国を退けるかという考え方が自然と生まれた。そうした軍内の意見や思想が後押ししてのものか、少数ながら特殊任務を遂行できる特別部隊

創設の必要性がガリア軍内の一部から上がったという。

しかし、部隊創設を待たずして開戦となり、ユーゴヴィツチら候補生たちは正規軍、義勇軍問わずバラバラに振り分けられたという。彼は学徒兵であるため義勇軍に入隊、下士官として第4小隊に配属された。

彼は任務中でも事あるごとにヴィルトウルや他の小隊員に対してぼやくのがお決まりで、年かさで饒舌ではない小隊長の代わりに、若く年が近い隊員たちへ他愛の無い話を振りまいて隊の雰囲気を経分和らげていた。

いざ銃弾が飛び交う戦場となると、特殊訓練の賜物なのか22歳の青年とは思えぬ冷静さとの確な判断力を見せ、敵の虚を突く指揮をみせる。

「まあ、腹が減っているなら俺たちがたっぷりとコイツを食べさせてやりますけどね。」

ユーゴヴィツチは左手でガリアン小銃を撫で回しながらニヤついてみせた。ヴィルトウルは苦笑しながら、ちらとユーゴヴィツチの方を振り返った。22歳の曹長は一瞬目を合わせて答えたが、その目は前方の丘の峰にじっと向けられていた。他の小隊員も笑みをこぼしながらも、その目はしっかりと周囲に向けられ、警戒を怠る素振りは見せていなかった。

拠点を発つ頃は辺境のブルールが攻略目標と聞いて、決戦に臨む戦力から外されたと嘆く者もいた。一方で、激戦となるであろうナジアルに行かずに済むのなら、これほど楽な任務は無いと半ばピクニツク気分にいる者もいた。

そんな中、いつものお喋りを装いながら気を利かせたユーゴヴィッチが、ブルーが隊長の故郷であることを隊員たちに説いて回っていた。奪還したら隊長の奢りであつぱり飲み明かそうなどと騒いでいたりもした。

「ヴィルトウル少尉、ギンター少尉から通信です。もう間もなく作戦開始位置に到着することです。」

ユーゴヴィッチの一行後ろを進む南部ガリア出身、25歳の女性兵士フローラン・ピレス伍長が無線通信の内容をヴィルトウルに伝えた。ピレス伍長は小隊付きの通信兵で、戦前はランドグリーズの貿易会社に勤務していた。細面で唇が薄く、少しつり目なのできつい印象だが、大きな瞳は結び上げている髪と同じダークブラウンで、長いまつげが女性らしさを引き立てていた。

くだけたもの言いのユーゴヴィッチとは真逆で、堅苦しく感じる程の生真面目な性格だったが、それ故に小隊の事務仕事も率先してこなし、悪態や文句の一言もなく、よく気が利く女性だった。ユーゴヴィッチや若い男性隊員の卑猥な言葉のやり取りに対して、ピシャリと厳しい言葉を返すこともある。通信兵としてバーロット中隊長や他の小隊との連絡を正確にこなしてくれることから、ヴィルトウルは彼女もまた有能な部下であると認め感謝していた。

「了解だ。貴官の右翼側面を援護しつつ周囲警戒を継続して我々が先行すると伝えてくれ。」

ピレスがヴィルトウルの言葉そのままに無線越しに返答する。よし、とヴィルトウルは小さく頷くとサツと右手を上げて進軍する隊を止めた。

「この先の丘に風車が立っていてそこがブルールの入口だ。街はその風車のある丘を下ったところにあるが、敵が風車小屋に陣地を敷いているかも知れない。あちらは高台にあつてこちら一帯を見渡せる。こちらには遮蔽物がないから狙撃手や機関銃のいい的だ。」

ここまで一気に言葉を継いで一呼吸すると、ヴィルトゥールは隊員たちの顔を見回す。ユーゴヴィツチだけは周囲に目を光らせ警戒を止めていない。

ブルールは丘陵地帯の只中にあり、周囲を小高い丘に囲まれている。それら丘の上に風車が立ち並び、季節を問わず穏やかな風が絶えることのない街であった。ヴィルトゥールの言う風車が立つ丘を越えると、街を見下ろすことができ、事実上ブルールの玄関口となっていた。

歴史的に独立自治の意識が強いブルールは、古くから街の自警団が組織され、市街地は勿論のこと牧草地や農場がある郊外にも日常的にパトロールが行われてきた。街を囲む丘に立つ風車は、郊外の自警団の詰所の役割も果たしており、今は帝国軍が哨戒部隊の詰所として利用している可能性もある。

風車は丘の上にあり視界も良く、石造りで出来ているため機関銃や対戦車砲が据えられているとなると、それなりに厄介な防御陣地に変貌する。

「そこで、まず偵察を出して風車小屋周辺の状況を確認したい。バリ、エシエン。」

ほぼ同時に名を呼ばれた二人がヴィルトゥールに顔を向け直した。

色白でブロンドの長髪を後ろで結んだバリー上等兵は、19歳ながら大人びて見える少女だった。

異国の血が混ざっていると分かる褐色の肌をした21歳のエシエン上等兵は、丸く大きな鼻が特徴的な若者で、いつもユーゴヴィッチのボヤキに人懐っこく笑いながら言葉を返す明るい男だった。

「いいか、姿勢を低くして風車が見える位置まで進め。目視して状況を知らせるんだ。他の者は左右に散開して二人の側面を警戒。前方に注意しながら進め。」

「わしはどうりゃいい!？」

小隊員の後方を進んでいた戦車のハッチから黒い髪を短く刈り込んだ初老の男が顔を出していた。小隊最年長のグリゲラはダルクス人で60歳を超える戦車長であり、小隊内ではヴィルトゥールと同じく唯一前大戦にも従軍した経験がある。

当時は戦車の整備技師兼支援兵であつたらしい。ガリアでも例外なく被差別民族であるダルクス人だが、本人はまったく臆することなく豪胆な物言いで分け隔てなく人と接する器の大きい人物だった。

「戦車は前哨戦の安全が確認できるまで後方に待機だ。」

「了解だ。聞いたか？アシユリーちゃん、道が開けたら一気に突っ走るからな！」

グリゲラはハッチの縁をバンと叩きながら自分の身を引いて車内に向かつて大声でがなった。すると車輛前方にある操縦席上のハッチがガシャンと勢い良く開き、栗色の髪を振り乱した女性兵士が

飛び上がった。

「もう、うるさい！ただでさえ戦車内は響くんだから大きな声を出さないでよー！」

戦車操縦士であるアシユリー・プティ上等兵が丸い童顔をしかめながらグリゲラを睨む。

「砲弾の音よりデカインじゃないか？ジイさんの声は。」

ユーゴヴィッチが周囲の安全を確認したのか、ガリアン小銃を肩に掲げて振り返りながらアシユリーに言葉を掛ける。

「弾が飛んでこないだけ、マシだと思ってくれ！」

大口で笑うグリゲラの前で、むくれているアシユリーがヘッドホンを装着し直す。ピレスも怪訝そうな表情で深いため息をつけていた。

明るく豪快で頼りになるグリゲラであったが、女性兵士からはすこぶる評判が悪かった。グリゲラは、誰かれ構わず女性を見ると年甲斐もなく絡んでは身体に触れてくるからだ。ダルクス人で品がなく女好きという何とも恐れ知らずな老兵である。

しかし、根は仲間想いで人情に厚いことをヴィルトウールは理解している。グリゲラは小隊の女性兵士たちを孫や娘のように想い接しているものと思っていた。

「バリーとエシエンは位置についたらすぐに状況報告。その後私の指示で丘の上まで移動を開始する。」

やや強い風が丘の上から吹きつけるのを感じ、風が行き過ぎるのを待ってからヴィルトールはやや低く太い声で言った。

「作戦開始だ。」

3・風車小屋の遭遇戦（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第4小队<

マシュー・フェルメイレン / 上等兵 / 狙撃手

ダボル・ブラウン / 上等兵 / 突撃兵

テイラー・エリクセン / 上等兵 / 突撃兵

3・風車小屋の遭遇戦

鮮やかな緑に染まった丘をロワーヌ・バリー上等兵は、ボアズ・エシエン上等兵のすぐ後ろに追いて登っていた。前方の丘の峰を見つめながらエシエンに倣って姿勢を低く保ち、小銃を両手に携行して歩を進める。

バリーはエシエン同様、偵察要員であることから他の隊員に比べれば軽装ではあったが、装備を全て身に付ければそれなりの重量にはなるし、姿勢を低くするとずしりと背囊の重みが身体にのしかかってくるのが感じられた。バリーは高等学校までの軍事教練は受けてはきたが、実戦は今回の作戦が初めてとなる。

自分は躊躇無く銃の引き金を引くことができるのか？もし、敵に撃たれたら？バリーは義勇軍に入隊してから何度も自問してきたが、その度に悪い方の答えしか浮かばなかった。

「もうすぐ丘の上だ。頭を引っ込める。」

バリーの2メートルほど先を進む21歳のボアズ・エシエン上等兵は、これが2回目の出撃だった。ただ、最初の出撃はマルベリー海岸近郊での哨戒任務で、帝国軍との戦闘を経験したものの、相手は海岸防御陣地から逃れた敗残兵でまともな反撃も受けぬまま、こちらがほぼ一方的に殲滅したというものであった。これから始まるブルールでの戦いがどの程度のものになるか、はっきりと想像できるほど彼には経験がなかった。

ユーゴヴィッチは丘を登るふたりの兵士を視界に入れつつ、前方（先行する二人の右側面）に視線を集中していた。丘の向こう側がど

うなっているかこちらからは分からない。草地に隠れて敵が待ちぶせているかも知れないこと、もしそうであるなら敵の先制射撃を受けることになり、その最初の一撃を回避するのは難しい。そうなると小隊の誰かが倒れることになる。

移動中に敵と遭遇し戦闘になる場合などは、特に先に攻撃を受けた方は必ず一人か二人はその銃弾に倒れることになる。誰がその的になるのかを決めるのは、ほとんど「運」でしかないことをユーゴヴィッチは知っていた。待ち伏せを喰らった時など、機関銃の斉射を不意に受けて前衛の兵士が悲鳴と血しぶきを上げながらバタバタと倒された。

帝国軍が敗走を始めているとはいえ、ヴィルトゥールが言うようにこの地域一帯の分隊が集まればそれなりの規模になるはずであるし、市街に立て籠もられると単純な数的優位や火力で押し切るうにも、簡単には奪還できるものではないだろうことはユーゴヴィッチも理解していた。

ここまで敵と遭遇することは無かったものの、実際は敵の偵察部隊に既に察知されていることも当然考えられたので、うまくおびき出されたのではないかという不安がよぎった。

とにかく敵に接触する最初のタイミングが最も危険であり、それがこの丘の上になるか丘を越えた街の入口になるか、ユーゴヴィッチはガリアンの引き金に指を当てながらしっかりと歩を進めていた。丘に登る二人が匍匐の姿勢になったのを見て、ヴィルトゥールが少し表情を硬くした。ユーゴヴィッチの方を見やると先行する二人と距離を置きつつ、同じく丘に登り前方右方向を警戒しながら進んでいる。その後ろから19歳の狙撃手マシュー・フェルメイレン上等

兵がGSRスナイパーライフルを構えて後に続いていた。

不意に強い風が吹き、額に玉となっていた汗がパラパラと手に落ちた。そこでようやく、ヴィルトウールは照りつける陽射しと喉の渇きに気が付いた。

先行する二人の偵察兵が止まる。

「歩哨2、機関銃1、対戦車兵1。」

双眼鏡を覗き込むエシエンの声を、手信号に変換して後方の小隊長に向ける。バリーは呼吸が早くなり、身体が小刻みに震えているのを自覚していた。

バリーの手信号をそのままプレスが声にして読み上げた。

「二人を下がらせる。」

ヴィルトウールはプレスにそう告げるとユーゴビッチを見やり、右手でサインを送る。同じくエシエンのサインを見ていたユーゴビッチがヴィルトウールに頷いて見せ、フェルメイレンを草地に伏せさせる。

開戦直前に高等学校を出たマシュー・フェルメイレン上等兵は、風車小屋とユーゴビッチ曹長を視界に捉えていた。地面にべったりと伏せ、青い草の臭いと自分の汗の臭いとが鼻をついた。陽射しの方向に注意しながら、GSRスナイパーライフルの銃口を風車小屋方向に向けた。

フェルメイレンよりも数メートル先を進んでいたユーゴビッチも

また、息を殺して身を隠しながら、風車小屋にいる4人の帝国兵の様子を見つめていた。

右翼の二人が草地に伏せるのを見た偵察兵の二人は、慎重に登り進んだ斜面を後退りした。

「曹長がうまくやるさ。」

エシエンが不安げな表情で見上げるバリーの肩を叩く。彼の笑顔も幾分強ばっているように見えた。

この遭遇戦はほんの数秒で決した。

ユーゴヴィッチがさつと草地から上体を起こし、先制射撃を見舞う。観測手役の歩哨が倒れ、残り3人が、揃って銃声の方へ向き直る。機関銃手が重い銃身を曹長に向けようとするが、射撃を始める前にフェルメイレンの狙撃で頭を撃ち抜かれ、重機関銃にもたれかかるようにしてくずおれた。

歩哨のもう一人が、倒れた射手に代わって銃座に付こうとするが、今度は反対側面からダボル・ブラウン上等兵とテイラー・エリクセン上等兵のマグス短機関銃の制圧射撃を受けて、仰け反るように倒れる。

3人が一瞬で死体となり、ようやく身を隠そうとした重装の対戦車兵がフェルメイレンに首を撃ち抜かれ、血を吹き上げながらばったりと倒れた。

「制圧完了。」

ピレスの言葉の後、ヴィルトウールの合図とともに戦車と待機していた隊員を含め、小隊が一斉に移動を開始した。

小隊が丘の峰に達すると、なだらかな下り斜面が眼下に広がっていた。4人の死体が転がっている風車小屋は、今いる場所よりもやや低い丘の上にはぽつんと立っていて、ブルールの街が見渡せるポイントになっている。

「第7小隊の連中もスタート・ポイントに着くぞ！」

グリゲラが声を上げて指差した方向、左手数百メートル先に連なる丘を数十人の歩兵と2両の戦車が登っているのが目視できた。

「風車小屋内部の安全を確認。」

帝国兵の死体を確認したユーゴヴィッチのサインを、ヴィルトウールとほとんど同時にピレスが読み取っている。ヴィルトウールは周囲を見回し小隊員の遅れがないかを確認して、風車小屋の立つ丘を登りきると大きく息を吐いて姿勢を正した。

「少尉、あれがブルールの街ですか。」

ユーゴヴィッチが風車小屋の出入り口の側に立ち、眼下に広がる街を指して言った。

ヴィルトウールはゆっくりとうなずく。

2棟の背が高い風車を囲むように、木造の建物や石造りの建物が寄り添っているように見える。それは、あの時のままのブルールだった。為す術なく去るしかなかったあの日のままの姿だ。

戦車が一際大きな唸りを上げ、ようやく丘を登り切ったことを小隊員に知らしめた。

「よし、行動に移るぞ。総員、前進だ。」

ブルールを取り戻す

戦車の唸りに呼応したかのように、ヴィルトゥールは胸に荒ぶる感情が沸き上がったが、表情を崩すことなく頬を伝う汗を拭いた。

4・橋上強襲（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第4小队<

ダヴィド・ゼンデン / 上等兵 / 偵察兵

ピセンテ / 上等兵 / 突撃兵

リリアン・シエーフアー / 上等兵 / 支援兵・機関銃手助手

4・橋上強襲

「まず前方の橋を確保する。」

ヴィルトウールの号令で小隊が前進を始める。

ブルールの街は周囲の丘から続く緑の中に、赤茶色の屋根や白い石壁、木組みの建物が寄り添っていて、中心に2棟の大きな風車がケーキに立てられた蝋燭のように突き立っていた。もつとも、蝋燭のように見えるのは、風車の帆や柱が黒く焼け焦げ、所々砲撃によって崩れていたからである。もつとも丘を下るヴィルトウルたちからは、ぼんやりとしか確認できなかった。

グリゲラが無線でアシユリーに方角を指示すると、戦車が唸りを上げて斜面を下りはじめた。歩兵たちもそれに続いて斜面を下っていく。

緩やかに下る斜面には、大小様々な大きさの風車や農具などを保管するための小屋、その小屋から街の方向へ伸びる細い農道、放牧地を囲んでいる柵、点々と立つ広葉樹の木々、背の高い雑草が繁茂し手入れのされていない畑が見える。見渡したところ敵影はなく、家畜たちの姿もない。

ヴィルトウルはまるで学生が描いた風景画のようだなと思ったが、これからこののどかな場所で殺し合いが始まるかと思うと気分が悪くなった。

斜面を下りきった先に小さな川が流れていて橋が架けられている。その場所から川に沿って西に数百メートルの地点には、より大きな

橋が架かっただけで中心部に続く大通りが通っている。この大通りは第7小隊が進むルートであり、街への正面玄関である。

重装備の対戦車兵、支援兵、衛生兵らは戦車の後に続いたが、バリ―やエシエン、マグス短機関銃を携えたビセンテやブラウンら突撃兵らは、戦車に先行して展開していた。先頭のユーゴヴィッチは、点在する農具小屋や畑の脇に立つ木や茂みに身を隠しながら索敵を続けていた。

距離は離れているものの、風車小屋での銃声でこちらの存在は察知されているはずだったが、敵の姿は見えぬ迎撃もない。

身を潜めていた茂みにエシエンが追い付く。ユーゴヴィッチは、左手の木の影に潜んでいたバリ―と20歳のダヴィド・ゼンデン上等兵に前進のサインを送り、後方のビセンテとブラウンに援護を求める視線を送った。

茂みから出て駆け出すと、すぐ後ろをエシエンが続いた。傾斜がさらにゆるやかになり、そして平坦になったところで草地から土の地面になった。ザツザツという地面を蹴る音とともに土煙が上がる。先行する兵士たちの動きを見て、ヴィルトゥールも下り斜面の終わりを目指して駆け出した。

橋を渡った先は街への入口に小道が続いていて、茂みや農具小屋といった遮蔽物が見当たらない。小道の両脇は幾分起伏があり伏せて銃撃を避けられるかもしれないが、街側から迎撃するには絶好のポイントだった。敵がそのポイントを狙うのに格好の場所はどこか、ヴィルトゥールは街の外郭に視線を走らせた。

ユーゴヴィッチとエシエン、左手からバリ―とゼンデンが橋の両脇

から接近する。橋は10メートルもないくらいの長さで、車両がすれ違えるかどうかというくらいの幅しかなく、郊外の住民や農民らが往来するくらいのものであった。

ユーゴヴィッチが橋のたもとに取り付くとその後には3人が続いた。橋の左右に2人ずつ取り付く形になり、後方から戦車が唸りを上げて橋に向かう。橋を渡ると小道が起伏の尾根に沿って曲がりくねりながら街の外郭まで続いている。

その距離は約100メートル。木造の建物、2階建てのアパートなどが間をおいて連なっていて、右手の奥の方は何もなくて開けていた。ユーゴヴィッチがいる橋のたもとは、奥を見通すことは出来なかったが、正面の2階建ての建物に敵がいなか頭を出して確認した。

「橋に対戦車地雷などの爆発物はありません。」

バリーがユーゴヴィッチとは反対のたもとはから橋の下を覗き込んで報告した。

「よし、対岸に渡る。援護しろ。」

ユーゴヴィッチがたもとはから橋に躍り出たところで、正面に並ぶ建物の奥の奥に屋根が半壊した家屋があることに気がついた。その家屋はちょうど橋を正面から見下ろすようになっていて、橋の左右のたもとはからは建物の陰に隠れて見えなかった。

ユーゴヴィッチは壊れた屋根の影で小さく光が反射するのを見逃さなかった。チツという音とともに足下で土煙が上がったところで遅

れて銃声が届き、ユーゴヴィッチは自分が銃撃されたことに気がついた。

「スナイパー！12時の方向！！」

エシエンがよろけたユーゴヴィッチの動きを見て叫んだ。

ユーゴヴィッチは体勢を立て直すと、一気に橋を渡ろうと駆け出した。身体を左右に揺らし、敵に狙いを定めさせないようにジグザグに走った。チツという音と土煙が今度は先ほどとは反対側で起こった。弾は外れていた。

「援護射撃！」

ヴィルトウールが叫びながら橋のたもとに駆け寄ると、土手から上体を覗かせてガリアンを発砲した。間髪入れず、ビセンテとブラウンのマグス短機関銃がけたたましい連射音とともに弾丸をばらまいた。

ユーゴヴィッチが橋を渡り切り、身体を反転させて川側の土手に転がり込んだ。もう一度銃声が聞こえると、ユーゴヴィッチが乗り越えた土手の草がパツと舞った。曹長が身を隠すのを確認するとヴィルトウールも射撃を中止し頭を引っ込める。

「ここからじゃ距離がありすぎて正確に狙えません！」

ダルクス人のビセンテがわめいた。

「当たらなくとも構わん！注意を逸らすだけでいい！」

戦車が橋に差し掛かる。グリゲラが狙撃のあつたらしい方向に砲塔の角度を変えて、機銃掃射を開始した。狙いをつけると言うよりも雑ぎ払うようにやかましい連射音を轟かせて撃ちまくった。

「行け！行け！」

ヴィルトウールが小隊員に前進を促すべく叫んだ。兵士たちが間を置いて順番に橋を走り抜ける。戦車が小銃弾を弾く金属音がふたつ聞こえてきた。

エシエンが真っ先にユーゴヴィツチの隠れる土手に飛び込み、渡りきったほかの兵士たちも戦車の影やスナイパーの死角になる場所に身を隠し始めた。

「右から回り込んで進め！」

隊員の半分ほどが対岸に達したのを確認したヴィルトウールは、ユーゴヴィツチへ川沿いを進むよう指示を送る。

「我々も橋を渡るぞ。バリー、ゼンデン。戦車まで突っ走るぞ。残り援護しろ！」

ヴィルトウールとほぼ同時にゼンデンが、そのうしろをバリーが続いた。スナイパーの巢となっている屋根から発射炎が2回見えたが、ヴィルトウールらから離れた橋を叩いただけだった。

「2時の方向！対戦車兵！」

戦車の影から前方を伺っていた17歳のリアン・シェーファー上等兵が叫んだ。ユーゴヴィツチらが回り込んでいる方向に開けた路

地があるのが見えた。よく見ると奥にある家屋の生垣へ繋がるように土嚢が積まれていた。その手前、路地の真ん中に帝国特有の装甲服で身を固めた兵士が身の丈を軽く越える対戦車槍を携えてぼつんとひとり踊り出ていた。

新手の敵に気がついた兵士たちは、上から狙撃兵に狙われているので体勢を低くしなければならず、咄嗟に射撃位置に移動することができなかった。

ヴィルトゥールが橋を渡り切ろうかというところで走りながらその対戦車兵に向けてガリアンを撃った。

対戦車兵はヴィルトゥールの射撃にやや怯んだようだったが、正確に狙われた射撃でないことが分かると、膝について対戦車槍を構えて発射した。

ドンツという低い発射音とともに打ち出された弾頭が煙を上げながら戦車に迫ってきた。橋を渡りきったヴィルトゥールは、弾頭が迫ってくるのを目視するとその場に伏せた。少尉に続くバリーとゼンデンも做って咄嗟に身を伏せる。

着弾の衝撃が、橋の上で腹ばいになった3人の身体を揺らした。

弾頭が戦車側面を保護する左側の装甲板に当たり、ガツンという音とともに炸裂して、装甲板や弾頭の破片を飛散させ、周囲にガラガラとまき散らした。ヴィルトゥールはすぐに起き上がると戦車の車体に沿って前に移動し、スナイパーに狙われないように身体の左側を隠しながら、戦車の装甲板吹き飛ばした敵兵士へ向けて牽制射撃を行った。

対戦車兵が背を向けて陣地へ引き返すと、さらに奥から3、4人の帝国軍兵士が土囊の陣地に飛び込んでくるのが見えた。

「移動しろ！」

ヴィルトールは戦車の車体を思いっきり叩きながら叫ぶと、再びガリアンを路地がある方に向けて撃ち始めた。

「あの路地の頭を押さえる！」

対岸に残っていたピレス、ビセンテ、ブラウンが橋をジグザグに走りながら橋を渡る。狙撃兵の銃撃はもうなかった。

ガリア戦車に損傷を与えた帝国の兵士は陣地に逃げ帰ろうと駆け出した。彼を援護しようとする二人の兵士が路地の左右から半身を出して小火器をこちらに放っている。

対戦車兵は鈍重な装備であるため動きはぎこちなく、こちらから銃撃を浴びせられていることで動揺したのか、可笑しなステップを踏んで踊っているかのようにも見えた。

小隊員らが射撃を加えている方向に、アシユリーが戦車を前進させる。グリゲラが機銃掃射をはじめ、敵対戦車兵の背中を撃ち抜いて滑稽なダンスを止めた。

「行くぞ！」

対戦車兵が倒れるのを確認して、ヴィルトールが戦車に続いて走りだした。仲間が絶命したのを見た帝国軍の歩兵ふたりは、すぐさま路地の影に隠れて姿を消した。

「アシユリーとじいさんが吹き飛ばなくて良かった。」

ユーゴヴィッチは息を切らしながらも平静を保ってぼやいてみせたが、エシエンとエリクセンは曹長の悪趣味な冗談に気の利いた言葉を返す余裕はなさそうだった。

「少尉たちがあの路地を塞ぎにかかる。回り込んで死角をカバーするぞ。」

土手を移動しながらヒョコヒョコと頭を出して位置を確認し、路地の奥が見える角度になるように移動を繰り返す。

土嚢は路地を半分塞ぐように積まれており、敵兵士はもっぱら戦車やヴィルトウルラがいる方向へ、身体を土嚢から出し入れして小銃やマシンガン撃っていた。

ヴィルトウルが戦車の後を進みながら、遠くで銃声が響いていることにやっと気がついた。第7小隊も交戦しているようだった。

数十メートル先に背中に穴の開いた帝国軍兵士が横たわっていて、その死体の上を2番目の死体を作らんとする両軍の銃弾が飛び交っている。

両軍の小火器のアンサンブルに、75mm戦車砲がアクセントを付ける。砲弾は路地に入った家屋の生垣と土嚢の間に着弾し、生垣の枝や葉とともに向かって右端にいた兵士一人を吹き飛ばした。残った左半分の土嚢に被弾した帝国兵の肉片がバラバラと降り注ぎ、悲鳴にも似た叫び声を上げて、砲撃を免れた帝国兵士が路地の奥に逃げ出した。

戦車砲の轟音のあと、ユーゴヴィッチが土手から這い出すと、路地は石畳の急勾配の坂になっていて、3人の帝国兵が駆け上がって行くのが見えた。

「12時の方向！始末しろ！！」

ユーゴヴィッチがエシエンとエリクセンに声をかけ、すぐさま射撃を始める。二人の若い兵士が這い出し、曹長に倣って帝国兵の背中をめがけて小火器を発砲する。

3人のガリア兵が放った銃弾が、坂を登る帝国兵3人のうちのひとりの脚に当たり、膝からくずおれると、今度は銃弾が2つ背中を叩いた。

ユーゴヴィッチら3人が走りだす頃には、ヴィルトゥールらが路地の左側の角に達していた。3人は右側の角を目指した。

家屋の壁にはペンキをぶちまけたような赤い粘度をおびた液体が飛び散っている。立ち込める土煙に遮られながらも、陽光に照らされその色が鮮やかに浮かび上がっていた。埃の臭いと火薬のすえたような臭いに混じって、人間の血の臭いが小隊員たちの鼻をついた。

「ピレス。」

ヴィルトゥールが空になったマガジンを引き抜きながら振り返る。ピレスは立ち込める臭気に顔をしかめていたが、振り返った上官に気がつくやとハッと我に返って気まずそうな表情に変わった。

「す、すみません。」

「第7小隊に繋げ。」

ヴィルトウールが構わずに無線のレシーバーを受け取る。

「こちら第4小隊。南東の出入り口を確保した。南門から川沿いに東へ200メートルほどのところだ。敵の抵抗は小さいが狙撃兵と対戦車兵を確認している。そちらも用心してくれ。」

ヴィルトウールが少し早口に告げる。ユーゴヴィッチらが路地の反対側に達し、家屋脇の土嚢に身を隠しながら路地の奥へ射撃を開始していた。傍らに転がっている、ばらばらになった帝国兵の死体には目もくれない。

「了解。こちらは南門の敵陣地を確保。バリケードを撤去し次第街に入る。」

無線から返ってきたのは、芯のある通る声だった。戦車の駆動音が混じり、時折小火器の発砲音が割り込んでくる。

「分かった。我々は東から回りこむ。援護が必要な時は呼んでくれ。」

「ありがとう。支援に感謝する。」

やや強張った声だったが、はっきりとした口調でギンター少尉が応答した。無線をプレスに返すと、ユーゴヴィッチがさつと前進の合図を送っていた。小隊員らが、小走りに路地に入っていく。

相変わらず血生臭い臭気が鼻をついていた。ヴィルトウールはガリ

アン小銃に新しいマガジンを装填すると力を込めて槓桿を引いた。
ガチャリという音とともに弾丸が薬室に込められるのを確認すると
ふと空を仰ぎ見た。

目眩をおぼえて少しふらつきかけたが、照りつける陽射しのせいか、
すぐそばの血の海を見たせいなのか、よく分からなかった。

5・前衛(前書き)

登場人物

(名前/階級/兵科)

>ガリア義勇軍第3中隊第4小队<
クロード・レイマン / 上等兵 / 支援兵

5・前衛

汗で濡れた袖をまくり、義勇軍支給の腕時計を見やると15時10分前を指している。太陽は幾分西に傾いたようだったが、それでも陽射しはまだ天高くあり、ジリジリと照りつけていた。

丘の上に比べると市街を吹き抜ける風は弱く、そのせいもあって先程の銃撃戦で忘れていた暑さが徐々に不快の度合いを増していた。

「第7小隊が南門を通過。市街に入った模様です。」

ピレスが通信を伝えると、汗で濡れた前髪をかき上げた。戦車上のグリゲラがタバコをふかしてニヤニヤしながらその仕草を眺める。

「ホテルは無傷だいいいな。こんな暑さだ、シャワーがないと困るだろ。」

背後からの視線を振り払うように、ピレスが車上の老兵へ向き直り睨みつける。彼女の小さな背中にある通信機が、振り向いた勢いで大きく揺れた。

「軍曹、ホテルは満室だよ。まずは、連中のチェックアウトを手伝ってやらないと。」

曹長が鉄兜を取り、短く刈り揃えられている濡れたブロンドの髪の毛を乱暴に拭い、いたずらっぽく口元を吊り上げて、グリゲラとピレスに交互にウィンクしてみせた。グリゲラがヒヒッと笑い、ピレスがそっぽを向く。

「チエックインにはまだ早い。それにホテルなんて呼べる立派なものはないな。」

年かさの少尉がブロンドの若者と老兵へ言葉を返し、むくれている女性兵士に頬を緩めて見せ無言で諫めた。

「敵はこちらを戦車ごと狭い街区に引き込んで、小突いては後退を繰り返し、見晴らしがきく“狩り場”に誘いこむつもりだろう。」

ヴィルトウールは、先ほど自分たちが走り抜けてきた、狙撃と土囊陣地の交差射撃を受けた方向へ顎をしゃくってから、街の中心方向に視線を投げた。

「恐らく“狩り場”は街の中心、風車塔広場だ。」

3人の下士官は、少尉の言う“狩り場”を敵の本拠点と読み替えていた。ユーゴヴィッチが苦笑いに短いため息を付け加え、ブロンドの頭を掻いた。

「“狩り場”のハンターたちは、さっきのお寒い連中とは数も火力も違う。」

「そのお寒い連中に装甲をもがれたがな。」

皮肉を添えたグリゲラが、先ほど被弾した車体左側面に向かって火がついたままのタバコを放り投げる。被弾箇所 of 応急処置をしていたクロード・レイマン上等兵に当たり、手にしていた工具をガシャンと地面に落としてしまった。

「街ん中じゃ、さっきみたいに不意を突かれることが多くなる。そ

れにコイツの身動きが取りにくい。お前さんらの盾になる前に、俺とアシユリーの棺桶になっちまうな。」

軍曹の言葉にヴィルトウールが頷く。

ブルールのような道幅が狭い市街地では、戦車の機動力は十分には発揮できない。市街地では接近戦になりやすく、敵は戦車に肉薄して攻撃を仕掛けてくるはずだ。動けなくなった戦車は障害物でしかなくなる。加えて街を極力破壊しないという作戦方針があるので、戦車による火力の優位性もなくなる。

ひとしきり思考を巡らせると、ヴィルトウールは街区を見渡した。

スナイパーが潜んでいた屋根が半壊した家屋にはゼンデンとフェルメイレンが登っていて、市街に続く小道の出口にはエシエンとブラウンが立って市街方向を警戒していた。

「我々の役目は、第7小隊の“エスコート”だ。」

『エスコート』という言葉に3人が顔を上げた。ユーゴヴィツチのような物言いになってはいたが、当のヴィルトウールに本家のような浮ついた様子はなかった。

「俺たちが喰いつかないと、連中は正面からやって来る獲物に群がるでしょうね。」

「ガリアの英雄をウサギにするわけにはいかな。」

「要するに!」

男たちの応酬に嫌気がさしていたピレスが、遮るように声をあげた。

「我々が先行して敵を引きつけなければいいんですよ!?!」

ユーゴヴィッチとグリゲラが目丸くして顔を見合わせた。ヴィルトゥールは口元を少し緩め、はつきりと頷いて返す。

「役目を全うするまでだ。我々が道を拓く。」

こちらを見つめる3人の小隊付き下士官を見回してヴィルトゥールが語気を強めた。

「装備を確認して前進だ。」

6・市街地攻防（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

ユーリ・フリングス / 伍長 / 衛生兵

ヨアン・ヴィンター / 上等兵 / 対戦車兵

クラレンス・トロハウスキ / 上等兵 / 対戦車兵

6・市街地攻防

兵士たちが石畳の道を進む。

建物が並ぶ場所はやや慎重に、建物が途切れる場所は素早く進んだ。戦車は街区を挟む通りの、視界が良くより広い方を選んで前進した。小隊は街区に面する両端の通りを二手に分かれて進んでいる。互いの死角を補いあうように交互に前進する。建物や小道に敵が潜んでいないか、街区をひとつずつ確認し合いながら風車塔広場を目指した。

「壁際に張り付いて進め。上方に目を配るのを忘れるな。」

少尉の言葉が隊列の先頭から飛んでくる。自分たちの位置よりも西側の大通りの方向から散発的ながら銃声が聞こえる。銃弾は第7小隊に向けられたものと思われた。

「曲がり角は二人ずつでやるぞ。壁際の奴が先に小さくまわる。外側のやつは大きく素早く相棒に続いてまわる。カバーは交互に。」

色白でそばかす顔のテイラー・エリクセン上等兵は、家屋の石壁に背を預けマグス短機関銃を構えて前を進む隊員の後に倣って進んだ。角を曲がると外壁が崩れ中がむき出しになっている建物が現れた。

木製のテーブルや椅子が、部屋の奥へ爆風で吹き飛んでしまったように、脚が折れているもの、真ん中でふたつに折れたもの、原型をとどめていないものもあった。丘からの風が運んだ埃や枯れた木の枝葉が、めくれ上がっているテーブルクロスや焦げたカーペットの

上に堆積している。

外壁に機関銃の弾痕が刻まれたアパートの2階の出窓には、住人が世話していたであろう鉢植えが並んでいたが花はもちろん、干からびた茎や葉すらなく、今となってはただの容れ物だった。

「この道の出口が狩り場の入口だな。」

左翼を進む隊列の先頭にいるユーゴヴィッチが曲がり角に達していた。機関銃の発射音に続いて、応射する小火器の音が鳴り響いた。手信号で2本指を立てて、2名ずつで角を曲がれと合図する。

ダヴィド・ゼンデン上等兵とダルクス人兵士のビセンテが先頭で角を曲がる。ゼンデンがさつと角を覗くと5メートルほど先の2階建ての建物の外壁が屋根から崩れて、瓦礫が道の左側半分を埋めていた。瓦礫を過ぎた右奥には3輪トラックが横向きに駐車しており、通りの奥が見通せなかった。

一帯に敵の姿が無いことを確認すると、ゼンデンが顎をしゃくって相棒に知らせる。ビセンテが外側を追い越して素早く瓦礫の山に取りついた。ビセンテが無事進み出たのを確認して、ゼンデンが通りに入って瓦礫を迂回しようとして外側を追い越すように進む。

左翼のふたりを見届けていたヴィルトウールが、後ろの隊員に合図する。少尉のすぐ後ろについていたエリクセンが角を曲って進み出る。先行した長身のゼンデンが、瓦礫の山を右から回り込もうとしていた。エリクセンがゼンデンに倣い瓦礫を避けるコースを取って後ろについた。

巨大なミシンが動いているかのような規則的な連続音が通りの奥か

ら響く。勿論、音を発しているのはマシンとは似つかない代物であり、針の代わりに7・92mmの弾丸が人間の身体に穴を開けるべく唸りを上げていている音なのだ。

大通りで唸っているであろう機関銃の音を合図に、その3輪トラックの影に取りつこうとエリクセンが小走りに駆けだす。

今度はマシンガンとは比べものにならない大口径の砲が放たれる音が響き渡った。反射的に視線を上げると、3輪トラックのさらに先に隣の街区に面する通りが走っていて、沿うように立つ石塀の所々崩れている隙間から発射炎が瞬いて、いかつい鋼鉄の肌が照らされるのを微かに捉えた。

その正体を認識するよりも早く、ビリビリと空気を揺らす振動が知覚され、脚が地面を離れて身体が右斜め前に吹っ飛んでいた。3輪トラックの車体に打ち付けられるのと同時に着弾の衝撃と爆音が鳴り響き、一瞬視界が真っ白になった。

「戦車だ!!!」

誰かが叫び声を上げたが、爆音で聴覚を奪われたエリクセンには届かなかった。通り一帯に瓦礫がガラガラと降り注ぎ、埃と煙が立ち込める。砲弾はゼンデンとエリクセンが迂回した瓦礫の山に着弾したようだ。

バタバタと宙を泳いでいたエリクセンの脚が地面を捉え、よろけながら何とかトラックにもたれかかると、立ち込める土煙と瓦礫の雨の向こう、半壊になった建物の角に仰向けになってうめいている味方の兵士が見えた。

「しつかりしろ!!」

ユーゴヴィッチが倒れていたビセンテを抱き起こし、後ろに引きずっていった。鉄兜が飛ばされ、顔が真っ赤に染まっているのが見えた。ビセンテが横たわっていた地面にパツと小さな土煙がいくつか立ち、それが敵の銃撃であること、そして音が聞こえないことをエリクセンはようやく理解した。

「正面だ！撃ち返せ！」

帝国兵の姿も、戦車の車体もヴィルトゥールからは見えていなかったが、二人の隊員が潜んでいるトラック以外の方向へガリアン小銃を撃ちまくった。

「11時の方向に敵戦車!!」

ユーゴヴィッチが戦車の死角までビセンテを引きずっていくと、すぐに身を屈めて正面へ応射を始めた。ヴィルトゥールが曹長の射撃方向を目視しようと曲がり角から身を乗り出した。

砲撃で瓦礫が吹き飛んだことで、通りはやや見通しがきくようになっていた。3輪トラックの先、通りの左側には崩れた石塀が続いていて、隣の街区との間に横道が走っていた。距離にして、トラックから20メートルとない。

戦車は帝国軍の一般的な赤褐色ではなく鈍色のカラーリングの中戦車で、その横道の角に立つ石塀の風穴からこちらへ砲身を向けている。小火器による迎撃もその戦車が居座る十字路一帯から向けられているようだった。

「散開しろ!!」

曲がり角に潜んでいた兵士たちが身を低くしながら通りに展開する。ある者は、ユーゴヴィッチのいる半壊した建物の影に小走りに向い、ある者はトラックを遮蔽物にして見を低くして忍び寄った。

ヴィルトゥールも3輪トラックの影に飛び込もうと駆け出していた。通りに踊り出でず、石塀の風穴から発射炎が見えたので、ヴィルトゥールは一瞬背筋が凍りつくのを感じた。

砲弾は先ほど自分たちが潜んでいた曲がり角の正面の建物に命中し、木材やレンガといった様々な建材を粉々にして飛散させた。とどまっていたら爆風と瓦礫による死のシャワーを横から浴びていただろう。

ユーゴヴィッチら左翼についていた隊員は、壊れた家屋に踏み入って残っている壁などを遮蔽物にしながら、十字路一帯に小銃や短機関銃による制圧射撃を加えていた。

十字路には鉄骨をぶつちがいにした障害物が設置されていて、自分たちのいる家屋と同じような崩れた建物の影から、数人の敵兵士がわらわらと湧いて出てきてこちらに小火器を撃ち返してきた。

ヴィルトゥールが素早くトラックの影に滑り込むと、その後をピレスとバリー、長大なランカー対戦車槍を担いだクラレンス・トロホウスキ上等兵と、小隊最年少のヨアン・ヴィンター上等兵が続いた。

「次はこのトラックが吹き飛ばすぞ！素早くやれ！」

ヴィルトゥールは手榴弾を取り出すと、バリーとピレスがそれに倣

った。土煙で顔を黒くしたゼンデンと駆け寄ってきた仲間を見て気を持ち直したエリクセンがトラックの前方の射撃位置ににじり寄った。

手榴弾のグリップの柄の端にあるピンを引きぬいて、トラック越しに思いっきり放り投げる。女性兵士ふたりも小隊長に倣ってトラックの向こう側、十字路の方向に思い切り投げ込んだ。それを見てゼンデンとエリクセンが身を乗り出して引き金を引き絞った。

トラックから左斜め後方にいたユーゴヴィッチは、トラックの影からの3人のスローイングを見て、激しくガリアンを対角の建物に撃ち続けた。3つのうちひとつは障害物の手前、もうひとつは障害物を越えて十字路のほぼ真ん中、3つ目はさらに奥の敵が潜んでいる家屋の影にそれぞれ転がり込んだ。陣地に入ったふたつを投げ返そうと、それぞれ帝国軍兵士が咄嗟に反応したのをユーゴヴィッチは捉えた。

障害物の方へ小銃弾を撃ち込むことを選択すると、もうひとつの選択肢だった方から手榴弾が投げ返されるのが見えた。

3つはほぼ順番に炸裂した。ふたつは障害物の前後で破裂し、うちひとつはラグナイトによる青白い発光に混じって赤いしぶきが舞い上がった。投げ返された、最後のひとつは自分たちの射撃位置のすぐ手前で炸裂した。

「あの家だ！！もう一回やれ！」

身を翻して爆風を回避したユーゴヴィッチが後ろの隊員へ叫んだ。すぐにエシエンがライフルの銃身にランドグリーザー（榴弾発射器）を取り付けにかかる。対角の家屋からの射撃は、今度はこちらでは

なく手榴弾の投擲位置であるトラックの方へと向けられていた。

ヴィルトゥールが周囲の部下にトラックから離れるように指示しているのが見える。4人の兵士が通りを少し戻りながら、ユーゴヴィツチたちがいる家屋を目指して通りを横断しはじめた。

ユーゴヴィツチは、トラックのボンネット越しに応射していた長身の兵士がスローモーションで仰け反るように倒れるのを見て、顔から血の気が引いていくのを感じた。

「援護しろ！！」

曹長の声と同時に応射が再開され、ほどなくランドグリーザーのバズという発射音が続く。ユーゴヴィツチは斜め前で倒れているのが、ゼンデンであることに気がついた。ゼンデンのすぐ横にいたエリクセンが負傷した仲間を抱き起こすと、肩を抱いてトラックから離れた。

ランドグリーザーから発射された榴弾は、人間が投げたものより遙かに速く正確に目標に達した。榴弾は建物の奥に飛び込んで炸裂し、壊れて大きく口の開いたような建物の1階部分から、粉々になった家財道具と一緒に人間の肉片を伴って吐き出された。

直後、3度目の砲声が轟いてトラックの後部が吹き飛ぶのがはっきり見えた。トラックから離れた位置でヴィルトゥールが投げ出されたが、すぐに立ち上がり再び移動を始めた。さらに離れた位置では二人の兵士が折り重なって倒れるのが見えたが、小柄な方の兵士がすぐに起き上がると、長身の兵士を抱えて同じく移動を始めた。

敵の戦車が唸りを上げて、横道をスライドするように動き出す。バ

リケードと半壊した家屋の陣地を叩かれ、死角に潜んでいたユーゴヴィッチたちの位置に気がついたようだった。十字路の真ん中に姿を見せた戦車は、横切るように移動しながら、砲塔をゆっくりとこちらに向けて狙いを定めてきた。

敵の歩兵がほぼ一掃されたのを見計らって、トロホウスキとヴィンターの小隊付き対戦車兵二人が家屋前の瓦礫を越えてトラックの前へ躍り出た。砲塔に狙いを付けられたユーゴヴィッチら数人の兵士が潜んでいた家屋から一目散に飛び出す。

戦車の砲塔が次弾を発射するよりも早く、二人の対戦車兵が放ったランカーの弾頭が車体を捉えていた。片方は戦車側面のスカート装甲板を吹き飛ばし、もう片方は本体側面に当たって炸裂した。

対戦車槍の衝撃でガクンと揺れて移動が止まったが、今度はこちらに車体正面を向けようと旋回を始めた。今の攻撃で主砲が動作不良を起こしたか、次弾装填が間に合わないとみて車体前面の機銃を向けようとしている。

ヴィルトゥールは戦車の視界から脱していないゼンデンを抱えているエリクセンに気がつくやと夢中で二人のもとに駆け出した。

二人に手が届こうとしたとき、先ほど自分たちが潜んでいた曲がり角、自分たちを挟んで敵戦車の反対方向からグリゲラの駆る戦車が姿を現すのが見えた。咄嗟に二人を伏せさせ自分もその場に伏せると、徹甲弾が唸りを上げて頭上を過ぎていくのを刹那に見た。

ガンツという金属がひしゃげる音の後、ややあつてからくぐもった爆発音が通りに響き渡った。

「少尉！無事ですか！？」

ピレスの問い掛けにヴィルトゥールは手で合図し、庇ったふたりの兵士へ視線を投げた。エリクセンとバリーに抱き起こされたゼンデンは胸の上部を撃ちぬかれていた。苦痛に歪む顔は黒く汚れ、汗で濡れていた。

戦車の後に続いていた、小隊付き衛生兵のユーリ・フリングス伍長が駆け寄って、医療キットのカバンから、ラグナエイドを取り出す。戦車が停車し、砲塔のハッチからグリゲラが飛び出してきた。

「遅れてすまない。地雷の始末に手間取っちまって・・・」

グリゲラは戦闘の痕跡を確かめるように通り一帯を見回しながら言った。

ヴィルトゥールは一帯に鳴り響いていた銃声が止んでいたのに気がついて敵を殲滅したのだと悟った。

銃声の代わりに、何度も同じ名前を呼ぶ声が聞こえてきた。怒声にも近かった声は次第に震えながら泣き声に近くなっていた。

「少尉。」

ユーゴヴィツチが近づいてきたのを見て、ヴィルトゥールはゆっくりと立ち上がった。副官の方は見ず、今ではもう泣いている兵士の方を見やった。

ピセンテの傍らに跪いてボアス・エシエン上等兵が泣き声を上げていた。今は動かなくなったダルクス人の兵士は頭から右顔にかけて血で真っ赤に濡らしていた。

ヴィルトウールは、しばしビセンテと泣いているエシエンを見つめてから、傍らに集まっていた3人の下士官へ向き直った。

「負傷者の手当てを急げ。残りはすぐに前進だ。」

ユーゴヴィッチ、ピレス、グリゲラは頷くだけで何も言わなかった。

大通りからの銃声と砲声が間近に迫ってきているのを感じ、下士官3人は踵を返してヴィルトウールから離れていった。

ユーゴヴィッチが近づいてきたのを見やり、エシエンが立ち上がった顔を拭くと鉄兜を被り直して歩き始めた。

上等兵が戦場に戻るのを見届けて、ヴィルトウールも歩き出した。

7・死闘の序曲（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第4小队<

ドワイト・ブームスン / 伍長 / 突撃兵・軽機関銃手

7・死闘の序曲

ブルールの街を囲む緑の丘を進んでいたのが1時間前のことだったが、その間に陽が西に傾きかけていた。オレンジ色に染められていく街は、小さく素朴な田舎街であった。それ故、いたるところに残る破壊の痕が街のスケールに比して大きく痛々しいものに映る。

第4小隊付きの通信兵である、25歳のフローラン・ピレス伍長は、街の中心部へ歩を進めるにつれて、錯覚に近い既視感が胸に立ち込めてくるのを感じていた。

2階部分が完全に崩れ落ちた建物や、部屋と部屋を隔てる壁が吹き飛んで、ぶち抜かれているアパート、建物の骨組みさえも焼け落ちて、粉々になった瓦礫だけがぶちまけられた道。道の石畳が見える箇所も所々剥がれたり、砕けて穴が開いている。

破壊の様だけを見れば、辺境のブルールも首都近郊のヴァーゼルの街も変わらなかった。ヴァーゼルはピレスが経験した最初の戦場だった。そして、結婚の約束を交わした相手が命を落とした街

ピレスの婚約者は開戦初期の混乱の中、義勇軍に召集されヴァーゼル防衛の任にあたる部隊に配属された。帝国軍の侵攻があまりにも早く、ヴァーゼルの防衛部隊はまともな戦力が整わないままでの戦いを強いられ、その兵力のほとんどを失った。

ヴァーゼルの戦いで婚約者が戦死したと伝えられたが、己の目で事実を確かめなければ到底信じることができなかった彼女は、すぐに義勇軍へ志願し婚約者が散った戦場に自ら向かう道を選ぶ。

第4小隊に配属されたピレスは奪還戦を戦い抜いた後、ヴァーゼルの廃墟の中を亡き婚約者の影を求めて彷徨い歩いた。寒々しいほどに何もかもがその姿を消された街を歩き、彼の後を追って自分も消え入りたいという思いがこみ上げてきた。

絶望しか残っていないなかったピレスだったが、ヴィルトウールやユーゴヴィツチらヴァーゼルをともに戦い抜いた小隊の仲間、また命を落とした小隊の仲間が存在に背中を押されるものを感じた。皆、何かを守るために戦っている。死んだ婚約者と同じように、愛する誰かを守るうと戦っている者もいる。悲しみが癒えることはないが、ピレスは死んだ婚約者の思いに報いるために、前を向いて戦いを続けることを選んだ。

目の前の戦いを生き抜いて勝利すること、それがこの戦争を終わらせるための一番の近道。戦いを終わらせることが、死んだ彼へ酬いる道だと信じて

ピレスは目を閉じ深くゆっくりと呼吸をした。再び目を開けると、前方に広場への入口が見えてきた。

小隊は、衛生兵のフリングスと胸を撃たれたゼンデン、脚に軽症を負ったエリクセンを残し前進を再開した。戦死したピセンテもフリングスらのもとにいる。

小隊は、通りを埋める瓦礫の間を縫うように進んでいた。第7小隊からの通信によると、街の中央広場に近付くにつれて、敵の抵抗が激しさを増しているという。

大通りは地雷や障害物で戦車の通行を困難にし、瓦礫や建物で巧妙に隠蔽された対戦車砲や機関銃からの迎撃が不意を突いて襲いかか

つてくる。また、高所に複数潜んでいる狙撃兵に歩兵が釘付けにされ、速やかな攻略ができずにいるらしかった。

第4小隊は大通りを迂回するように東側の街区を抜けて風車塔広場を目指した。帝国軍の戦車と歩兵数人を殲滅した通りを直進していた。

先頭のヴィルトゥールが通りの出口にたどり着くと、後続の兵士たちへ手のひらを返して止まれと合図する。ヴィルトゥールは2階部分で吹き飛んだ建物にぴったりと張り付いて、角からさつと顔を出して広場方向を見渡した。

広場には、背の高い大きな風車塔がそびえ立っていて、今いる家屋から100メートルとない距離にあった。

ヴィルトゥールは一瞬のうちに3つの目標物をその目に捉えた。

翻る帝国軍旗と、2つの砲塔を備える重戦車、土囊の銃眼から覗く機関銃

大通り沿いの街路樹の植え込みに、さらに土囊を積み上げて作られた陣地から重機関銃の太い銃身が突き出しており、大通り方向をさかんに撃っている。

その機関銃陣地より後方の風車塔に近い位置に、先ほど破壊した中戦車よりさらに大きい重戦車が、機関銃と同じ方向を向いて控えている。ただ、エンジンが動いている音も様子もない。駆動系統が損傷しているのかもしれないが、こちらからは確認できなかった。

ふたつの目標物のさらに奥、バリケードや土囊で二重、三重に築か

れた陣地に軍旗が翻っていた。広場に響き渡る銃声は、主にそこから大通り目掛けて放たれた小火器のものようだった。

ヴィルトウールが頭を引つ込めるのと同時に、顔のすぐ横の石壁が銃弾で削られ、より大きな銃声が届いた。破片が顔の左側を叩き、ヴィルトウールは呻いた。

「敵本拠点だ。機関銃に重戦車、10時の方向、距離80。第7小隊を狙ってる。」

「それに狙撃兵。」

ユーゴヴィッチの声に構わず、ヴィルトウールは目をこすり、細かな破片を掻き出している。左頬の裂傷に血が滲み出て、しかめた少尉の顔はひどく疲れて汚れていた。

「連中は正面の防御に必死だ。我々は敵の側面から注意を引きつける。」

「まずは鷹の目を潰したいですね。」

曹長の視線を感じ、ヴィルトウールが左頬の血を拭う。

「エサに喰いつかせて、顔を出したところを仕留めるぞ。」

フェルメイレンを見やり、ヴィルトウールが背囊の紐を解いて背負っていた装備を下ろし始める。

「機関銃を排除できれば彼らの道を拓いてやれるが、ここからでは角度がなくて狙えない。強固に守られているから、接近して上から

叩くしかない。」

「1ブロック戻って裏から近づけば、マシンガンの鼻先に出られま
すね。」

ユーゴヴィッチがもときた道へ親指を立てて指し示す。

「分かった。隊を分けよう。」

ヴィルトウールが言い終わる頃には曹長の方を見つめていた。機関
銃破壊の指揮を取れという意味だった。

「曹長たちが銃座を潰したら、第7小隊とともに一気に攻勢を掛け
る。」

ふたりのやり取りを見守っていた小隊員たちが頷く。ヴィルトウー
ルはこちらを見つめるいくつもの顔に、ひとつひとつ目を合わせて
応える。

傷つき汚れて疲労に顔を歪める者、恐怖に目を見開いている者、不
安に駆られ固く口を引き結んでいる者。一人ひとりに、まっすぐな
眼差しを返す。

「よし、始めよう。」

ユーゴヴィッチがエシエンとブラウン、ヴィンターを従えて来た道
を駆け戻る。戦車脇を通り過ぎると、車上のグリゲラが身体を引っ
込めてハッチをバタンと閉じた。

走り去る曹長らの背中を見送ったピレスは、残った隊員たちを見回

した。

バリーがヴィルトゥールと同じように背囊や装備を下ろし、囃役に成り代わろうとしている。レイマンが新しい弾帯をシェーファーに渡すと、彼女はそれをヴィルトゥールに次いで年かさのドワイト・ブームスン伍長に渡した。伍長は弾帯をベルト給弾式に換装されたT-MAG軽機関銃に装填するとコツキングレバーを引いた。トロホウスキは対戦車槍に新しい弾頭を据え付けていて、フェルメイレンはスナイパーライフルのスコープを覗き込んで見え方を確認しているようだった。

ピレスがその様子を眺めていると、ヴィルトゥールと目が合った。男は小さく頷いて視線を外すと、小銃に新しい弾倉を差し込んで積桿を引いた。ピレスは無言のまま、男に倣って頷き返すと、自身の装備の点検を始めた。

銃声が相変わらず広場から轟いていたが、隊員たちに言葉はなかった。彼らはこれから始まる殺し合いの準備を淡々と進めた。

8・先陣の歌姫（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第7小隊<
ブリジット・シュターク / 伍長 / 突撃兵

8・先陣の歌姫

ユーゴヴィッチを先頭に、エシエン、ブラウン、ヴィンターが縦に並んで西陽の射さない暗い路地を進む。左にカーブした路地の先に、1階部分が完全に吹き飛んだ建物が現れ、大通りの様子が見通せるようになっていた。さながら横長で平べったい額縁よろしく、大通りの様子が切り取られているかのようだった。

その“額縁”に収まっていたのは、ガリア特有の青いカラーリングで正規の量産型ガリア軍戦車とは異なる形状の戦車、第7小隊のエーデルワイス号だった。間断なく轟く銃声や砲声と、小銃弾や機関銃弾を弾く金属音がユーゴヴィッチらのいる路地にまで届いてきた。路地のカーブのさらに先は、広場の手前で大通りへ出る横道になっていて、鋼鉄のレールで出来た障害物がその出口を塞いでいる。

「あそこだ！行け！」

カーブの出口に帝国軍のふたりの歩兵が潜んでいるのが見え、ユーゴヴィッチは叫ぶと同時にガリアン小銃をその出口に向けて発砲した。大通りを伺っていたふたりは、路地の先から現れたガリア兵4人を見るや、慌てて小火器を構え直した。

敵の応射を受ける前に、“額縁”の建物にエシエン、ブラウン、ヴィンターが飛び込み。遅れてユーゴヴィッチが滑り込んだ。

建物はカフェテリアかレストランのようだったが、かつての姿を物語る品はすべて吹き飛んでなくなっていた。大通りは10メートル程の幅で戦車2両はゆうに通れるはずだが、両側の建物が激しく破

壊されていて、今ではその壊れた壁や屋根が瓦礫となって通りの両脇に小山を築き、戦車の進行を妨げている。

エーデルワイス号の隣に小型の軽戦車が並び、どちらも致命的ではないにしろ攻撃を受けて傷ついていた。それぞれの後ろに数人のガリア兵が隠れ、さらに後ろの路地や瓦礫などの遮蔽物に身を隠している姿が見えた。時折、応射する者もいるがほとんど頭を出すことも出来ず、当然狙いをつける暇もないようだ。

ヴィンターとブラウンが裏路地を警戒し、エシエンとユーゴヴィツチが広場の方向を覗く。目標の機関銃陣地は、向かって右端に据えられていて唸りを上げて弾丸をばら撒いている。瓦礫が遮蔽物になって、エーデルワイス号の射線から隠れる位置にある。

機関銃陣地から大通りを挟んだ反対側の路地と建物から、歩兵が姿をのぞかせながらライフルや短機関銃を撃ち放っている。機関銃陣地と十字砲火を浴びせられるように陣取っているのが分かった。機関銃陣地の左後方に重戦車があるはずだが、こちらからは確認できない。エーデルワイス号からも建物や瓦礫に遮られ見えないようだ。第7小隊のマーキングが施された軽戦車がジリジリと前進を始める。右前方の瓦礫を回りこむようにして進み出る。遮蔽物をやり過ぎして、ユーゴヴィツチらの獲物である銃座を狙おうとしているのだと分かった。

機関銃弾が車体を叩く音がした直後、それらをかき消すように爆発が巻き起こった。軽戦車の鼻先に重戦車の砲弾が着弾し、破片と瓦礫と土埃の噴水が大通りの真ん中で吹き上がった。軽戦車がたまたま後退する。

「ちくしょう!!」

巻き上げられた埃と瓦礫とが、4人が潜む建物に吹き込んできて、エシエンが顔を背けて喚き散らした。

「銃座を狙える位置は、重戦車の射線に頭を抑えられてる。」

ユーゴヴィッチが、土埃で霞む通りを見つめたまま様子を伺う。

土煙が消えかかったところで、対角の路地から現れた帝国兵が4人に気がついたのか、慌ててこちらに向き直る。しかし、銃を構える間もなくユーゴヴィッチの放ったライフル弾に顔を撃ち抜かれた。射線に気がついた何人かの帝国兵が、大通りから1階が空っぽになったカフェテリアへと狙いを変えて撃ってきた。

「伏せろ!!」

ユーゴヴィッチが怒鳴る。その声をかき消すように小火器の銃声と、あたりの瓦礫を叩く銃弾の音が相次いで起こった。

4人がすぐに物陰に引っ込んで身を伏せる。手榴弾が放り込まれ、ユーゴヴィッチがすぐさま拾って通りに投げ返すと、爆発音とまたもや破片と瓦礫と土煙が返ってきた。

「上から狙うにも機関銃を潰す前に、あそこから撃たれやしませんか?!」

ブラウンが息を荒らげながら訊いてくる。

「ここは援護するには申し分ないが、この人数じゃあの連中とはや

りあえない。」

「裏道も塞がれてます！」

ウィンターが裏路地の様子を伺いながら、対戦車槍を構えている。

通りに釘付けになっている第7小隊の方を見やる。ここに留まっ
ていては、敵の的でしかない。戦車が立ち往生している以上、歩兵だ
けの力で道を拓くしかない

ユーゴヴィツチの視線の先、軽戦車の背後で第7小隊の兵士が、こ
ちらに気がついたのか、他の味方に右翼の友軍を撃たないように手
信号で知らせているのが見えた。

すると指示を送ったその兵士が軽戦車の影から飛び出して、マグス
短機関銃を腰だめで斉射しながらこちらに走りこんできた。銃弾が
ヒュンヒュンと唸りを上げる通りを斜めに横切って、ユーゴヴィツ
チたちのいる1階部分に駆け込んできた。

その兵士が眼の前までやって来て、初めて女だということに気がつ
いた。階級章から伍長だと分かった。

「アンタたち、第4小隊だろ?!この先はどういう状況なんだい?
!」

長身で手足が長く、赤毛の髪を頭の後ろでふたつにまとめている。
色白で目つきはプレスよりもきつい切れ長だが、瞳には艶やかな光
を湛えている。軍服の襟が立てられて間から細い首が覗き、黒いチ
ョーカーが目を引いた。

「アンタ、無茶するなあ。援護する間もなかった。」

エシエンが目を丸くして、女が駆け抜けてきた方へ顎をしゃくる。

「アタイの言う事が聞こえなかったのかい？」

女に睨みつけられた、エシエンがたじろぐ。やがてユーゴヴィッチが指揮官であると悟ったのか、目の前までやってきた。

「第4小隊、カレル・ユーゴヴィッチ曹長だ。こいつらと一緒にあらんたらをエスコートしてきたんだが、伍長殿の勇敢さに見とれてたんだ。許してもらいたい。」

若い曹長の返答に女は鼻で笑い、鋭い目付きのままユーゴヴィッチを睨みつけた。

「アタイを口説きたいんなら基地に帰ってからにしろ、坊や。」

ユーゴヴィッチは肩をすくめてニヤリと口元を歪めてみせた。

「生きてアマトリアンに帰れたらそうするよ。」

女がため息混じりに少し微笑んで右手を差し出した。

「分かった分かった。アタイはブリジット・シュターク伍長。第7小隊突撃兵だ。」

ユーゴヴィッチは頷いてその手を握り返し、広場の方へ親指を立てた。

「本陣地まで距離にして50。ここからは見えないが奥に戦車がある。さつきおたくらの“クルーザー”を狙ったやつだ。」

「ああ、銃座を潰したいけど頭を出したらあの通りさ。戦車が出せなきゃ、歩兵がやるしかないけど、あれじゃ近づけやしない。」

ユーゴヴィッチが頷きながら続けた。

「銃座は上から狙う。ただ、通りの反対側から狙い撃たれるのが厄介だね。生憎俺たちには人手が足りない。」

シュターク伍長が小さく頷く。

「援護が要るってことだね。」

シュターク伍長が銃身に火力強化が施されたマグス短機関銃を担いでほんつと肩を叩く。

「合図をしたら、反対側の連中にありつたけの弾を撃ちこんで敵を釘付けにしてくれ。」

ユーゴヴィッチ曹長の状況説明をひと通り聞いたシュターク伍長が、短機関銃のスリングを肩に掛け直し、艶っぽい唇をつり上げて、切れ長の目でウインクをしてみた。

「任せときな。」

ユーゴヴィッチが、口元を緩めて見つめ返す。3人の男と目配せをして、カフェの裏手に向かった。背中越しにシュターク伍長のマグス短機関銃が早速唸りを上げていた。

9・逆襲（前書き）

登場兵器

（名称／主武装）

>ガリア義勇軍<

ガリア主力戦車 / 24口径75mm砲・7・92mm戦車機銃

>帝国軍<

帝国軍重戦車 / 34口径76・2mm砲・12口径122mm

固定榴弾砲・7・62mm戦車機銃

登場火器

（名称／型式／種類／携行兵科）

>ガリア義勇軍<

ガリアン / S1 / 小銃 / 偵察兵（士官・下士官携行用）

ガリアン / 1 / 小銃 / 偵察兵・支援兵

T-MAG / 20 / 軽機関銃 / 突撃兵（ベルト給弾式

仕様・小隊支援火器）

GSR / 10 / 狙撃銃 / 狙撃兵

9・逆襲

負傷者と曹長ら4人を除く第4小隊の隊員が、破壊された街区の影に身を潜めている。

広場に面する建物の壁には、ガリアの国旗色であるトリコロールの戦闘服を纏ったライフル兵3人がびったりと張り付いている。さらに十数メートル後方に、同じくトリコロールカラーのガリア軍戦車が控え、その両脇に歩兵が小火器を携えてびったりとくっついていてる。

エリック・ヴィルトゥール少尉が壁に手を突いて呼吸を整え、ちらと後ろの隊員の方を見やった。すぐそばの女性兵士二人が頷くのを確認し、目で合図して素早く広場方向を覗き込んだ。すぐに頭を引っ込めると、広場の方向から銃声が届き頭があつたすぐそばの石壁が削られた。今度は破片を浴びなかった。

間を置かずにヴィルトゥールが広場に飛び出した。20メートルほど先に転がっている片方の車輪が無くなった荷車目掛けて疾走した。銃声が響きヴィルトゥールのすぐ後ろで石畳が爆ぜた。

その狙撃兵が放った銃声をスタートの合図にして、第2走者のバリーが飛び出す。同じタイミングで戦車が唸りを上げて前進し、控えていた隊員たちが広場入口の角に取り付いた。

ヴィルトゥールが遮蔽物にしては頼りない荷車に到達する。次のスタートの合図が響き、銃弾がバリーではなく、彼女が飛び出した建物の方に飛んでいった。

戦車を遮蔽物に姿を隠しながら、19歳のマシュー・フェルメイレ

ン上等兵が銃身延長を施したGSRスナイパーライフルを構えて、広場の入口へにじり出た。スコープの照準は、風車塔上階の石枠の窓から覗く鉄兜をその中心に捉えている。

姿を現したガリア軍戦車に、慄いたのか鉄兜が小さく揺れたが、次の瞬間にはさらに大きくガクンと後ろに揺れて出窓から消えて見えなくなった。バリーが少尉の隣に滑りこんで、もときたコースを振り返ると戦車の影に潜んでいるフェルメイレンが、硝煙を吐くライフルの楨杆を引いて、狙撃兵を葬った弾丸の空薬莖を吐き出させていた。

今度は先ほどとはすこし違う銃声がこちらに届く。それも複数だ。ヴィルトゥールが荷車の影から覗くと、敵本拠点から歩兵がこちら一帯に向かって小火器を放っていた。

「応射しろ!!」

ヴィルトゥールが叫ぶのと同時に、ブームスンとシエーファーが姿勢を低く保ちながら小走りに建物の角から飛び出した。プレスが飛び出したふたりの援護射撃を始め、ヴィルトゥールとバリーも身を起こして同じ方向へ撃ち返した。

T-MAG軽機関銃を運ぶふたりが、折れた柱が折り重なってできた瓦礫の遮蔽物に取り付くと、鈍重な支援火器を据え付け、すぐに敵の本拠点に向けて射撃を開始した。銃弾がブスブスと土嚢に突き刺さると、いくつも土煙が上がり、帝国軍兵士が身を伏せたのが見えた。

「移動するぞ!!」

ヴィルトウールの掛け声でバリーが立ち上がり、ふたりが次の隠れ場所目掛けて影から飛び出す。風車塔を中心にトラックフィールドを描くように走りだした。

ヴィルトウールが目指したのは、かつて新聞やタバコの売り場になっていた小屋だった。街の住民が往来する広場にあつて、男たちがそばでタバコをふかして新聞を手に他愛のない話をして笑い声を上げる――

ずっと昔から目の前に立つふたつの風車塔を見上げてきた男にとって至極ありふれた「日常」の光景が脳裏をよぎる。鳴り響く銃声と、火薬の臭いと、かつての街とは似つかない姿を晒す街並みが男を兵士に引き戻した。

^{ランナー} 囚役のふたりから注意を逸らすかのように、グリゲラの駆る戦車が広場へと躍り出る。同時に戦車が進む方向とは逆の方向へ、フェルメイレンを先頭にふたりの兵士が走りだす。トロホウスキは、ガチャガチャと鈍重な装甲服を揺らしながら、レイマンはライフルと弾帯の入った箱を手に必死に駆けた。ふたりの後を通信機を背負ったピレスが続いた。

ヴィルトウールが小屋に取り付くと、敵陣地からの射撃が小屋の木戸を叩く。遅れてバリーが続いた。戦車まで距離にして50メートル。ブームスンの機関銃音が連射音を上げたので、ヴィルトウールは小屋の影から敵戦車の様子を伺う。

側面からガリア戦車が現れたというのに、戦車の旋回砲塔は動く気配がない。相変わらず敵の歩兵たちはこちら側に向けて応射しているが、“目標物”は微動だにしなかった。

後続の3人の兵士が、即席の軽機関銃陣地に飛び込むのを確認した
ヴィルトゥールが、次の遮蔽物を探す。

突如、重戦車の主砲から発射炎が瞬いた。砲弾はグリゲラたちの方
ではなく、やはり大通り方向を狙ったものだった。やはり、あれは
陣地正面を見張る“砲台”なのだろうか――

ヴィルトゥールが友軍の戦車の方を振り返る。

アシユリー・プティ上等兵が操る戦車が、ヴィルトゥールらがそう
したように風車塔を中心に円を描くようにして広場を疾駆した。軽
装だがその分機動性に優れるガリア軍戦車の走行性能そのままに、
鋼鉄の塊とは思えぬしなやかな軌道を描いている。

重戦車の後部、ラジエーター部分を狙うべく、回りこむように移動
しているのが分かった。ラグナイトエンジンの駆動音と、小銃弾を
跳ね返す乾いた金属音をこちらに返している。

ピレスらは支援火器の制圧射撃に合わせて、それぞれの携行火器で
応戦している。人数は帝国軍の方が多いが、相手は重機関銃を大通
りに向けて据えているので、火力ではほぼ互角に見える。

あとは、曹長たちが銃座を潰してしまえば、残る脅威は重戦車のみ。
銃座がなくなること、第7小隊が前進できるようになり、正面と
側面からの挟撃で手一杯にさせることができれば、破壊することは
そう難しくくない。

ヴィルトゥールが再び敵戦車の方へ向き直る。旋回砲塔は相変わら
ず正面に据えられたままだ。敵戦車を破壊し、このまま本拠点まで
押し切れるか――

奮い立つような思いが、すぐさま凍りついた。

ヴィルトウールの目が新しい“目標物”を捉えたのだ。

重戦車のさらに奥、広場西側に面する壊れた建物の上階に、明らかに砲身とわかる丸い口が崩れた壁の間からぬっと出ているのがちらと見えた。ちょうど傾いた西陽が逆光になり、はっきりとした姿は確認できないが、暗がりから伸びているのは間違いなく砲口だった。

対戦車砲の隠蔽陣地―

ヴィルトウールが息を呑んだ。

あの砲は広場一帯をその射界に収め、東側を正面に捉えている。敵本拠点から見て東側の側面に展開する我々の方へ向けられている。

ヴィルトウールは反射的に弧を描くように進むガリア戦車クルゼーの方を振り返った。

トリコロールカラーの車輛が、風車塔広場をまるで陸上トラックを走るかの様に進んでいたが、進む鼻先で爆発が起きるとその軽快な走りを止めた。着弾で剥がされた石畳の破片が舞い上がり、戦車の車体にガラガラと落ちて金属音を上げる。

ヴィルトウールは再び西側に向き直った。戦車の砲塔が旋回を始める機械音がしたからだ。

男が覗き込むのと同時に、重戦車の砲が火を吹く。

砲撃で動きを止められたグリゲラたちの戦車目掛けて、自分の頭上を越えて徹甲弾が飛んでいくのを、ヴィルトゥールはその視界に刹那に捉えた。

10・死屍の眼差し(前書き)

登場火器

(名称/型式/種類/携行兵科)

>ガリア義勇軍<

マグス / M10 / 短機関銃 / 突撃兵(士官・下士官携
行用)

マグス / M1 / 短機関銃 / 突撃兵

ランカー / M1 / 対戦車槍 / 対戦車兵

>帝国軍<

重機関銃 / 拠点防御用固定機銃

10・死屍の眼差し

ふたつの砲声が広場の方向から大通りに相次いで響き渡ったが、それぞれの着弾の音はいずれも街区の向こう側、すなわち自分たちの小隊がいる方角から聞こえてきた。ユーゴヴィッチは、最初の砲声が戦車のものではないことに気がついていった。

裏路地の出口に立ち塞がっていた帝国兵ふたりを、ヴィンターがライオンカー対戦車槍でレールの障害物もろとも吹き飛ばし、4人はカフエに隣接する建物の上階へ裏側からよじ登ったのだった。

部屋を隔てる内壁にひびが走っていて、通り沿いの外壁と屋根が吹き飛んだところから西陽が射し込んでいる。古びてはいるが、装飾を凝らしているシャンデリアが辛うじて天井からぶら下がっているのがちょっとした奇跡のように思え、自分たちが立つ床が抜けてしまわないか、少し不安になった。

反対側からの射撃が騒がしくなる。

もともと4人のいる上階ではなく、隣の建物へ向けられているものだった。間をおかずに、シユターク伍長の短機関銃が発する短い連射音が聞こえてきた。

「こつちも始めるぞ。」

曹長の声に応じて、エシエンが腰をかがめて小走りに進む。反対側の建物の屋上にいた帝国軍兵士が4人に気がついて、狙い撃っていた階下から上階へとライフルを振り向ける。

ブラウンが膝立ちの姿勢でマグス短機関銃を撃ち返し、屋上の帝国兵士を伏せさせた。ユーゴヴィッチが横向きにガリアンを撃ちながら、エシエンの後を追って絨毯の上を走る。床がミシミシと鳴り、そこへ空薬莖がぼろぼろと落ちる。

通りの向かい側上階の様子に気がついた敵兵士達が、揃ってこちらに狙いをつけてきたが、シユターク伍長の一斉射撃を受けて上階への攻撃を中止した。エーデルワイス号の背後からその様子を伺っていた兵士が、軽やかな身のこなしで通りに転がる瓦礫を避けながら、シユターク伍長のもとに駆け込んで来る。

「ロージー、援護するね！」

「アリシア、援護するならアタイじゃなくて上の連中を頼むよ！」

第7小隊の副官である19歳のアリシア・メルキオット軍曹が伍長の意図を理解したのか、彼女の斜め後ろの位置に付く。下士官携行用の銃身のやや長いガリアン小銃を構え、対角線上の建物屋上にいた帝国兵士を狙い撃った。

ブラウンは、自分がやり合っていた相手が、横から撃ち抜かれて通りに転がり落ちるのを見送った。

「行け！行け！」

3人が西陽の当たる上階を広場方向に進み、バルコニーに出てその角に取りついた。ヴィンターが重い装甲服を揺らしながら必死に追いつく。4人は大通り側に突き出たバルコニーの一角で手すりがある壁面を遮蔽物にして、身を寄せ合つて固まって隠れた。

ユーゴヴィッチが腰を上げて、バルコニーの扉からそつと見下ろすと、眼下では帝国軍の禍々しい重機関銃が、高速の連射音に合わせオレンジ色の発射炎を発していた。おびただしい数の空薬莖が防御陣地の周囲に撒き散らされており、土嚢を高く積み上げている陣地の中を鉄兜が3つヒョコヒョコと動いている。

反対側からの気配を感じて、身を引つ込めるとバルコニーの壁に銃弾が突き刺さり、数発が手すりに当たって甲高い音をあげた。

「一撃でやるぞ。」

ユーゴヴィッチが拳をふたつ作って、手榴弾のピンを抜く仕草をする。エシエンとブラウンが手榴弾を取り出して、安全ピンに指を引っ掛け、ふたりの後ろでヴィンターが傍らにあるランカーに手をかける。

ユーゴヴィッチが背嚢をまさぐって発炎筒マーカーを取り出す。アイスキヤンデーよりも少し太いくらいの筒で、曹長が一方の端のキャップをひねりながら抜く。キャップが外れると同時に着火し鮮やかなピンク色の炎をあげる。それをバルコニーから大通りへ乱暴に投げた。

シユターク伍長とメルキオット軍曹が、射線上の大通り中央に友軍のマーカーがぼとりと落ちるのを目視する。

「いくよー！」

伍長の声に軍曹が目で応え、対角の敵歩兵らに向けて同時に一斉射撃を始めた。

友軍の銃声が激しくなると同時に、3人が素早く身を乗り出して銃座を見下ろす。バルコニーから頭を出した瞬間、銃座よりも奥に構える帝国軍重戦車の砲塔が旋回を始め、轟音と共に砲弾を発射するのが見えた。

衝撃が空気を伝わり、ビリビリとした感触が3人の顔を撫でる。エンジンとブラウンが砲撃にたじろいで、一瞬動きを止めてしまったが、戦車の砲撃は自分たちの方ではなく、広場の東側に向けられたものだった。ユーゴヴィッチは既に手榴弾を投げ落としていた。

慌ててスローイングの動きを再開したふたりも、手榴弾のグリップから手を離す。曹長が、3つの投擲物の行方を目で追った。

3つの爆発物は土囊陣地のまわりにバラバラと落ち、ひとつがさかんに通りを撃っていた射手の目の前を落下していった。射撃が止み、射手がこちらを見上げ、ユーゴヴィッチと目が合つと、ようやく落ちてきた物が何か気がついて慌てて陣地から出ようと反転したが、それだけだった。

手榴弾が次々に青白い光を伴って爆発した。

土囊やバリケードや瓦礫を吹き飛ばし、重機関銃の側に落ちたひとつが射手と他2人の歩兵を巻き込んで炸裂した。ぼろ切れになった3つの身体が、吹き飛ばされて崩れた土囊の上に積み上がった。

「ヴィンター！機関銃を破壊するんだ！」

曹長と入れ替わるように、小隊最年少のヴィンターが踊り出る。長大なランカー対戦車槍を階下に向けて構えると、持ち主のいなくなった火器目がけて弾頭を発射する。弾頭が土囊の間に突き刺さり、

ごつい三脚に支えられた機銃を鉄くずに変えた。

「道が開けたぞ!!!」

ユーゴヴィッチが階下に向けて叫ぶのと同時に、エシエン、ブラウンが身を起こして通りを挟んだ対面の敵兵に小火器を撃ち下ろす。シユターク伍長らの一斉射で手一杯だった帝国兵士たちは、側面上方からは無防備に姿を晒したままだった。

抵抗する暇もない敵の姿を見るに、ユーゴヴィッチは訓練の時の射撃的を思い出した。人間の的は、通り一帯に響くほどの悲鳴や呻き声を上げ、次々と力なくその場に倒れていった。

射撃訓練というより、銃殺刑に等しかった。

大きく見開かれたまま動かなくなった眼が、真っ直ぐこちらを見上げている。ヴィンターは一瞬、その生気のない眼から視線を逸らすことが出来なかった。

銃座と通りの敵兵士が沈黙したのを見計らって、第7小隊の兵士たちが一斉に前進を始める。シユターク伍長が先頭となって、広場の方向に歩兵たちが殺到する。

路地に潜んでいた残党の敵対戦車兵も、第7小隊員の火炎放射器で焼け出され、火だるまになって大通りにのたうちまわった。身をよじり、手足をバタつかせていたが、携行していた弾頭に引火して赤い風船のように胴体もろとも破裂し、手足や頭や内臓と一緒に兵士を包んでいた炎も消し飛んだ。

バルコニーから一方的な殺戮の光景を眺めていたヴィンターは、す

ぐに腰を上げることが出来なかった。

「俺達も行くぞ！」

曹長ら3人が既に階下に降りようとしているのが分かり、ヴィンターが慌ててその後を追った。少年は尚も立ち上がれず、半ば這うようにしてバルコニーから出ると、足を持ち上げるために思い切り踏ん張った。その拍子かどつかは分からないが、急に襲ってきた吐き気に耐えられず、絨毯の上に吐瀉物をぶちまけた。

目眩をおぼえ、呼吸もおかしくなりかけたが、ヴィンターは構わずに床を踏み鳴らして上階から滑り降りた。

11・奮迅の老躯

10トンを超えに超える車体がガタンと揺れて、焦げたような臭いをまとった黒煙と、爆発とともに金属が裂ける奇怪な轟音が一度に襲ってきた。

グリゲラは側頭部を激しく打ちつけ、生温かいドロツとしたものが流れ出るのを感じた。黒煙が充満し、前方の操縦席にいるアシユリ
ー・プティ上等兵の姿が見えなくなるほどだった。

「次が来る!!!回避しろっ!!!」

やっとのことで声を上げたが応答がない。思い切りよくハツチを開け放つと黒煙がもうもうと外へと逃げていく。戦車は最初の回避運動の惰性でそのまま動いていた。

グリゲラが這うように操縦席までいくと、プティがなんとか左手で操舵輪にしがみついていた。顔を苦痛に歪め、煤で黒く汚し、汗が額に滲んで前髪を濡らしている。

「おい!しっかりしろ!」

黒煙は操縦席の右側面から発生している。グリゲラが出力レバーを前に倒し、ハンドルを思いっきり右に切ると異音と不規則な振動とともに戦車が旋回をはじめた。

グリゲラはプティの小さい身体を抱き抱え、操縦席から引きずり出そうとした。両腕に力を込めた瞬間、左肩に激痛が走って思わず呻いた。苦痛に顔を歪め側頭の傷から血がしたたり、プティの戦車兵

用の軍服に赤い斑点が出来る。

「だ、大丈夫・・・」

プティは同乗する上官に身体を引き上げられるのが分かり、やっとのことで口を開いた。

「大丈夫そうには見えねえな。いつもなら俺の顔を見るなり嫌な顔をするが、今は随分おとなしい。」

ダルクス人の老兵が精一杯の笑みを作っていたが、左の側頭部から流れる血が皺の刻まれた頬を伝うと、その顔を普段以上にくしゃくしゃに歪める。老兵の表情に応えたわけではなかったが、プティも目をぎゅっと瞑り、歯を食いしばって丸い童顔を歪めた。

プティの右太腿には、戦闘服が膝まで裂けるほどの裂傷があり、白い脚が真っ赤な血に染められて、膝がおかしな方向に曲がってしまった。右腕もだらんと力なく身体の横にあるだけだった。とにかく今は回避行動を取らなければ

相手は正面上方からの対戦車砲と重戦車。少尉らを援護するどころではなくなった。敵の射界から出るか、戦車を破棄して脱出するか選択肢はない。

プティを横たえて、グリゲラが操縦席に収まると、ギアを“後進”に入れる。レバーは出力全開だったが後退を始めた戦車の動きは鈍い。

「軍曹！応答してください！！」

ピレス伍長の上ずった声が無線から漏れる。どうやらずっと呼びかけていたようだった。

「ああ、聞こえてる！さっきの直撃でアシユリーが負傷した。意識はあるが傷が深い。」

「了解しました。FRINGEス伍長を向かわせます。」

「そこから見えるか？！12時の方向、上階の対戦車砲。」

突如襲いかかてきた衝撃と炸裂音が通信を中止させた。グリゲラは危うく舌を噛みそうになった。先ほどよりは、激しくはないがそれでもグラグラと車体が揺さぶられる。そして金属がひしゃげる音が響く。

『履帯か！？』

音と衝撃の方向から駆動系に直撃したことを悟った。操舵輪が反応しない。

次でやられる

すぐにプティの身体を抱き上げると、咄嗟に砲手席の脇に立て掛けていた対戦車ライフルのスリングをひつつかんで、勢い良くハッチから抜け出た。ハッチの端に手をついた時、またも左肩に激痛が走り我慢できずにうめき声を上げた。

這うように車体から降りると、精一杯の力で走ったのだが、よろけながらおぼつかない足取りだった。とにかく戦車から離れようと方向も分らず走った。

再び砲声。着弾の音。砲塔に直撃し、グリゲラたちが這い出たハツチの部分を滅茶苦茶にして爆発した。どさりと前のめりに倒れたが、プティを庇って身体をひねり、着地と同時に再び左肩から激痛が走る。

広場の東側の通り沿いにある、並木のあたりを目指して力を振り絞って走る。年老いていることに加え、身体は傷つき、小さいとはいえ人間を抱えているので、ほとんど歩くのと変わらなかった。

ようやく手前の木の植え込み近くに達すると、プティの身体を引きずって建物の角で瓦礫が折り重なっているところに彼女の身体を横たえた。広場の入口から少し街区に入ったところで、広場方向からの射線には入っていない。

再び伍長が呼びかけていたが、耳がおかしくなっていて何を話しているのかは聞き取れていなかった。

「こちら戦車長！車輛を放棄して脱出した！広場の東の端にいる！」

グリゲラは息を切らせながら、怒鳴るように無線に応答した。

「大丈夫ですか！？軍曹！」

グリゲラには、彼女の言葉がはっきりとは聞き取れてないかなったが、無線通信の様子からピレスは戦車が被弾した瞬間を見ていたのだらう、ひどく動揺した応答だった。

グリゲラはマフラーのように巻いていたダルクス模様の布を振りほどくと、横たわるプティの太腿の傷口に当て巻きつけると力の限り

縛った。

プティがうっと思を漏らして呻き、汗と煤とで汚した顔をゆがめる。足と腕が折れ、何より大腿部からの出血が止まらない。

「何でもいいから、早く衛生兵を寄越せ!!」

自身の傷の痛みをこらえながら、荒らげた声を無線機に叩きつける。息を切らせながら、右手で掴んだ双眼鏡を覗き込むと、伍長らのいる場所から、トロホウスキが対戦車槍で応射しているのが見えた。敵戦車、上階の対戦車砲陣地どちらからも距離がありすぎるのか、弾道は逸れてどちらにも当たらなかった。

舌打ちをして双眼鏡から目を離すと、並木に背を持たれかけて右手で双眼鏡に代わり無線機を掴む。

「広場から砲台を叩くのは難儀だぞ。距離がありすぎるし、奴らの巢は見晴らしが利く。次は榴弾でお前さんらを片付けに掛かるぞ。エリックに後退を進言するんだ。」

「しかし、軍曹を残して広場から引き揚げるわけには…」

無線越しに伍長が逡巡しているのが窺い知れた。グリゲラが戦車から引きずってきた長大な獲物を引っ掴む。

「広場を迂回してアシユリーのところまで来てくれ。東の通りの入口角だ、すぐ分かる。砲台をこっちへ引きつけるように援護する。エリックに後退を進言して、さっさと退け!!」

グリゲラが自作した個人携行可能な対戦車ライフルに20mmのい
かつい弾丸を1発ずつ装填し発射レバーを引いた。

「援護ってどうやって…」

「寄り固まつてるお前さんらを狙うのは楽だろうだが、ひとりを狙
うのは簡単じゃない。とにかく急いで後退させる！！いいな！？」

無線機に向かってがなると、ヘッドホンを乱暴に外す。

ちらとプティの様子を見やる。苦痛に歪む顔に汗が浮かぶ。顔色も
悪い。ホルスターから自動拳銃を引き抜くと遊底を引き、プティを
抱き起こして無傷の左手に握らせた。

「ここなら砲弾は飛んで来ねえ。プレスの嬢ちゃんが来るまでの辛
抱だ。」

「ひとりでなんて…ムリよ…」

通信を聞いていたプティが震える声で応じる。

「俺とお前の戦車をオシヤカにされたんだぞ？俺が黙っていると
も思っのか？！痛い目見せてやらなきゃ収まらねえ。」

グリゲラの答の真意が自ら囿になることと悟ってか、プティが力な
く首を横に振る。

「次のドライバーはお前よりも美人で色っぽい姉ちゃんにしよう。
だが、お前より腕がいい娘となると見つけるには一苦労だな。」

グリゲラがぎこちない笑顔を見せる。皺がいくつもあり、年老いていて無骨に見えるが、優しい眼をした男の顔だった。下品で横柄な態度と、潜在的な差別感情とが相まって、いつも鬱陶しく思っていた老人が、初めて見せた穏やかな顔だった。

自分やピレス、フリングスら女性兵士から避けられていても、義勇軍を見下しダルクス人への差別感情を露骨に表す正規軍兵士が突っかかってきても、男は豪胆で怯む素振りを見せず、そしていつも気さくだった。

一瞬、痛みを忘れ何かに醒めたような思いが胸にこみ上げたが、すぐに体中から送られる痛みの感覚に飲み込まれ、身をよじらせる。

グリゲラがそつとプティの頭に掌を載せるが、彼女はただ首を振ることしか出来なかった。

「安心しろ。必ず助ける。」

言葉の意味するものが自分のことなのか、ヴィルトウールやピレスら小隊の仲間のことなのか、プティには分からなかった。老人の皮の厚いゴツゴツとした手が、拳銃を握る小さな手から離れる。引き止めるべく、その腕に手を掛けようとすると、左手が咄嗟には動かなかった。言葉を返そうと口を動かすも、小さく息が漏れるだけだった。

プティは、自分の身の丈と同じくらいの長さがあるうかという銃器を、ダルクス人の老兵が杖のように地面に突いて、よろけながら立ち上がるのを仰ぎ見た。

その老兵が広場に向かって駆けていく姿を涙で滲む眼に捉えた。涙

は激痛を堪え生理的に流れ出たものだったが、離れて行く軍曹の背を眼で追うと、ぼろぼろと新たに玉となってこぼれ落ちた。頬を涙が伝い、煤の汚れを洗うように筋を引いて落ち、力なく握られた自動拳銃を音もなく叩いた。

12・硝煙弾雨

グリゲラの戦車が二発目の砲弾を受けて大破し、その直後敵本拠点を防御する機関銃陣地が破壊されたのを見届けると、ヴィルトウールは新手の目標物に視線を送った。

グリゲラの戦車を葬った対戦車砲は、広場西側に面する二階建の建物にあった。角の屋根だけが千切られたように吹き飛んでいて、その影から太い銃身が顔を覗かせている。影に紛れているが砲手と観測手、砲弾の装填役ふたりを確認した。

ヴィルトウールは、隠蔽陣地の位置を見て、大通り側からは建物に遮られて狙えないと推測した。もともと自軍の拠点を側面から守るための位置取りなのだろう。敵勢力の規模は大きくはないが、巧妙に防御網が張り巡らされ、的確にこちらへ打撃を加えてくる。ヴィルトウールは無意識のうちに唇を噛んだ。

「少尉！ヴィルトウール少尉！！」

味方の機銃音に紛れて、フローラン・ピレス伍長がこちらに向かって声を張り上げる。30メートルないくらいの距離だったが、銃声がかましく鳴り渡っていて聞き取るのがやっとだった。

「ふたりは無事です！広場東の端にいます！」

ピレスがこちらに向かって精一杯の声で叫び、黒煙を上げるガリア戦車クルーザーの向う側を指差した。黒煙の先に、街の外へと伸びる通りが続いているのがうっすらと確認できる。広場の東の出口までは、ヴィルトウールの位置から100メートル以上の距離がある。

「移動しろ！次はこちらを狙ってくるぞ！！」

ヴィルトウールが左翼のピレスたちがいる即席の機関銃陣地に向かって、大きく手を振って叫んだ。ブームスンらが狙い撃っている敵本拠点では、大通り側の銃座が潰されたことで、正面から第7小隊の接近を許し、歩兵の多くが慌てて正面の防御にまわっていた。

「今ならこちらへの火力が弱い。もと来た路地を迂回して、ピレスたちと一緒に東の出口で軍曹たちと合流するんだ！」

隣で身を屈めていたロワーヌ・バリー上等兵の肩を掴んで、けたたましい銃声で彼女が聞き漏らさぬよう耳元で語気を強くする。ブロンドの長髪を後ろで束ねているバリーがしつかりと頷いて、先ほど自分が飛び出した路地に向かって駆け出した。

ピレスら数人の歩兵たちも射撃を止めて、建物沿いに移動を始めていた。最後に本陣地をさかんに撃っていた機関銃手ふたりが射撃を止め、T・MAG軽機関銃を持ち立ち上がる。

ヴィルトウールが遮蔽物にしていた小屋を飛び出し、バリーが駆ける方と逆向きに走りながら、ガリアン小銃を本拠点に向けて撃つ。

小火器の銃声を破るような砲声と、榴弾の爆発音が相次いで鳴り響く。ひとつは重戦車の122mm砲が正面に展開する第7小隊を蹴散らすべく火を噴いた。もうひとつは、上階の隠蔽陣地からの砲撃で、ブームスンとシエーファーが居た射撃位置手前に着弾した。

ヴィルトウールが、ふたつの爆発が起きた方向へ一瞬のうちに首を振って順に見た。誰もいなくなった銃座の向こう側に見える大通り

では、恐ろしいほど大きな土煙が立ち上っている。

30メートル左手の着弾地点では、瓦礫や破片を伴った爆風が塵や埃を巻き上げて、ふたりのガリア兵を包んだ。ふたりが土煙で見えなくなる刹那、揃って仰け反るように倒れる姿が見え、ヴィルトゥールは目を見開いたまま、その場で凍りついたように動けなくなった。

銃弾が足下の石畳を叩き、小さな土煙が周囲でいくつか起きたので、ハツと我に返りすぐさま移動を再開しようとした。

踏み出した脚に銃弾が掠り、ブーツの皮と脚の肉が少し抉り取られるのが分かった。ヴィルトゥールが体勢を崩して、石畳の上に手を突いた。

もう一度走りだそうと踏ん張った時、自分が隠れていた新聞スタンドの小屋に榴弾が着弾して吹き飛んだ。前につんのめるようにして地面に叩きつけられ、砕け散った木材や石畳の破片などが、雨のようになり注いだ。

ブームスンとシェーファーと同じように、もうもうと立ち込める土煙の嵐に巻き込まれ、目の前にそびえ立っていた風車塔も見えなくなった。

*

瓦礫や破片が落ちた拍子の振動が無くなり、あたりには土煙だけが立ち込めている。17歳のリリアン・シェーファー上等兵が、全身に残る痛みを引きずるように、ゆっくりと両手を突いて身体を起こした。

もうもうと土煙があたりを包んでいるが、先ほどまでの銃撃戦がぴたりと止んだかのように静まり返っている。咽て咳き込んだが、その音が感じ取れないことではようやく聴覚がおかしくなっていることに気がついた。

すぐ近くで何かがつごめく心配がして、無意識にそちらへと這い進む。煙で霞む先に大柄なドワイト・ブームスン伍長が横たわっていた。

仰向けに倒れたまま、砲弾の破片で抉られたらしい腹部を両手で抑えている。両手の指の間から露出した内臓とおびただしい量の出血が窺え、赤い水たまりに横たわっているようだった。

シェーファーはすぐには目の前の光景を理解できず、口をぽかんと開けたまま呆然としていた。伍長が視線だけをこちらに向け、目が合ったところでぽっかり開いた口がそのまま震え出した。

「．．．行け．．．早く．．．!!」

かすれた声が漏れてた後、伍長の口元から赤い血の泡が吹き出た。

シェーファーは全身を震わせていて、埃を被って汚れた顔をくしゃくしゃにしていた。

「行け!!」

今度はしっかりとした声だ。

土煙が流れ去り、広場の景色がうっすら戻ってくる。敵か味方か出

所の分からない銃声が鼓膜を叩いているのを知覚する。聴覚が戻りかけている。

前に這い出でて、ブームスン伍長の身体に触れようとしたが、顔を伏せたままそれ以上動かなくなった。少女の手に涙が落ち、嗚咽をあげていた。

ブームスンが血で赤く染めた手をゆっくりと、シエーファアの手に重ねた。彼女はその手を握り返すと涙を勢いよく拭った。

「いい子だ。」

消え入りそうな男の声に、少女は顔を上げる。

シエーファアは膝を震わせながら立ち上がると、広場に面する建物に沿っておぼつかない足取りながら懸命に走りだした。

ブームスンは視界が霞む中、少女の姿が路地の角に消えるのを見届けると、機械音のする方向へ首だけを曲げた。もう動くのはそれだけで精一杯だったが、ガンツという金属を叩く音の後、もうぼんやりとしか見えていない敵戦車の砲塔が旋回を止めたことだけが分かった。

*

グリゲラの対戦車ライフルから発射された20mm弾は、広場を横切って帝国軍の防衛本陣地に鎮座する重戦車へ一直線に飛んでいった。砲塔下の旋回部近くに着弾し、オレンジの火花が散ってガツツという音があたりを轟いた。

小火器の銃声を掻き消す砲声が再び広場に反響して、黒煙を上げるガリア戦車の傍で爆発と共に土煙が巻き起こる。隠蔽陣地にある対戦車砲の観測手は、東の端から広場を渡って前進してくるガリア兵の姿をその目に捉え、砲手に座標を指示する。

グリゲラが自ら搭乗していた車輛の脇を抜け、立ち込める土煙の嵐を突っ切って、長大な銃器を抱えて広場を渡る。味方の兵士がひとり爆風に巻き込まれるのを目撃し、倒れているらしい場所を目指していた。

敵が自分の戦車を狙い撃った時に出来た、ごく浅い漏斗孔に滑りこむと対戦車ライフルを今度は隠蔽陣地の方へ角度をつけて構え、とにかく素早く発射した。

小銃とは比較にならない反動が射手の身体を揺らす。グリゲラは左肩に走る痛み^{リコイル}に顔をしかめると右手で大ぶりの槓桿を引いた。禍々しい20mm弾のカートリッジが排莖され次弾が装填される。ライフルを据え直し再び引き金を絞った。

弾丸はいずれも隠蔽陣地のある建物の壁を派手に破壊して、新しい穴を開けただけだった。

お返しとばかりに、こちらに真つ直ぐ向けられている砲口から発射炎が噴く。漏斗孔よりも左手後方に榴弾が着弾し、またたく間に土煙があたりを覆う。

グリゲラはすぐさま伏せて、飛んでくる破片や瓦礫をやり過すと、重い武器を抱えて再び走りだした。

*

ヴィルトゥールよりも小屋から離れていたバリーは榴弾の爆風を免れたが、その衝撃で後ろを振り返ると少尉の姿が見当たらないことに気がついて路地の入口を前にして踵を返して反転した。

「早く来なさい!!」

ピレス伍長の声にもう一度振り返る。スタート地点だった広場南東の路地に4人の兵士が隠れていた。

隠蔽陣地を狙うように狙撃銃を西側上方に向けて構えるフェルメイレンと、ピレスの隣で軍服を灰色に汚したシェーファーがへたり込んでいて、伍長と挟むようにトロホウスキが少女を起こそうと肩を抱いていた。

「しかし、隊長が・・・」

「一旦、後退します！これは隊長命令よ!!」

つり目のピレスが一層厳しい表情になる。

「おい!!早く来るんだ!!」

トロホウスキが激しい動作で手招きする。シェーファーがピレスとトロホウスキに支えられながら何とか立ち上がった。

「ここからじゃ、あの陣地は狙えません！早く後退しましょう!!」

フェルメイレンが覗いていたスコープから目を外した。

「さあ、行きましょー!!」

ピレスがバリーの腕を掴んで無理やり建物の影に引つ張り込む。銃弾がバリーの居た石畳をしたたかに叩いた。

今度は7・92mmの小銃弾とは比べものにならない威力の榴弾が、4人からは離れた広場の石畳を叩き、衝撃と轟音と爆発を起こす。4人は広場を背にして路地を戻ると、東の街区の中へと小走りに消えていった。

13・分岐点(前書き)

登場人物

(名前/階級/兵科)

>ガリア義勇軍第3中隊第7小隊<

ラルゴ・ポツテル / 軍曹 / 対戦車兵

スージー・エヴァンス / 上等兵 / 偵察兵

ホームー・ピエローニ / 上等兵 / 支援兵

カロス・ランザート / 上等兵 / 通信兵

登場火器

(名称/型式/種類/携行兵科)

>ガリア義勇軍<

テイマー / M01 / 対戦車槍 / 対戦車兵(士官・下士

官携行用)

13・分岐点

大通りの真ん中で、122mmの榴弾が炸裂し塵や破片のシャワーと、灰色の煙の塊をこしらえてガリア義勇軍の兵士たちを取り巻いた。大通りを埋めていた、建物の瓦礫や空薬莖や、人間の体の一部または手足のある“きれいなままの死体”が、ごちゃ混ぜにされて吹き飛ばされる。

破壊された機関銃陣地正面の遮蔽物のところに、第7小隊のライフル兵や突撃兵らが身を隠して敵本陣に向けてさかんに撃っていたが、榴弾の爆風によってその場に伏せさせられた。彼らの背後に大きな着弾の跡ができ、その周囲で後方にいた兵士達が爆風に飛ばされて横たわっていた。

「衛生兵！衛生兵！！」

「おい、しつかりしろ！！」

爆風を免れた兵士たちが、横たわる傷ついた兵士に駆け寄る。彼らの怒号が大通りを抜ける。

通りの脇で身を伏せて、爆風をやり過ぎたユーゴヴィッチ曹長ら4人は、薄らいできた土煙の向うに西陽に照らされる二棟の風車塔と、そのすぐ手前に土嚢やバリケードで固められた陣地から小火器の発射炎の瞬きを見た。

陣地の左横では重戦車の装甲板が小銃弾を跳ね返し、爆ぜた弾丸が発するオレンジ色の火花を散らしている。

ひとりの突撃兵が遮蔽物から身を乗り出して、陣地にひしめく帝国兵らにマグス短機関銃の強装弾を叩きこむ。銃弾が土囊に刺さり、帝国兵士が頭を引つ込めると同時に、重戦車の戦車機銃がその勇猛なガリア兵士に向けて斉射を浴びせる。

兵士が身を翻して伏せると、機銃弾がブスブス遮蔽物を叩く。ユーゴヴィツチらが前哨戦の遮蔽物に駆け寄ると、その兵士がシュターク伍長であることに気がついた。

「相変わらず無茶をする女だ。」

ユーゴヴィツチが彼女の隣に滑りこんだ。若い兵士3人も続け様に曹長の隣に陣取る。ブラウンとエシエンは各々の小火器に弾倉を込めると、第7小隊の兵士と同じ方向に射撃を開始した。

「アンタたちのお陰であそこを突破できた。礼を言うよ。」

赤毛の伍長が切れ長の目でウィンクして、艶っぽい唇をつり上げて応じる。

「あれを始末したら引き揚げたかったが、“仕事”がもうひとつ増えたんでね。もう少し付き合わせてもらよ。」

ユーゴヴィツチが、ニヤリと口元を緩めて見せると、次なる獲物を確認しようと遮蔽物から広場方向を覗き見た。シュターク伍長も曹長が探す獲物が何か悟ったように、身体を預けている遮蔽物の向こう側を親指で指した。

「ここから見る限りじゃ姿はないね。うちの偵察兵が確認しているはずだよ。追いて来な！」

シュターク伍長が腰をあげると瓦礫と土囊の遮蔽物に沿って右方向に進んでいく。銃弾が頭上を掠め、唸りを上げているが赤毛の女は全く怯む素振りも見せない。4人も彼女の後に続いて、頭を低くし身を屈めながら進む。

「アリシア、スージー、砲台は確認できるかい?!」

右翼の遮蔽物に身を隠していたふたりの女性兵士がシュターク伍長の声に振り返る。ガリア義勇軍の青い戦闘服を纏い、ライフルを手に装備を身につけてはいるが、ふたりのあどけない顔や華奢な背格好からはおよそ“兵士”には見えなかった。

国民皆兵制度のあるガリアでは、女性兵士は決して珍しくはない。しかし、この戦争に従軍している兵士の多くは、彼女たちや自分たちのように男女とも一様に若かった。

開戦期の戦いで、前大戦の従軍経験がある古参兵や、ある程度軍隊経験のある中堅の兵士たちの多くが戦死した。平時にガリア領内に配備されている常備軍の多くは、彼ら練度の高い兵士たちだった。

帝国軍の電撃的侵攻と圧倒的な兵力の前に、軍の指揮系統は混乱。戦線を立て直せないまま敗走を重ね、彼ら戦い慣れた兵士たちは絶望的な戦いを強いられ散っていった。

ヴァーゼル市奪還を機にようやく態勢を立てなおしたものの、再編された部隊の補充兵や招集を受けた義勇兵らの多くは、戦場を知らない若者ばかりになった。特に義勇軍はどこも若い兵士ばかりで、正規軍ですら、18や19くらいの新兵をよく見かける。

ユーゴヴィッチやギユンター少尉のような学徒兵が士官や下士官になっっていること、彼女たちのような若い娘が最前線に送り込まれることも決して珍しくなかった。

よく訓練され、完全装備の帝国軍に比べれば、ガリア軍は言わばあり合わせの軍隊に見えた。自分たち義勇軍ともなると、むしろ顔ぶれも様々な“寄せ集め”という言葉がぴったりだった。

しかし、その若い寄せ集めの部隊であるガリア義勇軍は、これまで正規軍のお株を奪うかのような活躍を見せ、軍内には彼ら義勇軍こそ真の精鋭だと呼ぶ者もいた。彼女たち第7小隊は、その象徴だったが他の部隊同様に例外なく若い兵士ばかりだった。

ユーゴヴィッチは、ふたりの女性兵士を見るなり、自分を含め味方の兵士が皆若いことに改めて気付かされ少し面喰らった。

「ロージー、あそこを見て。広場西の建物の二階。砲煙が見えたからあそこで間違いないと思う。」

女性兵士の片方が、向かって左奥の建物を指差し、意志の強そうな眼差しを向ける。長身のシュターク伍長に比べると小柄で、その両手に携える銃身延長を施した下士官携行用のガリアンがやけに長大に見える。大きな瞳と同じ赤褐色の長い髪をふたつに縛り、それをまとめる赤いスカーフが一際目についた。

「それに、見えるのは砲煙だけで、砲台と敵兵士の姿が建物に隠れて見えません。姿さえ見えれば、マリーナさんたち狙撃隊に任せられるのですが…」

ユーゴヴィッチよりも鮮やかなブロンドの女性兵士が、ブルーグ

レーの目を瞬かせ小さく頷いて付け加えた。ふたりの言葉を受けて、曹長がふたりが指し示す建物へと視線を投げる。

「クソ重たい砲台を、わざわざ二階に担いで運ぶとは律儀な連中だ。そうまでして人殺しがしたいらしいな…是非、勲章を授与したいもんだ。」

ユーゴヴィッチが視線を目当ての建物に注いだまま、お決まりにようにぼやいてみせ、皮肉な笑みを浮かべる。ふたりが一瞬きよとんとした表情になり、シユターク伍長が小さくため息を漏らす。

「銃座を潰して、アタイたちの道を拓いた連中さ。」

「ユーゴヴィッチだ。」

「第7小隊、アリシア・メルキオット軍曹です。彼女はスージー・エヴァンス上等兵。第4小隊ってことは、おじさんの隊の人たちね。」

“おじさん”と聞いて、エシエンたちが顔を見合わせていたが、長く義勇軍にいるユーゴヴィッチは、それがヴィルトゥール少尉を指していると分かっていた。メルキオット軍曹と少尉がブルールの出身で、親と子のような付き合いであることも。

曹長が見つめるその建物から、耳を劈くような凄まじい砲声が響き咄嗟に兵士たちが身をすくめる。ふたりの偵察兵の証言そのままに、広場西側に面する建物二階から発射煙と砲弾が飛んでいくのを目視した。

「確かにあそこで間違いなさそうだな。あの位置だと、ここからで

は射角が取れない。撃たれはしないが、こちらからも狙えない。」

砲台の位置を確認すると、ユーゴヴィッチが頭を引っ込める。小火器の銃弾と戦車機銃弾が遮蔽物を叩き、頭上を掠める。帝国軍の射線が注がれる方へつられるかのように、戦車砲塔の無機質な旋回音が聞こえてきた。

遮蔽物に潜んでいたガリア義勇兵らが、一斉に身構え、ユーゴヴィッチたちにも緊張が走る。

「みんな散開して!!」

メルキオット軍曹が叫ぶ。寄り固まっていた兵士たちが遮蔽物に沿って散り散りになる。シクターク伍長が戦車の気を引くように、短機関銃の引き金を引き絞り弾倉一杯の弾丸を撃ち放つ。重戦車の装甲に跳ね返り、なんら損傷を与えないこともなく、砲塔が銃弾が放たれた方へと向いたただけだった。

「ロージー、逃げて!!」

メルキオット軍曹が叫んだのと同時に2つのことが起きた。

ガッツという強烈な金属音が響いたかと思うと、重戦車の機械音がぴたりと止んだ。身を固くしていたガリア兵が反射的に戦車の方を伺う。

「なんだ!? 誰が撃ったんだ!？」

「分からない… 広場の東から撃たれたようだったけど…」

エシエンが素つ頓狂な声を上げる。その隣で第7小隊の色白の支援兵が呆然としている。

味方の兵士が皆、重戦車の方へ気を取られていたが、ユーゴヴィッチだけは漏斗孔脇の遮蔽物から巨漢の対戦車兵が姿を現したのを見ていた。大男が振りかぶってテイマー対戦車槍を構えると、ドラゴンの角のような鋭く尖った弾頭を発射する。弾頭はユーゴヴィッチらの脇を過ぎて重戦車目掛けて飛んでいく。

ユーゴヴィッチが目で追った弾道は、122mm榴弾砲の砲門のすぐ横に突き刺さり、砲身と前面の装甲に黒く焼け焦げた痕を刻みこんだ。

陣地の帝国兵がその大男を狙い撃とうと身を起こしたが、右翼に展開していたエシエンとブラウンが、第7小隊の兵士とともに牽制射撃を見舞った。戦車機銃による射撃が、その大男の周囲に突き刺さり、瓦礫の石や木材が爆ぜて小さな煙を上げた。男は怯むことなく突き進み、こちらへと滑り込んだ。

「遅れをとってすまねえ。ヤンがやられたんで他の負傷者と一緒に下がらせた。」

装甲服を揺らしながら駆けてきた大男は、自身がもと来た道を振り返り、額に滲む汗を腕で拭いながら言った。

「ラルゴ！間一髪だったよ。」

メルキオット軍曹が掛け戻ってくる。シュターク伍長も身を起こして、近づいて来る。

「対戦車兵はあんただけかい？」

「ああ、戦車と戦うには人数が足りねえ。隊長が支援するそうだが、エーデルワイス号でもどこまで持つか……」

「うちの新兵でよければ、お貸ししますよ、サージ軍曹。」

ユーゴヴィッチが、ヴィンター上等兵の方へ顎をしゃくると少し皮肉っぽい笑みを浮かべて男に右手を差し出した。大男は彫りが深く古傷のある強面ながら、丸く大きな目をしていて、その目をより丸くした。

「第4小隊、ユーゴヴィッチだ。」

「ラルゴ・ポッテル軍曹だ。第4小隊のもんだろ。？さっき本隊から通信が入っていたぞ。カロス！！」

軍曹の表情が引き締まったものになったので、曹長の顔から笑みが消える。軍曹に続いていた丸い眼鏡を掛けた支援兵が近づいて来る。兵士はピレスが背負うものと同じ無線通信機を背負っている。

「はい。第4小隊ピレス伍長からの通信によると、小隊付きの戦車が大破、負傷者も出ているようです。小隊は広場東の端で乗員と合流するために後退しているとのこと。現在、ピレス伍長が小隊を指揮し移動中のようです。」

眼鏡の兵士がそう告げると、敵陣地の様子を伺っていたエシエン、ブラウン、ヴィンターがこちらに振り向いた。ユーゴヴィッチは表情を変えていない。メルキオット軍曹の顔が強張る。

「お前さんたちの支援を受けておいて言うのもなんだが、ここは退いたほうがいいんじゃないか？ここに居たんじゃ本隊の様子も分からねえ。隊を立て直すためにも集合地点に急いだほうがいい。」

曹長は尚も表情を変えず、首を横に振った。

「まだ1度ダウンを取られただけさ。アンタたちほどじゃないが、うちの小隊もやわじゃない。さっきの旋回砲塔を止めたのも、うちの戦車長の対戦車ライフル（おもちゃ）だ。まだ戦えている。それに――」

再び地鳴りのような衝撃とやかましい砲声が響く。対戦車砲が砲撃を再開したのだ。ユーゴヴィッチはその砲台の方へ親指を立てて、いつものように皮肉っぽく口元を釣り上げる。

「あの調子じゃ、始末する前に弾切れになりそうだ。」

「砲台はうちの小隊が引き受ける。西側は第7小隊の担当だ。」

軍曹の返答を受けて、おもむろにあたりをぐるりと見回す。目で人数を数えているようだった。

「人数はこれだけかい!？」

「はっ?」

シユターク伍長が眉を寄せて思わず声を漏らす。

「戦車の相手しながら、あの固い陣地を破るのは骨が折れる。この人数でさらに砲台を片付ける人手を割けるとは思えない。」

軍曹と曹長の会話に耳を傾けていた兵士たちが皆黙った。帝国軍陣地からの射撃と、味方が応射する銃声は絶えず聞こえている。

「私たちと残って一緒に戦いましょう！」

不意にメルキオット軍曹が声を上げる。銃声を突き破るかのようなはつきりと通る声だった。軍曹と曹長へ交互に向けられた瞳に強い意思を宿らせているのが伝わってくる。

「これ以上負傷者を増やさないためにも、戦いを早く終わらせることを考えれば、彼らと力を合わせるのが一番いい判断だと思う。」

「確かに、俺達も手痛くやられちゃった。しかしなあ．．．ウエルキンは何て言うか．．．」

ポツテル軍曹がボリボリと頭を搔いて、もと来た通りの方に目をやる。

「ウエルキンに指示を仰いでいる場合じゃないよ！それに隊の副官は私なんだから、責任は私が取る！」

巨漢のポツテル軍曹に詰め寄るメルキオット軍曹の剣幕に一同が押し黙った。ユーゴヴィッチはその様子を黙って見つめていた。

シユターク伍長が唇を緩めて、その間から小さくため息を漏らす。

「フツ．．．仕方ないね！無茶はいつものことさ。」

「決まりだな．．．」

ユーゴヴィッチがポツテル軍曹を見つめて、ニヤリと微笑む。

「．．．わかったよ！ホーマー、連中に弾薬の補給を。カロス！ウエルキンに繋げ。連中のことを第4小隊に伝えるんだ。」

兵士たちが腰を上げ、声を掛け合い、そして奮い立っていた。

「戦車も敵本拠点も、あの砲台も攻略しましょう！」

メルキオット軍曹が銃弾の飛びかう戦場には、不似合いなほどに明るい声を上げたので、ユーゴヴィッチは少し驚いたように目を見開いた。同時に小隊の士気を鼓舞した彼女の言葉と、自分と古参の軍曹へ向けられた真っ直ぐな瞳に不思議な力があるように感じた。

対戦車砲の砲声が轟き、戦車機銃のカタカタという音がする。

二棟の大きな風車塔に西陽が射して、その石畳の肌を照らしている。ガリア義勇軍の若い兵士たちは、その姿を見上げることもなく黙々と戦いに戻っていった。

14・ダルクスの矜持

あたりに剥がれた石畳や焼け焦げて砕け散った木片がガラガラと落ちて、その無数の瓦礫の雨が身体に当たるのが知覚できる。

その感覚があることが、まだ自分の身体が吹き飛んでいないことの証明だった。土煙がもうもうと立ち込めていたが、前方にガリアン小銃が投げ出されているのが分かり、そちらへ這い進もうと手を突いて身体を起こした。

聴覚がしつかりと戻っておらず、銃声と砲声が鈍く頭の中で鳴っていたが、人間が駆け寄ってくるのだけは、石畳を通してその振動で分かった。

「立て!!!こつちだ!!!」

黒髪に白髪が交じるダルクス人の老兵が土煙の壁を破って飛び込んできた。ヴィルトゥールは腕を掴まれ半ば引きずられるように、老兵が突き破ってきた土煙の雲の外に連れ出された。右足に痛みが走ったが、構わずに足を踏み出し懸命に駆けた。

「軍曹、どうして!?!」

ヴィルトゥールは痛みをしかめるも、息を切らせながら傍らの老兵を見た。グリゲラもまた顔をしかめて、皺のある顔をくしゃくしゃにしていた。側頭部からの出血が固まり赤黒い汚れとなって、顔の左側にこびりついている。グリゲラはヴィルトゥールの問い掛けに答えず、風車塔方向に向かって少尉を引っ張って駆けている。

二棟の風車塔が立つ広場中央は、塔の土台となっていて少し土が盛られているように高くなっている。そのわずかな斜面を利用して敵拠点からの射撃を避けるのと、風車塔の影に入ることによって対戦車砲陣地の死角に入ることができはるはずだった。

背後でチツという音が立って、小銃弾がふたりの後を追いかけてきているのが分かり、ヴィルトゥールは痛む右足を必死に前に出して踏ん張った。

斜面に取り付くと、身を丸めるようにして伏せる。グリゲラは匍匐の姿勢になって、携えていた対戦車ライフルを敵本拠点の方向へと据え付けると、引き金を絞って20mm弾を発射した。

「ピレスの嬢ちゃんには下がるように言ったんだが・・・お前さんのことだ、素直にそうするとは思わなかったがね。実際、予想通りだった。」

グリゲラは着弾を確かめるように視線を逸らさなかったで、表情は分からなかったのだが、そのしわがれた声がやけに穏やかだった。ヴィルトゥールがホルスターから自動拳銃を抜くと9mm弾の弾倉^{マガジン}を込めてカチャリと遊底を引いた。

「ピレスたちは無事か？彼女に繋げるか！？」

グリゲラが乱暴にヘッドホンを外し、ベルトに指していた戦車乗員の小型無線通信機を放り投げた。

「イカれちまった。戦車乗りのモンだから知らんが、デリケートに作りすぎだ。もし同胞が設計したんなら、ダルクスの恥だぜ。」

「プティはどうした!？」

槓桿^{ポルト}を引いて排莖し、戻して弾丸を装填、引き金を絞って発射。軍曹がよどみない動作で射撃を行う。反動^{リコイル}で老兵ながら屈強な身体ががくんと揺れる。

「ああ、傷が深くて動かさそうもなかったんでな、ピレスの嬢ちゃんに場所を指示した。アシユリーのいる場所が集合地点になってる。」

「なんで出てきた? 伍長と合流してから、迎えに来てもらってもよかったんだが...」

敵本拠点から銃弾が飛んできて、身を伏せていた斜面の土を削り、雑草もろとも剥がれた泥が降り掛かってきた。ふたりが呻いて身を伏せる。もう一度、グリゲラが槓桿を引いて排莖と装填を行い、次の射撃に備える。

「嬢ちゃんたちを逃がすために、前線に出たお前さんが罔になるとわかってたよ。案の定飛び出したのが見えた。死体になっても拾ってやらなくちゃと思ってな。」

そう言い切ると同時に引き金を引き、反動で老兵の身体が揺れる。20mm弾が重戦車の装甲に当たり、オレンジの火花を散らした。

「エリック、この街はあなたの故郷だろ? 故郷を取り戻しに来ておきなながら、凱旋を待たずにコロッと死じましたらあまりに出来過ぎた悲劇で泣けやしない。いつまでも無茶が通る歳でもないんだ、身体を張るのは自重しな。ろくな死に方をしないぞ。」

「あんたには言われたくないな。」

続けざまに撃ち続けたせいか、銃身からの熱気で空気が揺らいでいるのが分かる。しかし、グリゲラは構うことなく次弾装填の動作を行う。

「経験者からの助言だよ。」

グリゲラの穏やかな声に反して、やかましい銃声と異様に大きな発射音^{ルフラッシュ}を発する対戦車ライフルは、戦場にあつても狂気じみた代物に見えた。ヴィルトウルが身を起こして着弾を確認すると、敵拠点の土嚢をまるまるひとつ木っ端微塵に吹き飛ばしていた。人間に当たったらと思うと寒気がしてきた。

しばらく聞こえてこなかった砲声が再び轟いたかと思うと、ふたりが伏せる斜め後ろに榴弾が着弾し、石の破片と巻き上げられた土煙が襲ってきた。

「くそつたれ！！俺たちをあぶり出す気か！？」

グリゲラが毒づいて身を屈める。ヴィルトウルもそれに倣ったが、斜面の向こうに気配を感じて急いで這い上り顔を出した。

風車塔の北側の街区から軍用トラックと装甲兵員輸送車^{ハーフトラック}が現れ、敵本拠地の背後に停車するのが見えた。ヴィルトウルはそれら車輛のマーキングに見覚えがあった。

「二個小隊規模の車輛部隊だ。ここへ来る道中に見た斥候^{パトロール}と同じ部隊だな。本隊は後方に残っていたんだ。」

「戦車さえありや蹴散らせたつてのに。」

グリゲラが西側の敵本拠点に向けていた重火器を、今度は北側の車輛に向けて据え直した。弾丸を撃ち尽くしていたので、積杆を引き、^{チャンパー}薬室を開いて再び弾丸を込めはじめた。

停車した車輛はそれぞれ歩兵を吐き出すと、もと来た街区へ引き返していく。歩兵の数は20人以上。本拠点の側面を守るように展開してはいるが、第7小隊の方へは前進していなかった。

「連中は恐らく撤退を始める気だ。」

ヴィルトウールは広場北側に視線を注いだままだったが、隣でグリゲラが舌打ちするのが分かった。

「取り逃がすと面倒だぞ。そのまま引き揚げてくれりゃいいが、後方で部隊を立て直して戻ってくるやもしれん。あるいは郊外から街を砲撃してくるか。ブルー防衛の正規軍がお出ましになるのは明日以降になる。ただでさえケツの重い連中だ。そんな奴らをアテに待ってられるほど余裕はねえ。」

ふたたび砲声が鳴り、すぐ後ろに榴弾が着弾した。今度は先程よりも近い位置だった。土煙にのまれ、ふたりが呻く。

ヴィルトウールはもうもうと煙る中、グリゲラがピレスたちに指示したという広場東の集合地点を見やる。黒煙を上げる小隊付き戦車の向こう側が集合地点の筈だったが、まだピレスたちがたどり着いた様子はなかった。

再び向き直ると、本拠点の左翼に展開した敵兵十数名が、こちらに

向けられている友軍の射線に気がついたのか、ふたりのもとへとにじり寄って来るのが見えた。

「こちらにも移動しよう。ここに居たらいずれやられる。」

腰を持ち上げようとして膝を立てた時、脚に痛みが走ったので傷を負っていることを思い出した。

「走れるのか？」

「あんだといい勝負かもな。」

銃創のまわりのブーツが赤黒く染まっている。傷は骨にまでは達していないものの、思いのほか深く敵の弾幕から逃げ切れるかどうかは怪しかった。

「こいつで足止めする。お前さんはなんとか集合地点まで戻れ。」

「それなら俺が残る。ご老体でもまだ走れるあんだが行くべきだ。」

グリゲラが鼻で笑いながらかぶりを振る。

「エリック、順番が違うよ。」

グリゲラが言う“順番”の意味がヴィルトールには何のことなのかすぐには分からなかった。老兵は重火器を据えたまま、タバコを取り出すとゆっくりとした動作でくわえ、火をつけた。

「お前も知っての通り俺たちダルクス人は、前の大戦じゃ穴掘りだとか、死人の始末だとかの労働をさせられた。要するに俺たちの“

「順番」は変わらない。戦争があるうがなかるうが、一番最後なのさ。」

20mm弾を装填し終えたグリゲラが、対戦車ライフルのボルトを戻した。しわがれたているが相手を諭すように穏やかな口調で話し出した。無精髭のある口元から煙が吐き出される。

「しかし、タイマーのように学のある器用な奴は、兵器の開発者や戦車乗りになって戦うことを許された。俺もかろうじて兵士になれた。だがな、戦地に行けば疫病神だと蔑まされ、前線には立たせてはもらえない。ギョントア将軍のようにダルクス人でも志願すりゃ取り立ててくれる例外もいたが、英雄だろつと陰で彼を軽蔑する奴は少なくなかった。」

対戦車ライフルの照準を広場北側からにじり寄る敵兵士の一団に合わせる。

「人種で順番をつけるなんて真似、誰が何と言おうと間違ってる。国から蔑まされようと、生まれた国を思う気持ちはあなたたちと同じ、順番なんてない。国の存亡を掛けた戦争でダルクスかどうかなんて言ってる場合じゃねえ。」

引き金を引く。20mm弾は装甲兵員輸送車ハーフトラックに当たり、後部の装甲をひしゃげさせた。グリゲラがスコープから目を外すと、その目をゆっくりとヴィルトウールの方へ向けた。

「戦場で順番があるとすりゃ、動けるかどうかだ。戦える奴は戦う。そうじゃない奴は退く。戦争での“順番”ってのはそういう簡単なもんなんだよ。今のあなたと俺の順番も簡単なことさ。」

ヴィルトウールが言葉の意を解し、グリゲラの眼差しを受け止める。老兵は優しげな瞳でにっこりと笑ってみせた。

「妙に思うかも知れないが俺は嬉しいんだ。あんたたちと肩を並べて戦えるのがな。あんたは俺や死んだビセンテに順番をつけなかった。小隊の若い連中や可愛い娘たちも、あんたの教育のせいでこのガリアじゃ軽蔑される方の人間になりかかっている。戦争の真つ最中に人間扱いされるようになるなんてのも皮肉だが、お陰で誇りを持って戦えた。ありがとう、エリック。」

ヴィルトウールはグリゲラに笑みを返せるような心境にはなれなかった。逆に怒りにも似た感情が湧いてきた。

「あんたが言う“順番”で俺の方が先だというなら、俺も順番を付けてやる。命令だ軍曹、集合地点に行け！」

「言つたる？故郷で死ぬなんて真似、悲しすぎて笑えねえぞ。それに走るのには腰に堪える。」

「だからってあんたを死なせるような真似を許せると思うか！！」

怒りを抑えきれず、ダルクスの老兵に向けて怒鳴っていた。尚もグリゲラは穏やかな笑みをたたえている。対戦車ライフルの二脚バイポットをたたむと、ゆっくりと腰を持ち上げた。

「やっぱり“順番”が違うよ。年寄りから先に死ぬつてのはダルクス人でも変わらないんだ。」

グリゲラがのんびりとした声でそう告げた刹那、老体とは思えぬ瞬間発力で斜面の上へと駆け上がった。次の瞬間には、手前の風車塔目

がけて駆け出していた。

「行けー！ー！ー！！！」

先ほどの穏やかで優しい声とはかけ離れた、低く野太い声で老兵が叫ぶ。ヴィルトゥールが後を追うべく身体を起こすと、西側からの銃弾が斜面を削って泥を跳ね上げた。

「！！！！！」

グリゲラの背中を目で追うが、ヴィルトゥールは敵本拠点からの牽制射撃で伏せさせられた。

グリゲラは、風車塔のそばに取り付き、本拠点からの死角に入るとすぐさま伏せて、北側から接近する十数名の歩兵に向けて、対戦車ライフルを発射した。先頭を走っていたひとりの脚に当たったかと思うと、その脚がはじけてもぎ取れてしまい、その衝撃で兵士が後ろにすっ飛んだ。

ヴィルトゥールはそのまましばらく逡巡したが、歯を食いしばり、必死の形相で踵を返すと痛む右足をかばいながら懸命に走りだした。

グリゲラが槓杆を引き、おなじみの動作をして再び発射する。反動で左肩に激痛が走る。

今度は別の兵士の胸部に当たると、そこがぼっかりはじけ飛んで、腕と頭がちぎれて胴体から離れた。

再び槓桿を引き、排莖と装填。引き金を引く。反動と激痛

20mm弾は接近する歩兵たちがおののいて立ち止まっている中を突っ切つて、後方に止まっていたトラックにぶち当たり、派手な火花を散らした。装甲兵員輸送車ハーフトラックの銃座についている射手がこちらに気づき、機関砲で応射してくる。

グリゲラが移動しようと重火器を持ち上げた時、射撃のときの反動よりも遥かに小さい衝撃が身体を貫いた。広場に響き渡る銃声のうちのひとつが自分を撃ち抜いたものだと分かった。尻もちを突いて倒れると、這いずって風車塔の陰に身体を預けるようにして身を隠した。

「くそ．．．つたれ．．．」

右胸の下の銃痕に手を当て毒づく。血の温かさが指を通して感じられる。

風車塔から東側に目を向けると、右足を引きずり跳ねるように駆けるヴィルトゥール少尉の背中が見えた。少尉の駆ける方向、自分が駆っていたガリア軍戦車の亡骸のさらに向こうに、ブルーの戦闘服を着た兵士の姿が確認できた。ピレスらが集合地点にたどり着いたのだ。少尉を援護するように、敵の拠点に向けて射撃を開始している。

視線を落とすと、熱せられた重火器の銃身に炙られた空気が揺らいでいる。やがて、それが熱によって揺らいでいるのか、自分の視界が霞んできたせいなのか、グリゲラは次第に分別がつかなくなっていた。

15・コナユキソウに込めた想い

振り返ると西陽に赤く染まる風車塔の崩れた先端部分が見える。

半年前にこの街を去った日の記憶が頭をよぎったが、両手に携えているガリアン小銃に視線を落とし、記憶の像をを強引に断ち切るうとした。

ガリア軍の主力戦車とは異なる、特徴的なラグナイトエンジンの駆動音が唸りを上げ、動き始めた履帯が瓦礫を踏みしめる音が聞こえ、そちらに視線を移すとエーデルワイス号が広場の方向へと前進を開始していた。

呼び起こされた記憶の緒に連なるように、ギウンター兄妹のことが胸の内に駆け巡ったので、振り払うように背を向けて駆け出した。

ブルール出身の19歳、アリシア・メルキオット軍曹は第4小隊のユーゴヴィッチ曹長とエシエン上等兵、同じ第7小隊のエヴァンス上等兵とともに、大通りから広場手前の路地に入り、暗い建物の間を進んでいた。

第7小隊の女性兵士ふたりを前後で挟むように、ユーゴヴィッチ曹長が先頭になって縦に並んで進む。両軍の戦闘が行われている大通りから、1つ街区を隔てているだけだったが、銃声や砲声がいくらかくぐもって聞こえた。

「あんだ、さっきはあんなこと言ってよかったのか？」

「えっ!？」

メルキオット軍曹は絶えず胸の内をざわめく思いに気を取られていたので、前を進むユーゴヴィッチの突然の問い掛けに思わず声を上げてしまった。

「ギウンター少尉に意見も仰がずに、俺たちとの共闘を勝手に決めたことだよ。」

敵がどこに潜んでいるか分からないこの状況の中、曹長がいたずらっぽいからつとした口調で訊いてきたので少し混乱させられた。

ユーゴヴィッチたちは、メルキオット軍曹の判断から、第7小隊とともに敵本拠点攻略の戦力に加わることになった。

シユターク伍長とポッテル軍曹が、拠点の確保と重戦車の破壊を指揮し、第4小隊からはブラウンとヴィンターが残りそれぞれの班に加わった。

対戦車砲陣地制圧は偵察兵が担当し、ユーゴヴィッチが指揮を取る。目標地点の案内役として、ブルール出身のふたりの女性兵士が同行することになった。

「こつちとしては渡りに船で感謝してるが、まさか俺たちに気を遣って決めたわけじゃないんだろ？」

振り払いたくて未だもがいている思いを、目の前の男の問いで白日の下に引き摺り出された気分だった。

「戦いを早く終わらせるためには、これが一番だと思っただけ。確かに、特別あなたたちのことを思ったわけじゃないけど・・・」

こうして支援してもらってるわけだし、おじさんの隊が攻撃されているのを見過ごすわけにはいかないし。」

ユーゴヴィツチ曹長は、尚も前方に視線を向けたままでその表情は窺い知れない。メルキオツト軍曹は、ユーゴヴィツチのことを今回の作戦前までは、馴染みのヴィルトウル付きの下士官だということしか知らなかった。

ブロンドの髪は短く面長で痩せていて、いつもニヤついてはいるが眼光だけは鋭かった。年はギウンターや第1小隊のランツアート少尉と同じくらいに見えるが、皮肉屋でおどけたような言動からか、少年のような面影がある。もっとも同じ少年らしさといえど、彼女がよく知るギウンターが見せる印象とはまったく違うものだったが。

「そうか・・・ポッテル軍曹が隊長の名を口走った途端にあんたが突っぱねたんでね。ちょっと気になってたんだ、第7小隊はちゃんと統率できてるのかって。」

先ほどのやりとりの中の一部分だが、自分としては胸を曇らせている思いを、目の前の男にいたずらっぽく指摘されてしまい気まずさを覚えた。

「うちの隊はちゃんと纏まっています！あれは、ウエルキンを頼ってばかりではいけないと思ったから、つい言ってしまっただけ。」

敵が潜んでいそうな場所に注意を向けながらも、前に行く曹長の様子を伺って言葉を切った。目の前の男は変わらずにこちらに背を向けたまま前進を続けている。

男の表情が分からなかったが、曹長が適確に心の内を探ってくるの

で、あえて真意を吐露することにした。索敵を続けながらの状況で、男の意をかわす返答を考えるのに疲れてしまい、早く会話を終わらせたかったのだ。

「．．．本当はね、咄嗟に言ったんじゃないやなくてずっと思ってたことだったからなんだ。イサラが死んでから、ウエルキンは自分を責めて、ここのところ何もかも背負い込もうと無理をしてるみたいで．．．あの時ウエルキンに決断を迫ったら、全て自分で引き受けようとするんじゃないかって思えたから．．．」

メルキオット軍曹が深いため息を漏らすと、落ち着いた声色で話しました。曹長は振り返ること無く、その歩みを運んでいる。軍曹は周囲に目を配りながら言葉を継いだ。

「だから副官として少しくらい私が力を貸してあげたらと思って．．．確かにちよつとやり方はまずかったかもしれないけどね。」

そこまで言ってしまったから視線を目の前の男に戻すと、その男の動きを見て歩みを止めた。

曹長はそのまま進み続けてはいたが、掌をこちらに返し「待て」と指示を送っていた。目標の建物までほんの数メートル手前だった。

3人が立ち止まり、ライフルを構えて周囲に目を配る。

ユーゴヴィッチは周囲を見回した後、その場にしゃがみ込み足下の土をそつと払った。黒い繊維状の縄が現れ、その縄を伝うように土を払っていくと、縄に繋がれたキラメルか飴でも入っていそうな丸い缶のようなものが現れた。

勿論それはキャラメル缶などではなく、帝国軍が仕掛けた対人地雷だった。通りを横断するように埋設され、黒い縄は金属の導線をコーティングしているケーブルで、他の地雷に繋がっている。地雷がひとつでも作動すれば、並んで埋まっているすべての地雷を作動させるための仕掛けだった。

ユーゴヴィッチがようやくこちらを振り返り、手信号で地面を指し「地雷」だと指示した。3人がユーゴヴィッチのもとへと静かに駆け寄る。曹長は口元に人差し指を当てた。

「どうして分かったの!？」

メルキオット軍曹が小声で訊いた。

「大学の授業で見分け方を習ったのさ。作戦が終わったら講義するよ。」

ユーゴヴィッチが口元を緩めて応える。メルキオット軍曹が眉根を寄せて、曹長のからかいに下唇を突き出した。

「迂回しますか!？」

エヴァンス上等兵が不安げな表情で訊いてきた。ユーゴヴィッチが狭い路地の地雷原をしばらく見やり、首を振って応えた。

「じゃあ工兵を呼ぶんですか!？」

エシエンの問いに対しても曹長が首を横に振る。

「今は時間が惜しい。俺たちだけでここを通る。」

「通るって、地雷が埋まつてるのに!？」

メルキオット軍曹が苛立った様子で訊き返してきた。

「俺たちが通るのはこっちだ。」

曹長が親指を立てて指し示す方を見て、メルキオット軍曹の大きな目が一層大きく見開いた。

「まさか、屋根の上!？」

通りの両脇の建物は、大通り方面に比べればほとんど無傷で残っている。今いる場所が街の中心街ということもあって、建物同士が隙間なく隣り合わせて連なっていた。建物の間を渡るのは、決して無理なことではなかったが、リスクを伴うことは4人とも承知していた。

「高いところは苦手か？」

「・・・苦手とかそういうんじゃない、身を隠すものもないし逃げ場もない。危険なことに変わりはないでしょ!？」

むくれるメルキオット軍曹が苦言を投げる間に、ユーゴヴィッチは腰を上げて上階に上がろうと足場を探していた。

「地雷を爆破して無理やり通るのも、手としてあるにはあるが全て排除できるか確実じゃないし、何より爆破で敵にこちらの接近を悟られる。」

「だったら遠回りでも別のルートで行く方が確実じゃない？」

「そこも同じように地雷が仕掛けてあったら？むしる動き回るほうが危険だ。敵に遭遇する可能性が高くなる。撃ち合いになるよりも屋根を渡る方がリスクはずっと小さい。」

「でも・・・。」

曹長は塀から上階へ乗り移る足場を見つけ、ガリアン小銃のスリングを肩に掛け直す。食い下がる軍曹の提案を、男は無言で却下する。

「もし、ギンター少尉が同じことを言ったらあなたは従うか？」

メルキオット軍曹は、予想もしなかった問い掛けにびっくりしてしまい、無言のまま立ち尽くした。“ギンター”という名前が一層彼女の身体を固くした。

「ギンター少尉が何を思ってあなたたち隊員に命令を下すと思う？」

ユーゴヴィッチが塀に手を掛けて登り始める。エシエンがふたりの女性兵士をちらと見やりながら、曹長の後に続こうとしていた。エヴァンス上等兵が傍らで彼女と曹長を交互に見ながらうるたえている。

「あなたたちの命が助かるようにか？それなら自分で自分の脚を撃ち抜いて故郷に帰れと言っさ。戦わずにおとなしくしてた方が、少しは寿命が伸びるだろう。彼が全て自分で引き受けてどうにかしようなんて言うと思うのか？誰も死なせず、ひとりでこの戦争をどうにか出来るなんていくらなんでも思っちゃんないだろ。もしそんな

ことを言つめでたい奴なら、妹を死なせたのも納得がいく。とんだ英雄だ。」

曹長は塀の上に一足飛びで登り、第7小隊のふたりに向き直った。男がさつきまで軽やかな口調で語っていたとは思えない厳しい顔つきだったためか、エヴァンス上等兵が少し怯えた様子で目を伏せた。メルキオット軍曹は静かに曹長を見上げていた。

「彼が命令するのはな、あんたたち隊員の力があれば戦いに勝てる」と信じているからだ。俺は、そう思う。」

曹長の言葉に息を詰まらせた。視線は変わらず曹長を捉えてる。曹長が立ち尽くす女性兵士ふたりから視線を外すと、今度は屋根に登ろうと背を向ける。

「あんたがギンター少尉をどう思っているかが、俺には関係ない。俺は任務を全うしたいだけだ。だから、あんたたちにギンター少尉と同じように俺を信じるとは言わない。こうして無茶を平気で言うし、俺の親父は英雄でもない。」

ユーゴヴィッチは軽やかな身のこなしで屋根の上に登ってしまった。エシエンはまだ塀に手を掛けて登ろうとしていた。

「だが、俺はこの無茶をやって勝てると思ってる。それに俺はこのチャンスを与えた奴に賭けたんだ。そう・・・チャンスを与えたのはあんただ、メルキオット軍曹。」

「えっ!?!」

押し黙っていたが、思わず声を上げてしまった。ユーゴヴィッチ曹

長は嫌味のない笑みをたたえていた。笑みを返す心の余裕も、胸に波打つ感情もユーゴヴィツチに伝えられるものじゃなかった。

「あんたが一緒に戦おうと言ったあの時、あんたの目を見て思った。絶対に勝って街を取り戻すって風だった。だからみんなは従ったんじゃないか？あんたが勝利を信じてると思ってるってみんな奮い立ったんだ。そんな“女神”がくれたチャンスだ、外すわけがないと思って乗ったのさ。」

男がニヤついた感じとは違う、ニコリとした笑みを向けている。その隣にようやくエシエンが辿りつく。

「連戦連勝のギョウター少尉もあんたみたいな目をしていたんじゃないか？だから無茶な作戦でも戦ってきたし、勝ち続けて生き延びてこられた。彼が妹を亡くして悲しみに沈んでいるのは分かる。けど、それで自分を見失って半端な思いで隊を率いているようにあなたには見えたのか？違うだろ？」

思わず頷いていた。そして、無意識の内にライフルを握る手にぐつと力がこもっていた。目をつむり、振り払おうとしていたざわめきにも似た思いを今度はしっかりと受け止めていた。

「これまでもギョウター少尉を信じて追ってきたんなら、最後まで信じてやるんだ。俺はちゃんとあんたの“おじさん”を信じている。それに自分自身のこともな。隊長に肩を貸す立場なら尚更だ。」

曇らせて胸をざわつかせていた思いが晴れるような気分だった。心の底で顔をのぞかせていた臆病な自分を恥ずかしく思った。

「アリシア・・・」

エヴァンス上等兵が、軍曹の小さな肩に手を置いた。顔を上げると、ブルーグレーの瞳がこちらを見つめ、しっかりと頷いた。赤褐色の瞳が見つめ返すと、弾むように頷き返した。

「分かったろ？ちよつとはあんたのことも信頼しているんだぜ、メルキオット軍曹。なんせ幸運の女神だからな。少しは俺を信用してくれてもいいんじゃないか？」

ユーゴヴィッチがいつものニヤけた顔に戻るのを見て、思わず笑みをこぼし、首をかしげたので赤いスカーフが揺れた。

『絶対にブルーールを取り戻す。ウエルキンだってそう信じているはず．．．』

第7小隊のふたりが扉に手を掛けて登り始める。先に登った男ふたりが、手を差し出して女ふたりを引き上げる。

「行きましよう！！」

メルキオット軍曹が曇りない瞳を見開いた。ユーゴヴィッチがちらとその瞳を覗き込むと、あの時と同じ澄んだ瞳だった。簡単に揺るぎそうもないなと思い、ユーゴヴィッチがニヤリと口元を曲げる。

4人は屋根の上に踊り出ると姿勢を低く保ち、砲声を撃ち鳴らしている砲台が据えられている建物へと移動を始めた。

16. 受け継がれるもの（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第7小队<

イサラ・ギンター / 伍長 / 戦車操縦士（回想）

クライス・チエルニー / 伍長 / 戦車操縦士

イーディ・ネルソン / 上等兵 / 突撃兵

リイン / 上等兵 / 突撃兵

オスカー・ベイラート / 上等兵 / 狙撃兵

エミール・ベイラート / 上等兵 / 狙撃兵

マリーナ・ウルフスタン / 上等兵 / 狙撃兵

リオン・シュミット / 上等兵 / 整備兵（回想）

登場兵器

（名称／主武装）

>ガリア義勇軍<

ガリア軍中戦車（エーデルワイス号） / 44口径88mm砲・

12.7mm戦車機銃

16・受け継がれるもの

「前進！」

無線からの声に応えるように出力レバーを倒すと、すぐにラグナイ
トエンジンが呼応し車体が前進を始める。操舵輪を左に切るとやは
りすぐに反応してそちらへ旋回を始める。

これまで様々な種類の戦車や装甲車といった戦闘車輛を操縦してき
たが、この車輛ほど操縦士の思いのままに動いてくれるものに出会
ったことはなかった。この車輛に実戦で搭乗するのは初めてだった
が、すぐに自分の意思のままに操ることができた。

エーデルワイス号の操縦席に収まるクライス・チエルニー伍長は、
駆動系統の反応を確かめるように丁寧に操作を行っている。

操舵輪やレバーやペダル、それらに繋がるエンジンやシャフトやギ
ア、車輪からブレーキシステムにいたる駆動系統。眼前に並ぶ各種
計器類やスイッチ、回路の接続に応じて灯る制御灯などの電気系統
砲塔の下にあり、砲弾の装填を自動で行う画期的な射撃管制装置。
被弾時のダメージを最小限に留めるための傾斜装甲と、近接戦から
中長距離の射撃にも対応できる威力と有効射程を持つ主砲

クライスは自らの手に触れ、目に触れるものはもとより、この車輛
を構成する全てのものに開発者と以前の持ち主の魂が宿っていると
感じていた。

クライスが操るデールワイス号を設計、開発したのは、ダルクス人
技術者のテイマー博士である。前大戦の英雄、ベルゲン・ギユンタ

「將軍を影で支えた技術者とされるが、ダルクス人であるが故にクライスのような技術畑を歩む者でなければ、世間的にはあまりその存在を知られていない人物だった。

多くの先進技術を生み出すだけでなく、それらを最大限機能させる^{デザイン}形状にまで落とし込み、それを自らの手で製造し、さらにその運用方法に至るまでの革新的な思想を残した人物

クライスはティマー博士の残した文献や^{アーカイブ}図面の記録、実際に設計・製造された兵器や機械、その一部である部品に至るまで、彼が残したとされるもののうち、自分の目に触れることの出来るものはほとんど全てに目を通してきた。

クライスは小国のガリアであつても、^{テクノロジー}技術によって大国の脅威を退け、人々の平和を取り戻し、未来が拓けると信じていた。

最初にその思いを胸に宿したのが、ティマー博士の存在を知ったときだった。技術者でありながら、軍に身を置いているのもティマー博士の存在に依るところが大きかった。

そして今、技術者でありながら戦場に身を投じる兵士になつたのは、もうひとりの技術者の存在があつたからだ

眼鏡のレンズに汗がしたたらぬように袖で額を拭う。戦車内部が蒸し暑いこともあるが、鋼鉄の鎧に守られているとはいえ、戦場の只中にいるという緊張感からか全身汗にまみれていた。

「クライス、とにかく怯まずに進んでくれ。」

「了解しました！」

ギョントー少尉の声がクライスにはその内容とは裏腹にとても平静な響きをもって聞こえた。そのお陰か恐怖と緊張が和らぎ、幾分落ち着いた気分になることができた。それでも速くなる鼓動は首の動脈を打つのが分かるほどで、無意識の内に力んでいるせいか操舵輪を握る手がやけにくたびれてきた。

落ち着かせようと努めるほどに、奥歯をぐつと噛み締めている自分に気がつき、やり場のない悔しさがこみ上げてきた。エーデルワイス号に守られていながら、震えが止まらない自分に彼女の代わりが務まるのか

『彼女はこの戦場で、エーデルワイス号の中にいてどんな気持ちだったんだろう』

クライスがその少女と出会ったのは、半年前のこと、戦争が始まったばかりの頃だった。首都近郊のヴァーゼルが帝国の手に落ち、ラングリーズでは首都決戦も噂されていた頃で、年長の整備兵の中には戦車操縦士として志願、または招集される者まで現れていた。

「クライス、この戦車のこと聞いているか？」

その日整備棟の格納庫ハンガーに行くと、声を掛けてきた同僚のリオン・シユミットの傍らに見慣れない戦車が停まっていた。

「ガリアの新型戦車かな？でも、俺たちに何も話がないなんて変だよな？」

カラーリングは他の戦車と同じガリア特有のブルーだったが、ガリア軍に配備されている小型軽量の巡航戦車クルーザーとは明らかに異なる形状

だった。しかし、クライスはその車輛を一目見た瞬間にテイマー博士が手掛けたものであると分かった。

「これは、私の父テイマーが開発したエーデルワイス号です。」

ふたりの整備兵が声のする方を振り返ると、そこにはトリコロールカラーの軍服の上にダルクス模様のケープを羽織った少女が立っていた。

ギユンター將軍の養女であり、亡きテイマー博士のただひとりの娘、イサラ・ギユンターであった。

エーデルワイス号は彼女が故郷のブルールから逃れる際、自ら操縦し持参した車輛だった。首都に避難した後、程なくして義勇軍に入隊し、義理の兄であるウエルキン・ギユンター少尉が指揮する義勇軍第7小隊へ戦車操縦士兼整備兵として配属されていた。

彼女は幼い外見に似合わず、その言動はとても大人びていて物事に動じない肝の座った人物だった。クライスはその性格はもちろん、何より彼女の知識の深さに驚かされた。弱冠16歳ながら技術者としての腕も並外れていた。

エンジニアリング機械工学はもちろんのこと、金属やラグナイトなどに関する材料工マテリアルサイエンス学、軍の研究機関やランドグリーズの大学でも研究が始められたばかりであるはずの電子工学エレクトロニクスについての知識まで有し、研究から設計・開発をすべて自分の頭脳とその小さな手でやってのけた。

その後、彼女がエーデルワイス号の整備のために格納庫を頻繁に訪れるようになると、その度にクライスは彼女と様々な意見を交わし打ち解けるようになる。

彼女がダルクス人であること、自分より年少であることなどを気にも留めず、自分がティマー博士を尊敬し、彼の実績の全てに触れてきたことを話し、彼女から新しい知識を吸収したいと教えを乞うように自ら進んで語りかけるようになっていた。

クライスの熱心さに対して、彼女も真摯な態度で応え、時に少女らしい屈託のない笑顔を見せるまでに心を開いて接するようになっていた

「敵重戦車、11時の方向!!」

ヘッドホンからペリスコープを覗くギンター少尉の声が響く。すぐさま頭上から旋回砲塔が駆動する機械音が聞こえてくる。

「そのまま、前進だ!!」

ギンター少尉の指示を受け、操舵輪をぎゅっと握り締める。

四角く平べったい覗き窓に仕切られた視界が、戦車が前進するにつれてその振動で小刻みに揺れながらもゆっくりと流れていく。

西陽をその石造りの肌に受け、オレンジ色に染めた二棟の崩れかけた風車塔。

遮蔽物に隠れながら、時折身を起こして敵の本拠点に向けて小火器を撃っているブルーの戦闘服を纏った兵士。

積み上げられ、銃弾が当たり土煙を立てる土囊。

赤茶けた色のレールを組んだ障害物。

はためく帝国軍旗。

うごめく鈍色の装甲服や鉄兜。

そして、黒鉄色をした鋼鉄の機動兵器タンク

「兄さんをいつかこの飛行機に乗せて空を飛ばせてあげたいんです。

」

眼前にあるまだ未完の機械を前にそうつぶやいた彼女の横顔は天才技術者のものではなく、あどけない16歳の少女のものだった。

彼女は部隊が基地内で待機中の間、格納庫の端で密かに空を飛ぶ機械 飛行機の開発をしていた。クライスや同僚のリオンも彼女に願いでその作業を手伝っていた。

飛行機は各国で研究が進められていはいるもののまだ実用化されてはいなかったが、クライスは彼女の話す航空力学の理論や彼女が描いた図面を見るに、完成すれば必ず空を飛ぶことができるかと確信していた。

クライスは眼前の機械が空を飛ぶ姿を思うと興奮を隠せず、目を輝かせながら開発の手伝いに熱中した。

彼女もまた大きな瞳を輝かせながら工具を手に未完の飛行機に向かっていった。ただ、兄のことを語る時の彼女の瞳は、クライスのよう

な技術への情熱に溢れるものとは別の光を宿していた。

「私はこの髪や目の色、このケープのことで小さい頃から他の子どもにいじめられてきました。汚い言葉を浴びせられたり、時に暴力を振るわれたりもしました。」

彼女が兄のギウンター少尉のことを話す時、クライスは語り合うときのような大人びた口調ではなく、落ち着いてはいるが一言ずつ言葉を切って語るのが常だった。

「兄はそんな私をかばい、時に身体を張って守ってくれました。血の繋がらない妹の私をずっと大切にしてくれました。そんな兄にいつか恩返しがしたいっていつも思っていて．．．前に兄と野鳥観察に行った時に鳥のように空を飛びたいって言っていたんです。もし飛行機があれば、兄の願いを叶えられるかなって思って、だから

「

ぶかぶかの革手袋が白く小さな手を包んでいて、兄から貰ったという工具レンチがそつと握られている。小さな手に余るほど無骨で大振りな工具を愛おしむように見つめながら、彼女は一言ずつゆっくりと言葉を切りながら呟いていた。それは、飛行機の完成が間近に迫ったある日、ちょうど今と同じ夕暮れ時のことだった。

イサラ・ギウンターはマルベリー海岸の帝国軍陣地攻略作戦の際、銃弾を受けて戦死した。

戦死の報を聞いたとき、クライスはいつものように格納庫の隅で飛行機の開発を続けていた。クライスは飛行機の図面やメモ書き、手にかけていた部品など、彼女が残した仕事の跡をひとつひとつ手に取って確かめた。

クライスは何度も描き直された凶面の端に彼女が綴った一文を見つ
ける。

『兄ウエルキンに捧ぐ』

クライスは未完の飛行機を“イサラ”と命名し、その翼に亡き設計
士の名をペイントした。凶面の端に見つけた彼女の言葉とともに

そして、欠員となった第7小隊の戦車操縦士に志願することを決め
る。

同じ技術者として、彼女の想いをこの翼に乗せて届かせるために

父が造り、その娘が受け継いだエーデルワイス号をもう一度動かす
ために

小銃弾が車体を叩き、甲高い金属音が車内にも届いてくる。さきほ
ど拭ったはずの汗が額を流れ眼鏡の下を通って鼻筋を伝う。

重戦車の旋回砲塔がこちらを捉えようとゆっくり動き出すのが見え、
頭の後ろで血の気が引く音がしたが、クライスは目を背けなかった。

「そのまま、そのまま・・・」

少尉の指示は回避運動ではなかった。クライスは標的を見据え、神
経を操作機器を捉える手足に集中するあまり、しばらく呼吸を忘れ
ていた。気を失いそうになったが、車体に走る衝撃と頭上に響いた
轟音で一気に醒めた。

エーデルワイス号の主砲が砲弾を撃ち出した。

ラグナイト弾が青い光の尾を一直線に引いて、こちらにまっすぐ向いていた敵重戦車の旋回砲塔を寸分の狂いなく捉えた。青白い爆発を起こして、鋼鉄の機械を見事に破壊した。

「よし、みんなを援護しよう。全速前進！」

ギンター少尉の芯のある声が無線機を通じて耳を打ち、無意識に安堵の溜息が漏れた。

「クライス、よく逃げずに指示通り動いてくれた。イサラもきつと安心しているよ……」

クライスの溜息を聞いてか、ギンター少尉の声がヘッドホンに返ってくる。一言ずつ言葉を切るその話し方は、妹が兄について話すときに似ていた。

「は……はい。」

クライスは少し乱暴に眼鏡の下を拭った。

覗き窓の視界には、馴染みの隊員たちの姿が間近にあった。

ランザート上等兵とピエローニ上等兵が進路上のバリケードに爆薬を仕掛け、ポッテル軍曹が他の隊員を下がらせている。

シユターク伍長が遮蔽物を乗り越えて、次の遮蔽物目掛けて駆け出し、彼女をイーディ・ネルソン上等兵とリン上等兵が後に続いて

援護する。

双子のベイラート兄弟がやや後方の位置から、狙撃銃で狙い撃っている。マリーナ・ウルフスタン上等兵は、ベイラート兄弟と同じGSRスナイパーライフルを構えて、ふたりよりも慎重に、しかし着実にひとりずつ敵を仕留めている。

クライスは、隊員たちの姿に目が釘付けになった。額を伝う汗を拭おうともせずに

『イサラさん、あなたがどんな気持ちで戦っていたか、少し分かった気がします』

出力レバーを握る手にぎゅっと力がこもる。恐怖や緊張で力んでいるのではなく、それらに抗うように自らの意思で力を込めた。

対甲兵装のなくなった重戦車へ対戦車槍が撃ち込まれる。弾頭を放った兵士の腕には第4小隊のワツペンがあった。その兵士を援護するように、マグス短機関銃を撃ち放つ兵士も同じワツペンだった。

クライスの目にはワツペンまでは見えていなかったが、ふたりが第7小隊の兵士ではないことには気がついてきた。ギョンター少尉もまた、ふたりの兵士には気がついてきた。

同時にある兵士がいないことにも気がついた。

姿が見えなかったのは、戦場ではよく目立つ赤いスカーフをいつも頭に巻いている小隊副官だった。

17・銃下のワルツ

路地を進んできたときのようになり、ユーゴヴィッチを先頭に間に第7小隊の女性兵士ふたりを挟んで縦一列で進む。先ほどと違うのは今いるのが地面の上ではなく建物の上であることだった。

スージー・エヴァンス上等兵はすぐ目の前のアリシア・メルキオット軍曹の小さな背中だけを見つめていた。赤褐色の長い髪が揺れていて、赤いスカートの結び目が目についた。

エヴァンス上等兵はブルールの生まれだった。同い年のメルキオット軍曹とは開戦前の自警団にいる頃からの知り合いで、小隊の中ではもっとも付き合いが長い。

これまでの戦いでも同じ偵察要員であるメルキオット軍曹の傍に付き従いともに戦いをくぐり抜けてきた。未だに戦場に立つと恐怖で足がすくんでしまうが、気丈なメルキオット軍曹に引っ張られるように、なんとか自分を奮い立たせていた。

目標の建物から砲声が轟き、その拍子にエヴァンス上等兵が屋根の斜面に脚を滑らせバランスを崩して尻もちをついてしまった。ガタンと音がしたので前に行くふたりが咄嗟に振り向いた。

「スージー、大丈夫？」

赤褐色の髪の毛と同じ色の瞳がこちらを覗き込み、すらりとした手が差し出される。

「ええ、平気です。」

「滑り落ちないように頼むぜ。」

メルキオット軍曹の手を掴み、エシエンに支えられ立ち上がる。先頭に行くユーゴヴィッチはもう前進を始めていた。

その曹長が屋根の道の終わりりでピタリと音もなく止まると、先ほどの地雷を見つけた時と同じように「待て」と掌を返した。

後続の3人が止まるのを感じたのか曹長が音もなく踏み切ると、屋根から飛び降りて階下に姿を消してしまった。

何かが地面に倒れる音が相次いで、しばらくしてから声が返ってきた。

「いいぞ。降りてこい。」

カラツとした声がある方へ屋根の端から覗き込むと、ユーゴヴィッチ曹長がこちらを見上げていた。足下には事切れた帝国軍兵士がふたり地面に倒れている。

「し、死んでいるんですか？」

エヴァンス上等兵がブルーグレーの瞳をぱちくりと瞬かせて見下ろしている。

「地雷のお返しよ。」

エヴァンス上等兵は曹長の悪趣味な冗談にぞっとしてしまった。曹長のお陰で、3人はゆっくりと“安全”に屋根から降りることがで

きた。

曹長のそばまでやって来てはじめて動かなくなった兵士が血を流しているのが分かった。ユーゴヴィッチ曹長が短剣ダガーの血を振り払い、腰のホルスターに収めるのを見てエヴァンス上等兵が卒倒しそうになる。

「あなた…本当に義勇兵なの？」

メルキオット軍曹が、曹長の仕事の跡を確認して訊いた。

「ああ、こう見えて大学生だ。一応、おたくのウエルキン隊長と同じランドグリーズの大学だよ。まあ、彼とは得意分野が少し違うかな…」

「うん…だいぶ違うと思う…」

メルキオット軍曹が大げさに頷いてふたつの死体から離れた。曹長がさつとあたりを確認して、目の前の建物に顎をしゃくる。

「この建物だな？」

エヴァンス上等兵とメルキオット軍曹が揃って頷く。4人が立つ路地の先を曲がるとそこは広場に出るようになっていて、仲間が戦車や敵兵士を相手に戦っているはずだった。ちょうど敵本拠点の側面、重戦車の背後に出る。

「行くぞ。」

4人が建物裏手に取り付く。壁際に並んでびったり身体を寄せて息

を殺した。裏口の戸は出入りがしやすいように外されている。ユーゴヴィッチがそつと覗き込む。曹長が「追いて来い」と手信号で合図し建物に入る。3人がそれに続いて裏口をくぐる。

1階部分は誰もいなかったが、天井がギシギシと軋んでいて数人の人間が上階にいるのが分かった。

ユーゴヴィッチはまつすぐ階段を目指し3人が続く。階段は建物正面から上がるように向いており、裏手からは回りこむようにして上がらなければならない。階段は幅が広く、上方の空間も空いている。砲台を運ぶには確かに十分な広さだった。

ズドンという砲声が起き、建物がビリビリと揺れたのでエヴァンス上等兵が肩をすくめる。ユーゴヴィッチが素早く回り込んで階段の上へライフルを向けようと振りかぶる。

その銃身が何かに当たった勢いで弾かれ、その拍子に合わせるようにユーゴヴィッチが反射的に後ろに飛び跳ねた。くぐもった銃声と木造の建物が軋む音を貫くように、やけに澄んだ音が部屋に響いた。

ガリアン小銃の銃口が帝国軍兵士が身に付けている薄い金属でできた胸当て（プロテクター）に当たったのだ。

壁際に張り付いていた3人のガリア兵と、砲声と砲撃の揺れに紛れて階段を駆け降りてきた帝国軍兵士がまるで人形のようにその場に立ち尽くし、やはり人形のように目を大きく見開いていた。ただ、ユーゴヴィッチ曹長だけは動きを止めていなかった。

ユーゴヴィッチが上半身を回転させながらライフルの銃床ストックを振り上げて、装甲服の兵士の顎に食い込ませた。一撃を喰らった兵士は左

に吹っ飛び3人の前へどさりと倒れる。

「曹長!!!」

「上の連中を抑えろ!!!行けつ!!!」

エシエンが駆け寄るが、ユーゴヴィッチの声に反応してか咄嗟に切り返すと一気に階段を駆け上がる。メルキオット軍曹もすぐに腰を上げて褐色の肌をした上等兵に続く。

倒された兵士がただひとり動けないでいるエヴァンス上等兵に気がついて、腰から諸刃の短剣を抜くと彼女の喉元目がけて真つすぐ突き出して踏み込んだ。刃紋が確認できるほどのところまで短剣が迫ってきて、エヴァンス上等兵がヒツと小さな悲鳴をあげた。

切っ先がブロンドの娘の首に触れるすんでのところ、ユーゴヴィッチがその短剣を蹴り上げて足がすくんで動けなくなった上等兵の前に割って入る。

「何やってんだ!!!」

曹長が怒鳴ると同時に、襲いかかる兵士へ先ほどとは逆の頬に一撃を見舞う。帝国軍兵士が今度は右に吹っ飛ぶ。

「スージー!こっちへ!!!」

メルキオット軍曹が踵を返して、上等兵の腕を掴むと力に任せて彼女を引っ張った。階下の騒ぎに気がついたのか天井が激しく軋んでいる。エシエンが素早く手榴弾を取り出すと、柄のピンを抜いて階段の中頃から二階に向けて放り投げる。手榴弾が壁に当たって跳ね

返り部屋の中に消えた。

上階で爆発が起こると同時に、曹長が振り下ろしたライフルの銃床が兵士の頭部を捉えて鉄兜が吹っ飛ぶのをブルーグレーの瞳が捉えた。階段の上からギャツという呻きがして、そちらへ腕を引つ張られるのに従って視線を移すと小さな爆風が階段の上から吐き出されるのを見た。

階段を駆け上がるエシエンの肩越しに爆風に紛れて人影がぬつと階段上に踊り出すのが見え、小銃の発射炎が瞬いたかと思うと前を行くエシエンが階段の途中でくずおれた。エヴァンス上等兵は自分の腕を掴む手が離れたのを感じてすぐにその場で身を屈めた。

今度は耳元でパンパンと乾いた炸裂音がすると階段上の帝国兵の胸にふたつ穴が開いてその場に力なく倒れるのが見えた。

メルキオット軍曹が放ったガリアンから飛び出した空薬莖が足元に落ち、反射的に顔を起こすとまたも部屋から頭から出血している帝国兵が必死の形相で飛び出してきた。

ところが、被弾したエシエン上等兵が階段を転げ落ちてきて、ふたりの女性兵士がその体躯を受け止める格好になり頭を負傷しているらしい新手の兵士の突進を許してしまった。

エシエンの重量を支えきれず、ふたりが階段を滑り落ちる。エヴァンス上等兵はのしかかるエシエンに挟まれるかたちで身体を壁に打ちつけられその衝撃で目をつむってしまったが、帝国兵士の恐ろしい叫び声がしてすぐに目を見開いた。

突き下ろされた小銃には銃剣が据え付けられていて、彼女と同じく

ハコネット

壁際に押し付けられた軍曹の眼前に迫っているのが見えた。

「アリシア!!」

悲鳴にも似た女の叫びが建物に反響したので、銃剣で襲いかかる兵士の命を奪う音は誰も聞こえなかった。

エヴァンス上等兵は眼前を何かかものすごい勢いで通過したのを知覚した後、メルキオット軍曹を突き刺そうとした兵士の首へ真横から帝国軍の短剣が突き立てられるのを目撃した。短剣はきれいに兵士の動脈を捉えて貫通していた。首に刃物が刺さった兵士の頭が一度ぴくんと動いたが、血飛沫を上げて切っ先が突き抜けた方向にゆっくりと倒れた。

「危なかったな…」

声のする方へ涙で潤んだブルーグレーの目を向けると、部屋の真ん中で短髪の青年が膝立ちの姿勢でこちらを向いていた。傍には短剣でエヴァンス上等兵の首を狙った兵士が仰向けのまま動かないでいた。

「だめかと思っただ…」

メルキオット軍曹が長い溜息を漏らしてぺたんと階段下の踊り場へあたり込む。

「エシエン、大丈夫か!？」

ユーゴヴィッチがエヴァンス上等兵の上に覆いかぶさっているエシエンを抱き起こす。

「曹長…俺、死ぬんですかね…」

「死ぬ前にまず彼女から離れる。美女に抱かれたまま死ぬなんて真似は昇進してからにしろ。」

エシエンの傷を検分したユーゴヴィッチはその深さを見て問題ないと見たのか、口元を緩めて冗談を飛ばしてみせる。エシエンは汗の玉が浮かぶ褐色の顔を歪ませ、曹長の冗談になんとか白い歯を見せたい。

曹長と同じく褐色の肌の男を抱えていたエヴァンス上等兵は、自分では傷の程度が分からず飄々とした下士官の台詞も悪い冗談に思えず、瞳に溜めていた涙が溢れるのを抑えられなかった。エシエンが両手で抑えている右の脇腹から流れ出た血が自分の太腿に滴るのが感じられ、その生暖かさに驚いて目を瞬かせたので涙が止まった。

「大丈夫よ、弾は貫通しているし急所は逸れているから。」

メルキオット軍曹が背囊から応急処置用のラグナエイドを取り出し、底部にあるスイッチを作動させる。ラグナエイドが負傷箇所に対応して青い光を放ち、エヴァンス上等兵がその様子を見て携行していた簡易医療キットの封を切り、真新しい止血帯を取り出すと出血が治まりかけた脇腹にそつと当てた。

「メルキオット軍曹、こいつを頼む。上の陣地^{ネスト}を見て来る。」

ユーゴヴィッチがブロンドの兵士に目配せで追いて来るよう合図する。慌ててエシエンを軍曹に預けるとよろけながらおもむろに腰を上げる。男が素早い身のこなしで階段を駆け上がるのに対し、エヴ

アンス上等兵はまだ恐怖感が残っているのか足元がおぼつかない。

「大丈夫、敵は片付いてる。もう誰もいないよ。」

曹長に促されて部屋を覗き込むと、砲煙を吐く対戦車砲が部屋の真ん中に据えられていて、あたりに広場を狙い撃っていたのと同じ砲弾が転がっている。壁際に身体がズタズタになった兵士がもたれかかって動かないでいた。肉が裂け血みどろになった胴体とは対照的に、その顔は傷もなくきれいなままで、そして若かった。

「床を踏み抜くなよ。」

曹長に注意された手榴弾が炸裂したらしいところは、床がめくられて裂けた木材が天井を向いている。足元を確かめるように部屋の中へと入る。広場側の壁に風穴が開いていて、ここが対戦車砲の銃眼の役目になっていたらしく今では広場の銃撃戦の音だけが漏れ届いてくる。曹長はすでにその風穴から広場の方を覗こうとしている。

「ここからなら敵の拠点を上から撃てる。エシエンと軍曹を呼んできてくれ。」

最後の攻略目標へ視線を注ぎながら、ユーゴヴィッチがエヴァンス上等兵へ告げる。その直後、風車塔北側の通りから大きな影がふたつ姿を現すのが視界の端に映ったが、それを彼女に言い添えるには気づくのが遅すぎた。

エヴァンス上等兵が階段に戻ろうとした刹那、先程から聞こえていたものよりも明らかに大きな銃声があったので、そちらに勢いよく振り向いてブロンドの長髪が大きく揺れた。

ユーゴヴィツチが後ろに仰け反るようにして倒れ、そのすぐ後で石壁や千切れた天井が銃弾で叩かれて爆ぜるのが見えた。

「くそ！敵の増援だ！！」

怒鳴るユーゴヴィツチがすぐに風穴から身体を引っ込める。頬のこけた顔を歪め右手で左の上腕を押さえていた。ブロンドの女が軽やかな身のこなしで腕を撃たれた男のもとに駆け寄ってきた。銃弾が尚も石壁や天井をやかましく削っているが、女は怯む様子もなく曹長の隣にやってきた。

「大丈夫ですか！？」

「掠っただけだ！それよりも、ぼんやりして頭を出すんじゃないぞ！！」

喧騒に気がついたのか、メルキオット軍曹が駆け上がってきた。

「スージー！ユーゴヴィツチ曹長！」

「北側から増援のお出ました。片づけた先から次から次へ…」

ユーゴヴィツチが広場の方へ顎をしゃくる。メルキオット軍曹がすぐにくにふたりの元に駆け寄り、エヴァンス上等兵が無駄の無い手つきで新しい止血帯を取り出し曹長の赤く染まる上腕部に当てていた。曹長はエヴァンス上等兵の階下での怖気付いた様子とは見違えるような一連の動きに少し驚いたようで目を見開いて彼女の横顔を見つめている。

メルキオット軍曹がそっと首を伸ばして広場方向を確認すると、曹

長の言うこととは別にふたつの出来事が起こっているのに気がついた。

ひとつは敵本拠点の兵士たちが、後退を始めていることだった。敵重戦車が破壊されたのか、シユターク伍長たちが攻勢をかけているのか、今いる場所からは角度がなく確認できない。

もうひとつは北側から現れた増援部隊が敵本拠点後方とは別に、風車塔東側に向けて展開していることだった。メルキオット軍曹には増援部隊が広場東側を牽制している理由がすぐに分かった。

親子風車のすぐ下にふたりのガリア兵が孤立していて、そのうちのひとりが接近する新手の歩兵目掛けて応射している。応射するひとりが身を起こして駆け出すと風車塔の影に潜り込んで見えなくなってしまった。

そこへ走り寄る帝国兵が相次いで撃たれたのだが、身体が爆せて半分無くなってしまふなど、その被弾した様子が尋常ではなかった。

もうひとりのガリア兵が帝国兵を葬った兵と反対方向へ駆けて行き、その兵が足を引きずっていること、そしてメルキオット軍曹にはその背格好が自分がよく知る兵士と良く似ていることに気がついた。

広場北側からいくつか銃声がして、ひとつが自分の頭上を掠めたのと、もうひとつが片足を引きずって駆けるガリア兵の動きを止めたのが分かった。

「おじさん!？」

「!?!」

叫び声に顔を上げたとき、赤いスカートの残像だけしか見えなかった。

「アリシア!？」

「嘘だろ!？」

ブロンドの兵士ふたりが揃って広場に向いて開いている風穴から勢いよく身を乗り出した。

階下に飛び降りた軍曹が着地と同時に受け身をとるべく、くるりと身を丸めて前転し勢いそのままに起き上がるとすぐさま駆け出していた。

「軍曹、戻れ!！」

メルキオット軍曹は曹長の制止を無視し、長い髪を振り乱して走り去る。北側からわらわらと展開する敵部隊と、本拠点から後退する防衛部隊残党の間を一直線に駆けていく。帝国軍兵士が小銃を構えるが、互いの射線に味方がいると分かると同士討ちを恐れて誰も発砲しなかった。

ユーゴヴィッチが彼女の向かう二棟の風車塔の先に目を向けると、ブルーの戦闘服の兵士が広場の只中で動けずに取り残されていた。

「ヴィルトウール少尉!？」

ユーゴヴィッチがさらに身を乗り出そうとしたが、隣のエヴァンス上等兵に抑えられるようにして伏せさせられた。先ほど狙撃された

のと同じ左手方向から、装甲兵員輸送車の20mm機関砲がやや低速の恐ろしい連射音を響かせて弾丸を撃ち込んできていたのだ。

機関砲弾が風穴の石壁や天井の梁を荒っぽく削り、剥がされた破片や屑が折り重なって伏せるふたりの兵士へ降って注ぐ。ユーゴヴィッチ曹長は覆いかぶさる女性兵士を跳ねのけようと試みたが、華奢な体躯からは想像できないほどの力で抑えつけられているのが分かり、両の拳をただぎりぎり握り締めた。

17・銃下のワルツ（後書き）

話を追う毎に長くなっていますが、もうすぐ終わります・・・あと2
\3話(?)を予定しています・・・

18・狩人の狂気（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

>東ヨーロッパ帝国軍第13機械化軽歩兵連隊第1狙撃小队<
ウラディミール・マシター / 伍長 / 狙撃猟兵

>東ヨーロッパ帝国軍第9機甲師団第41戦車中隊<
エディン・パブリチェンコ / 大尉 / 中隊長

登場兵器

（名称／主武装）

>東ヨーロッパ帝国軍<
装甲兵員輸送車 / 20mm車載機関砲

登場火器

（名称／型式／種類／携行兵科）

>東ヨーロッパ帝国軍<
ZM SG / 4 / 狙撃銃 / 狙撃猟兵

18・狩人の狂気

6倍望遠スコープの丸く切り取られた視界の中、風車塔の真下でひとりのガリア兵が仰向けに倒れるのを確認し、26歳のウラディミール・マシタ 伍長は自らのZM-SG狙撃銃の槓桿を引いて、次なる目標を貫く7.62mmの弾丸を薬室に送り込んだ。

素早く右上方の建物二階へと丸い視界を動かす。風車塔下の兵士を仕留める前、崩れかけた壁の間から姿を覗かせていたガリア兵を撃つたばかりだったが、そちらは仕留め損ねていたからだった。

建物の陰からのこのこと顔をだしたところを見ると、およそ“同業者”には思えなかったが掠り傷を追わせた程度では簡単に安心できるものではない。

マシタ - 伍長は第13機械化軽歩兵連隊のマーキングが施された装ハ甲兵員輸送車の隣、広場北側の出口脇に築かれた土囊陣地に腰を据えていた。彼は狙撃小隊のエースでこれまでも多くのガリア兵を死の谷へと突き落としてきた。

他の腕の立つ狙撃手は決まって敵将を撃つては、その人数分だけの勲章や褒賞を欲していた。

勲章や褒賞を得たところで、殺し合いから逃れられる訳ではない。むしろ敵の将兵をひとりでも撃ち殺した途端に周囲から中途半端に英雄扱いされ、優れた“駒”と見た司令部によって激戦地へと送り込まれそこで死ぬのがオチだった。

マシタ 伍長にとって勲章は死刑宣告に等しかった。

それ故、伍長が獲物を選ぶ基準は他の狙撃手とは異なっていた。

マシター伍長が決まって狙うのは、怖気付いて動けずにいる兵士や傷を負いながらも必死で足掻く兵士、絶望に駆られ戦意を失い逃げ出す兵士などである。

彼ら迫る死の恐怖にのまれようとしている兵士たちに、自らの引き金によってじわじわと死の淵へと追い込んでいくことを愉しんでいた。

恐怖に引き攣る彼らの顔を堪能してから最後に息の根を止めるのだ。マシター伍長も他の兵士と等しく恐怖に怯えることもある。

ただ、自らの放つ銃弾で恐怖に取り憑かれていく敵兵をスコープで覗き見るうちに、その行為が自分自身の中で快感へと変わっていった。自分に降り懸かる恐怖を千切るようにして銃弾に込め、敵の肉体へと苦痛を伴って植えつけていくのだった。

そうすることで、自分を蝕もうとする恐怖を取り去ることができ。しかも代わりにこの疲れて荒みきった心に快感をもたらしてくれる。そう思うようになっていった。

味方の兵士であっても彼の“嗜好”を知ると気味悪がって彼を避ける者が多かった。それでもマシター伍長は気にも留めなかった。戦場では味方の兵士と親しくなる前にその兵士が敵の銃弾に倒れて死んでいったからだ。

開戦時から生き残っている兵士は、同じ部隊にはもうほとんどいな

かった。目の前の戦闘でさらにその数は減っている。

ブルー近郊に展開していた他の小隊と同様、自分の小隊も哨戒の任にあたっていたが街の防衛に当たる第41戦車中隊の通信を受けてすぐさま街へと舞い戻った。

前日は別の小隊が帰還せず、すぐ近くまでガリア軍が迫っていることを確信していた。連隊はすでに半数以上の兵を失い、彼ら兵士を運ぶ車輛も同程度に失っていた。

ガリア軍の反撃が激しくなっていて以降、いくつかの敗残部隊がこの国境の街に流れ着いては、その中でもっとも階級が上の士官によって混成部隊として再編され間を置かずに移動していった。

各方面の友軍はナジアルへと集結しつつあり、物資の補給や兵員の補充もすべてナジアルへと向けられていた。

街の防衛のために残されたのは、整備が満足に出来ず移動もままならない数輦の戦車と自分たちの連隊だけになった。

最後にやって来たブルーよりも西のデイルスバーグから撤退してきた部隊が街を出たのが1週間前のこと。最後の補給を受けたのがさらに1週間前のことだった。

街で収奪した物資や食料はもう何ヶ月も前に底をつき、ここずっと携帯糧食しか口にしていなかった。そのせいか、戦闘服がブカブカになり身につけている金属製の防護板が尖った肩に擦れて痛かった。

防衛部隊の指揮官エディン・パブリチェンコ大尉は街の放棄と撤退を既に各部隊に通達していた。マシター伍長ら連隊の仕事は生き残

つた兵士を車輛で拾い、あとはひたすら国境まで退却するのみだった。

大尉の通信通り、自分たちの到着と同時に風車塔の南にある本拠点からばらばらと友軍の兵士がこちらに駆けてくるのが見える。

足の速いガリア軍の戦車さえ叩いてしまえば追いつかれる心配もなくなる。結局、本拠点目前まで喰い破られたものの、予めガリア戦車の破壊を想定して敷いた防御網はそれなりの戦果をあげたようだ。

マシター伍長がスコープからちらと目を外し、広場の東で黒煙を上げて動かなくなっているガリア軍戦車を見やった。

狙いを定めていた建物上階に向けて、装甲兵員輸送車の銃座が機関砲を浴びせ始めるのを認め、マシタ 伍長が動かない戦車がある方へとZM-SG狙撃銃を向けた。横目に背を向けて駆けるガリア兵が見えたからだ。

そのガリア兵は脚を引きずり、ピョンピョンと飛び跳ねるように駆けていた。その兵士の向かう先へ少し照準を動かすと、数人のガリア軍兵士が遮蔽物の陰に寄り固まっているのが見えた。

マシター伍長はその一団の中に“同業者”がいないかじっくりと観察した。もっぱらその一団は敵の本拠点へと射線を向けている。我々増援部隊に気がついていない兵士もいるが、もっぱら図体のでかい輸送車を見ているはずであるしその中に狙撃手は見当たらない。

マシター伍長はゆっくりと照準を先ほどの足を負傷した兵士に戻した。殺せる確率の高い標的から順に仕留めていくことにしたのだ。それは伍長の猟奇的な欲望を満たせる獲物である確率と言い換えら

れた。

まず動きを止めようと引きずっていない方の脚をスコープの中央に捉える。頭に比べれば狙い撃つのは容易い。一瞬息を止めてゆっくりと引き金を引く。

銃弾はガリア兵の左脚の大腿に当たり、前のめりになってどきりと倒れた。

マシター伍長の獲物が石畳の上で身をよじり、身体を反転させてこちらに向けて起き上がる。

動けなくなったガリア兵が腕を振り回し右手に握られている自動拳銃をこちらに撃ちまくっていた。無論、伍長のもとには飛んで来なかった。

その仕草が滑稽に見え、こみ上げた可笑しさからかマシターが口元緩めた。慢性的な空腹感と暑さからくる不快感と理不尽な任務へのやり場のない鬱屈した感情がさらに押し寄せてきた。

槓桿を引きスコープの中で自動拳銃を放つガリア兵の腕に狙いを移すと、先程よりもさらにゆっくりと引き金を引いた。

兵士の右腕に当たり、その手から拳銃が投げ出され石畳に落ちた。兵士が這いずって後ずさりを始めると、大腿から流れ出る血によって石畳に赤いレールが引かれた。

血の色に興奮を覚え、鼓動が速くなるのが分かった。狂気に支配されることへ恐怖感が刹那に過ぎたがマシター伍長は止めなかった。今度は傷ついた身体を引きずるべく地面についていた左腕に狙いを

移した。

同じようにゆっくりと快樂を貪るように引き金を引く。

ガリア兵の左肩に当たり血飛沫が飛んだ。仰け反った拍子に鉄兜が取れ、苦痛に歪む男の顔を見た。マシターは声を上げて笑っていた。だがその笑い声はすぐにかき消された。

隣に停車していた装甲兵員輸送車が突如爆発し、車輛の破片や車載銃座についていた兵士のばらばらになった身体が降り注いで、マシターは思わず肩をすくめて身を屈めた。

すぐに土囊から顔を上げると、広場東の通りからガリア軍の戦車クルザーが突き進んでくるのが見えた。その短い砲身から砲煙がゆるゆると尾を引いていた。黒煙を上げて横たわる同型の戦車の横をすり抜けこちらにまっすぐに向かってくる。

『ばかな！？何故、ガリア軍の戦車が！』

「退けー！ー！ー！ー！」

別の兵士の叫び声に促されるように慌てて立ち上がると一目散に陣地から出た。そのすぐ後で戦車砲が陣地を吹き飛ばし土囊の砂を巻き上げた。

マシターは動ける兵士数名と炎上する車輛をぐるりと迂回して、輸送車の爆煙に紛れて玄関部分が吹き飛んだ家に飛び込んだ。

不意に現れたガリア軍戦車はその突進を止めて、先程マシター伍長

が弄んでいた“獲物”を覆い隠すように停車した。

その様子を確認すると空になった弾倉マガジンを乱暴に引き抜いて炎上する輸送車目がけて投げつけた。

破壊された輸送車と同じく、連隊のマーキングを施した軍用トラックが目の前を行き過ぎるのを横目に見たが、そのトラックが青白い特有のラグナイト光を纏った爆炎を発して宙に浮いた。

マシター伍長は思わず仰け反って目を瞑る。

今度は風車塔の方角から大きな爆発が相次いだので、そちらに向けて瓦礫の遮蔽物から顔を覗かせた。

黒鉄色の中隊付き重戦車が風車塔に照り返る西陽と同じオレンジ色の炎とどす黒い煙を上げていた。

それら煙を破ってブルーのカラーリングを施した見慣れないガリア軍中戦車が現れた。それは伍長が過去に遭遇したはずのガリア軍戦車とも形が異っていた。

その戦車に追い立てられるように友軍の兵士たちが悲鳴をあげて逃げまどっている。戦車の後ろからブルーの戦闘服を纏った兵士たちがわらわらと現れて、いたずらをした子供に折檻をするように悠々とこちらに進み出てくる。広場の東側にいた一団も既に風車塔のもとまで迫っていた。

自軍の最後方に居たマシター伍長は押し寄せる敵部隊への恐怖よりも、苛立ちと怒りの方がより強くこみ上げていた。前進を止めないガリア軍兵士たちの誰もが怯える様子もなく、誰もが勇ましく戦っ

ていたからだ。

『なぜ恐怖に慄き身を震わせない？苦痛にのたうち回って泣き叫ばない？そうしないのなら、俺がその淵へと追いやってやるー』

新しい弾倉を叩きこんで荒々しく槓杆を引くと、こちらに向かってくる青い兵士たちへとライフルを向けた。

丸い視界が異形の戦車を捉えると、凶らずも砲塔のハッチが開き戦車長が姿を現した。引き金を引こうとした矢先、その戦車長がすぐさま車上から飛び降りて駆け出した。

その視線の先に長髪をたなびかせる女が駆けているのを捉えた。頭に赤いスカーフを巻いているのが見え、マスター伍長は怒りで乱された心を逆撫でされた気分だった。

標的を戦車長からふざけた“印”を身につけた女に変えることにした。

味方が混乱の只中にありながら彼らの援護をすることもなく、先ほど中断された愉しみを再開するかのよう駆ける女の足から順に料理することにした。

女の足に銃弾が食い込み鮮血をあげる。

被弾の衝撃で身体を地面に打ち付け、痛みにもだえながら美しい顔を紅潮させ苦痛に歪める。

ゆっくりと四肢に一発ずつ7.62mm弾を撃ちこみ身動きがとれなくなつたあとで、しなやかにくびれた腹部へ弾丸をねじ込むー

駆け寄った戦車長の男の腕の中で、口からゆるゆると血を吐きながらゆっくりと死んでいく。女の苦痛をその目にしっかりと焼き付けた後で怒りに震える男を、死んだ女のすぐ後へ追いやってやる――

引き金に触れる指にゆっくりと力を込めるマシター伍長の脳裏に快樂の幻像が去来する。

マシター伍長の顔は狂気に侵され引き攣っていたに違いなかった。

当然、自分自身の顔が今どんなものか分かる訳もなかったのだが、伍長は二度と自分の顔を見ることもなくなった。

たとえ見る事ができたとしても、その額には穴が開いてしまっていた。

マシター伍長の顔は左右の目が見開かれ、怪しく開かれた口元が頬に食い込むほどに釣り上がっていた。その表情のまま後ろにがつくりと倒れ、血と脳梁で内側が濡れた鉄兜が頭から離れた。

いびつに開かれた両目に薄紅色を帯びた空が映った。しかし、その目に美しい空の像が反射してはいるものの、もう何も見てはいなかった。

19・茜色の光射す親子風車の下で（前書き）

登場人物

（名前／階級／兵科）

>ガリア義勇軍第3中隊第7小队<

ザカ / 伍長 / 戦車長

登場兵器

（名称／主武装）

>ガリア義勇軍<

ガリア軍改良型戦車（シャムロック号） / 24口径75mm砲・

7.92mm戦車機銃

19・茜色の光射す親子風車の下で

立て続けに3度も撃たれながら、まだ生きていることに現実感リアリティがなかったが意識はまだはつきりとしていた。

一方で意識が確かなせいで銃弾に肉を削られた手足がひどく痛む。石畳に跳ね返りくぐもって聞こえる銃声すらも銃瘡に染み入るようだった。冷めた汗を体中にかいているせいか、急に悪寒がしてきた。

続けざまに銃弾を受け、もはや起き上がることもままならなかったが意識はまだあった。身体のおちこちが痛んだが、左太腿に受けた傷がもつとも深いだろうと感じていた。

自分の身体から流れ出る深紅の液を見て、まるで砂時計のようだと何とも場違いなことを思い、自分の命の砂が赤い跡になっているのを視界の端に見た。

ほどなくして背中から石畳を小刻みに揺らす振動が感じられ、今度は空気を切り裂くような砲声が轟いた。振動がより大きくなってきて、仰向けになっていて身体をさらに揺らしたが悪寒がひどくなつたせいなのかと錯覚した。

再び砲声があったのがほとんど自分のすぐ真横だったので、少しだけ首を起こしてそちらを見やる。鋼鉄の鎧をブルーのカラーリングで染めたよく見慣れた戦車の車体だった。

『…軍曹…!?!?』

石畳を揺らすその車体がエリック・ヴィルトウール少尉を狙い撃っていた射線から守るように、ぐるりと旋回して側面を盾にするような格好で停車した。

ヴィルトウールが見た車体横のマーキングは一角獣と7の番号の意匠だった。ユニコーン

戦車砲塔のハッチが開き、出てきた男の頭にダルクス模様の布が巻かれていたので、ヴィルトウール少尉は尚更混乱してしまった。

戦車の振動は尚も背中に伝わってくるが、揺れが大きく感じられたのは今度こそ悪寒がひどくなってきたせいだった。

「おい、隊長さん！！しっかりするんだ！！」

グリゲラと同じファウゼン訛りの声だったが、その男が傍らまでやってきてようやく自分のよく知る老兵でないことを確信した。

「衛生兵！こつちだ！！」

傍らに跪いている男が長い腕を振る。無意識に男が向いている方は逆に首を動かす。

夕陽がかなり傾いていて、太陽の光が風車塔の石肌を掠めて広場に射していた。いくつもの光の筋の隙間から陽の当たらない曲面の壁にもたれかかる兵士が見えた。

よく見知った背格好のその兵士は頭をがっくりと垂れたまま動かなかった。

光の筋が重なり合い、親子風車の間から西陽がまっすぐに射すようになる。ヴィルトゥールはその眩しさに思わず掌で遮り目を瞑る。

夏の気配を残した強い光線は横から照りつけてじりじりと頬を焼き、傷ついた男の意識をはつきりとさせるのを幾分か手伝った。

『軍曹！！軍曹！！！！！！』

ヴィルトゥールは力の限り叫んだつもりだったが、声になっているのかさえ自覚できなかった。腕をそちらに伸ばそうと目一杯力を込めていたが、ほとんど腕が上がっていなかったかもしれない。

ダルクス布を巻いた男が立ち退くのと入れ替わって、よく知る女性兵士の顔がふたつ視界に現れる。

「少尉、しっかりしてください！！」

「はやく傷を圧迫して！！」

自分の隊の部下であるユーリ・フリングスとフローラン・ピレスがこちらをのぞきこんでいた。すると石畳を蹴る小さな振動が複数近づいて来るのが感じられた。

リリアン・シェーファー、クロード・レイマンのふたりがフリングスの処置を手伝う。クラレンス・トロハウスキが対戦車槍ではなくマグス短機関銃を携えて駆けつけ、その後をマシユー・フェルメイレンが追い掛けてくる。ロワーヌ・バリーがガリアン小銃を横向きに放ちながらガリア戦車のそばに取りついた。

フリングスとピレスに抱き起こされて、石畳が視界から離れるとく

ぐもって聞こえていた戦場の音がようやくありのままに戻ってきた。朦朧としたまま視界が開けたせいか、目眩にも似た感覚が襲ってきて頭がゆらゆら揺れた。

「あんたたち第4小隊の支援に急行するようにウチの隊長から言われてきたんだ。街の外を迂回して来たんで遅くなっちまったが、とにかく間に合ってよかった。」

長身で屈強な体躯のダルクス人が膝立ちのまま正面にいた。足下で青く光るラグナエイドの光を受けて、面長な男の顔が浮かび上がって見えた。

「プティ上等兵の位置に到着した矢先に敵の増援が現れ、同時に前線に取り残されているふたりを確認したのですが敵の砲火が激しくて・・・ザカ伍長の援護がなかったらと思うと・・・」

ピレスが息を切らせながらもそこまで一気に言葉を継いだ。

「アシュリーは・・・？」

「無事です、少尉。もう少し遅れていたら出血多量で危険でしたが今はもう問題ありません。」

左脚の応急処置を終えたフリングスが応え、今度は右腕の銃創に取り掛かり始める。医療班用の強力なラグナエイドの効能か、痛みが和らいできて心地よささえ感じられた。

頭は相変わらずぼんやりとしたままだったが、呼吸も落ち着き声も何とか相手が聞き取れる程度には出せるようだった。

朦朧としていたヴィルトゥールがハッと息を呑んで身を固くした。

「軍曹は．．．!?!?」

「グリゲラ軍曹は．．．」

ピレスが言い淀んでいると突然横から馴染みのある顔が割って入ってきた。

「アリ．．．シア．．．!?!?」

「おじさん!!よかった．．．生きてて．．．」

激しく息を切らせてはいたが、馴染みのあるはつきりとした声が耳に届く。澄んだ瞳を潤ませてこちらを真っ直ぐにのぞき込んでいる。

「．．．お前も無事で何よりだ．．．」

不安げな表情が次第に晴れて、ヴィルトゥールがよく知る屈託のない笑顔に戻りかけた。少女がぐったりとしていた手を握っていたのだが、自分にはその感覚がほとんど感じられなかった。

「一緒にブルールを取り戻したよ!!」

ヴィルトゥールはゆっくりと頷いて応えたが、次第に意識がぼんやりとしはじめて目を開いているのも億劫に感じられるようになってきた。

体の痛みはほとんどなくなっていたので、その眠気にも似た意識の

潜行に委ねることにした。

「アリシア!!」

アリシアと呼ばれた少女の顔はもう見えなかったが、青年の通る声
が耳朶を打ったことだけを知覚し意識の底に潜っていった。

「大丈夫。麻酔作用のあるラグナエイドの一時的な副作用よ。」

古参兵が意識を失ったと思ったメルキオット軍曹が一気に表情を曇
らせたので、傍らにいた第4小隊付き衛生兵のフリングスが彼女に
優しく告げた。

安堵の表情に戻ったメルキオット軍曹が頷いて立ち上がる。振り返
ると不安と安心が入り混じった複雑な表情を浮かべた青年が目の前
にいた。

「マリーナ、仕留めたかい!？」

「片付いた。」

低い女の声に頷いて応えるとシユターク伍長が青年のあとに続いて
やってきた。

「そつちもつまくいったみたいだな。」

長身のザ力伍長が立ち上がって赤毛の伍長に声を掛ける。

「敵が退却を始めて空になった拠点を無事制圧。車輛はエーデルワイス号が潰したからそう遠くには逃げられないさ。イーディたちに市街地までの追撃は任せてきたよ。」

逃げ惑う帝国軍兵士を北側の街区に追いやっている味方の兵士を見送りながら、長身の女が弾倉^{マガジン}を引き抜く。

「まったく驚いたぜ。逃げ出した連中を追いかけたら、アリシアが突っ走っていくのが見えて．．．撃たれやしないかヒヤヒヤもんだつた。」

駆け足でやってきたポツテル軍曹が小脇に銃床^{ストック}を短く切り落とした騎兵銃^{カービン}を抱えていたが、その大きな体躯とたくましい腕にはいささか窮屈な姿に映る。

「アリシア、無事でよかった．．．」

複雑な表情を浮かべていた若い男が口を開いた。メルキオット軍曹が仲間ひとりひとりを見回し、最後に正面の士官に向き直ったが男の表情を一瞥してうつむいてしまった。

「ウエルキン、ごめんなさい。何も言わずに私の独断で決めてしまつて．．．」

「いや、それはいいんだ。君やみんなに不安な思いをさせていたのは事実なんだから。」

ウエルキン・ギウンター少尉は集まった隊員たちを見回しながら柔らかな口調で話していた。しかし、その声色とは裏腹に表情はまだ曇っていた。

「ただ、ラルゴの言うように自分から危険を冒すような真似はもうしないでくれ。もう誰にも死んでほしくないんだ。」

伏せていた顔を上げると青年の瞳に悲しげな光が灯るのを見つげ胸の奥が鋭く痛んだ。自分の軽率な行動で彼が乗り越えようとしていたはずの悲しみを蒸し返してしまったような気がした。

ギユンター少尉の目を背けてしまいそうになるのを必死に堪えるかのように唇を噛んだ。

「まったくその通りだ。お陰で肝をつぶした。」

カレル・ユーゴヴィツチ軍曹が同じブロンドのスージー・エヴァンズ上等兵とともに脇腹を負傷したボアズ・エシエンの肩を抱きながら歩み寄ってきた。

「だが彼女の決断が勝利を呼び込んだ。それだけは認めてやってほしい。」

ギユンター少尉よりも少しだけ小柄な曹長が、珍しくゆっくりと穏やかな口調で話すと泣きそうな顔のメルキオット軍曹にウィンクをし、振り返ったギユンター少尉に微笑んでみせる。

「おじさん．．．いえ、ヴィルトウル少尉が倒れるのが見えて、死んじゃうんじやないかと思って気がついたらもう飛び出してた．．．でも、ほんとうにごめんなさい．．．」

消え入りそうな声が震えて、赤いスカーフが呼応して小刻みに揺れる。

「“先生”の意識が戻ったらちゃんと自分で伝えるんだ。それできつく叱ってもらえ。だからここではお咎めなし。いいだろ？ギユンター少尉。」

向きあつふたりの間にユーゴヴィッチが進み出て、ふたりの肩にそれぞれ手を置いて交互に顔を覗き見る。

「ああ。君にも感謝するよ。」

ギユンター少尉の言葉を受けたユーゴヴィッチが、短く溜息を吐いて首を横に振る。朗らかだった顔が引き締まった顔に変わる。ラグナエイドの麻酔作用で眠っている上官に視線を落とした。

「礼ならヴィルトウル少尉と・・・」

ユーゴヴィッチがくるりと踵を返す。間から光が漏れる親子風車の方へと向き直ると曹長が姿勢を正して敬礼をした。

「グリゲラ軍曹に。」

皆が曹長に倣い親子風車の下で動かなくなった老兵に敬礼をする。

広場一帯を満たしていた銃声がもうだいぶ遠くに聞こえる。人間の命を奪っているかもしれないその小火器の音に比べれば、あまりに弱い風の音がダルクスの老兵を弔う兵士たちに届く。

緑の丘に囲まれたブルールにはるか昔から吹き続けている穏やかな風

昔からよく知るその風は小さな寝息を立てる古参の少尉の頬をそつ
と撫でた。男に戦いの終わりと故郷への帰還を静かに告げるかのよ
うに

20・戦いのあと

草の匂いに混じって幼い頃から知るほのかに甘い香りを感じ、ウエルキン・ギウンターは重いまぶたをそつと開く。

「起こしてしまいましたか？」

髪の毛と同じダークブルーの大きな瞳が眠りから醒めた青年の顔を見つめていた。ダルクス模様のケープを羽織るその少女は、もうだいぶ前からそこにいるようだった。

ギウンターはぽかんと口を開けたままその瞳を見つめ返した。

「兄さん、やっとブルールに帰ってきましたね。」

少女が後ろを振り返ると、そこには夕陽に照らされた小さな街が一望できた。辺りは一面緑の大地で、少女と自分は鋼鉄の乗り物の上にいるようだった。

「イサラ？・・・イサラなのか!？」

少女がもう一度こちらに向き直り首をかしげて愛くるしい笑顔を見せる。ただ、ギウンターがよく知る鳥のさえずりのような妹の控えめな笑い声は聞こえてはこない。

ギウンターは呆然と少女の笑顔を見つめる。

『一体いつから僕はここにいたんだ?どのくらい眠っていたんだろ
う。』

ブルールの街を奪還した第7小隊と第4小隊は、日が暮れるまでの時間で街区の掃討と郊外への偵察、街の出入り口への防御陣地構築、救護所と両小隊本部を兼ねた待機所の設営を各自分担して速やかに行った。

ギンターとユーゴヴィツチの迅速な指揮の甲斐もあり、日没を前にしてそれらの作業を完了することができた。

帝国軍の敗残兵が退却していった街の北側を重点的に警戒するため、第7小隊のエーデルワイス号とシャムロツク号がそれぞれ前哨戦に展開している。

街を見下ろせる小高い丘の上にあるやや大きい風車小屋の脇にエーデルワイス号が睨みをきかせ、その場所よりもやや東寄りの方角にある森林地帯の手前にシャムロツク号を配置した。

街の周囲に設けた陣地にも交代で歩哨に立つことになっているので、負傷兵を除いたほとんどの兵士は夜明けまでまともに眠れそうになかった。

ピレス伍長が中隊本部から受けた通信によると、ブルール近郊の国境を防御する正規軍部隊の出撃を待たずに、バーロツト大尉自ら隊を率いてこのブルールに向かっているらしかった。大尉の部隊が敵部隊と交戦することがなければ、明日午前中のうちにはブルールに到着する予定だという。

待機所で中隊本部との通信を任されているピレスが、すぐ隣の救護所のテントを潜ると端にあるベッドの傍らに赤いスカーフを巻いた兵士が腰掛けていた。

フリングスら衛生兵が忙しく動いている中でじつと座ったまま動かずにいるその兵士は、頭に巻かれた赤いスカーフともども一際目についた。

「あなた、少尉と昔からのお知り合いなのよね？」

赤いスカーフの兵士に近付いて声を掛ける。傍らのベッドではヴィルトウール少尉が眠っていた。

ピレスもまたヴィルトウールが広場の只中で銃弾に倒れる姿を目撃していた。続け様に銃弾を受けて地に伏した男の姿を思い出すと、今こうして穏やかに寝息を立てているのが奇跡のように思えた。

腰掛けていた兵士は振り返らずゆっくり頷いてピレスの問い掛けに応えた。

「おじさんはこの街の孤児院の先生で、私が好きだった女のご主人だった。そのひとが亡くなってからは子供たちの親代わりになって、ずっと私たちを守ってくれたの。」

ピレスがそつとその兵士の隣に腰をかける。

「でも、あなたは少尉のことを“おじさん”って呼ぶのね。父親みたいな存在なのに、なんか距離を感じる呼び方・・・まあ、“お父さん”って呼ぶのも変だけど。」

ピレスが隣に来てようやく兵士が目を向けて応じる。

「うん．．．確かにそうかもしれない。でもみんな“おじさん”って呼んでいたし。それにみんな両親を知らない孤児だから親ってどんなものかよく分からないのかもね。」

「あ、ごめんなさい．．．」

大きな瞳をゆっくり閉じて、その兵士が首を横に振って応える。

「実際、私もよく分からない。父親や母親がどういうものか。家族がどんなものか．．．」

ピレスは黙って兵士の横顔を見つめている。長い首から続く輪郭の整った顎のラインが美しいカーブになっている。視線は静かに眠る男に向けて落ちていた。

「それに、おじさんも少し距離を置いていたと思う。施設のみんなを平等に愛してあげようとして、そうしてたんじゃないかって思うことがある。おじさんはいつも何も言わずに、私やみんなのそばに寄り添ってくれていたから特別深く考えることもなかったのかも。それだけで十分だったから．．．」

ピレスが頷いて美しい横顔から視線を外す。笑みを浮かべてその視線をベッドに落とす。

「家族ってそういうものよ。」

赤いスカーフが揺れて大きな瞳がこちらに向いたのが分かった。

「何も言わずいつも互いに寄り添っていて深く考えることもないけど、かけがえのない大切な存在……」

赤褐色の大きな瞳に捉えられた横顔は、切れ長のつり目がきつい印象だが、透き通るような肌が美しい気品ある整った顔立ちだった。

「その“大切な存在”を亡くして自暴自棄になってた私を少尉が救ってくれたの。」

「家族を……亡くしたの？」

恐る恐るといった調子で投げられた問いに女は切れ長の目を瞑り小さく首を振る。

「家族になるはずだった男性……私の婚約者。」

「あ……」

女が今度はやや大きく首を振ってみせる。

「私は彼の死が理解できなかった。戦争で死ぬということがどんなものか想像できなくて、まったく受け入れられなかった……それで義勇軍に志願したの。戦争で人が死ぬってどういうことかこの目で確かめたくて。」

普段もきれいな発音で話すプレスがなめらかに言葉を継ぐ。隣に腰掛ける兵士は黙って聞いていた。

「初めて戦場に踏み入ったとき、ここは“地獄”だと思った。敵も

味方もたくさん人間が死んでいって、人の命なんて一瞬のうちに奪われるんだって分かったわ。きっと彼もこうやって命を落として、私も同じよう死んでいくんだらうって考えてた。」

長いまつげのある瞼が降りて切れ長の目が閉じられ、記憶をたどるようにゆったりとした口調になる。

「そうやって死を思ってた私を少尉が見抜いて叱ってくれた。今でも信じられないくらい怖い顔で．．命を懸けて戦うってことはそれだけ大切に想うものを守る覚悟がなければできない、戦って死んだ者の命と引き換えに守られた命があるって．．少尉にそう言われて、私もきつと死んだ彼の命に守られてこうして生きているんだって思えた。」

ピレスは目を瞑ったままそばで眠る男ことを思い出していた。

物静かな男が険しい顔をわななかせ、呪われたように死を思う自分やただ無謀な行動を続けていた若い曹長を烈火の如き勢いで叱る姿を。だが諭すようなその眼差しは優しさに溢れ、目の前の若いふたりを守り抜こうという覚悟を宿していた。

「よかった．．。」

「えっ!？」

隣から届いた声にピレスが目を見開いてそちらに顔を向ける。赤いスカーフの兵士が優しい眼差しで見つめていた。さきほどからずっとそうしているようだった。

「あなたやユーゴヴィッチ曹長が生きていてくれたお陰で、きっと

おじさんの命も救われたはずだから。」

思いもかけない言葉に一瞬固まってしまったが、彼女の屈託のない笑顔に気がつくのとピレスも思わず目を細めて微笑みを返していた。

「ピレス伍長。」

声のする方に振り返るとピレスの補佐と負傷者の介助を兼務するバリーがテントの入り口から顔だけを出してこちらを向いていた。

「ザカ伍長、チェルニー伍長から定時連絡です。北側の前哨戦は異常なしのことです。」

「わかったわ。」

ピレスがバリーの声に反応してすっと立ち上がると、つられるようにして腰を上げた。

「交代の時間ね。私も行かなくちゃ。」

「少尉が目覚めたら、連絡するわ。」

ピレスがすらりとした手を差し出したので右手でそっと握り返した。

「ありがとう。」

無線機のある待機所へ向かうピレスに礼を告げ、救護所のテントをくぐり抜けて外に出た。

昼間に比べるとだいぶ涼しくなった風が身体をそつと撫でてわずかな癒しを与えてくれる。くたびれた身体をほぐそうと、メルキオツトは星が瞬く夜空に向けて両腕をぐつと突き上げて伸びをした。月が高く上がっていてこちらに白い太陽の光を返している。

丘を進んできた道中は街が近づくにつれて懐かしさがこみ上げてきたが、街の中にいる今は火薬の残り香と埃臭さがまだ残っているせいで郷愁に浸る気分にはなれなかった。

ただ丘から吹きつける風だけはずっと幼い頃から変わらない匂いと心地よい感触をもたらしてくれた。

北側の丘を目指すべく歩き始めると戦車から降ろした装備や物資が集められた一角で、月に照らされてできた青い影が動いているのに気がついた。

おもむろにそちらへ近づくとその影がピタリと止まったがすぐにゆったりと揺れだした。

「交代か？」

特徴的なカラツとした声の主が月明かりの下に姿を現す。

短いブロンドの髪の男が携行糧食レーションのビスケットを頬張りながらウィングを送ってくる。陣頭指揮を取って動き回っていたせいか、明るい表情を見せてはいるが戦闘が終わった時よりもさらに疲れの色が滲んでいた。

「ユーゴヴィツチ曹長、ちゃんと休んでるの？包帯も交換してないみたいだけど・・・」

世話焼きな性格からメルキオットが小言をこぼす。男が水筒を豪快にありビスケットを一気に飲み下すと、いつもの皮肉っぽい笑みを浮かべていた。ブロンドの髪が月明かりを受けて鮮やかに白く輝いて見える。

「君が交換してくれるものと思って待っていたんだよ。」

「えっ!？」

素っ頓狂な声を上げるメルキオットにユーゴヴィッチが冗談だと言うように掌をひらひらと振った。唇を突き出してむくれる女に口元を緩めて詫びてみせるが、その態度は悪びれる風もなかった。

「なあ、少尉はまだ眠っているのか？」

「うん．．．重症だったから強いラグナエイドを使った副作用だった。それに眠ったほうが回復も早いだろうって。」

ぶつきらぼうにうんうんと頷きながらユーゴヴィッチが戦闘服にこぼれたビスケットの屑を払う。

「それじゃまだ休むわけにはいかないな。先任少尉がお目覚めになるまでは副官が小隊指揮の代行しないと。」

「そうだけど．．．せめて食事くらいはきちんと摂ること! さっき焼いたパンが待機所にあるから、隊が違うからって遠慮しないでたくさん食べてよね!」

メルキオットが男の足下に散ったビスケットの屑を指差し少し厳し

い口調で迫った。

「はいはい。ありがたく頂戴するよ。」

ユーゴヴィッチが掌を振って応える。メルキオットが大げさな溜息をついてみせ少し口元を緩めて応じると、へらへらと笑う男に背を向けて歩き出した。

「危ない危ない・・・」

メルキオットの背中を見送りながら携行糧食の箱の影に隠していた曳光弾の弾倉を掴むとベルトに吊るした腰のケースに収める。

同じく彼女から見えないように置いていた、先ほどまで解体して手入れをした自動拳銃を取り上げ、9mm弾倉を差し込んで遊底を引くと正常に作動することを確かめて同様に腰のホルスターに収める。

背囊から正規に支給された装備ではない消音器サイレンサーをガリアンの銃口に取り付け、同様に支給されたものではない自前の短剣タガを持ち上げ、刃こぼれがないかを月灯りに晒して確認する。

それらの支度をしている間に背後から近づく気配に気がついていたが、短剣を収めた所でようやくそれに応じることにした。

「お嬢さん、立ち聞きとは可愛い顔してる割りには品がないな。」

背を向けているユーゴヴィッチが突然声を上げたので、ブロンドの長髪を胸の上まで垂らした女は飛び上がるほど驚いた。

「そ、そんなつもりでは・・・」

ブロンドの短髪で頬の痩せこけた男が振り向く。男は暗がりでも分かる鋭い目付きだったが、背後にいたブロンドの女を見つめ返す眼差しはどこか優しげだった。

エヴァンスは男の眼差しからゆっくりと目を逸らすとユーゴヴィッチの身なりに視線を這わせた。

「変な詮索はするなよ。ただの立ち話だ。彼女をどうしたいわけじゃない。どっちかといえば俺はあの気が強い美人伍長の方が好みだ。」

ユーゴヴィッチは精一杯おどけてみせたが、隠密仕様に換装した小銃を手にしていたままだったので真意を隠すには説得力がないと自覚していた。

「遠くに行かれるつもりなのではないですか？」

案の定、エヴァンスが完全装備の男を前に、その姿になった真意を鋭く指摘してきたのでニヤつかせていた表情が固まった。

「散歩だよ、散歩。こう見えて俺は都会育ちでこういう自然溢れる土地に昔から憧れてて・・・」

エヴァンスが尚もじっと見つめていたのでユーゴヴィッチは早々に白を切るのをやめた。同時に目の前の女もまた、歩哨に立つ様相ではなく背囊まで背負っているのに気がついて逆にその意を見抜いた。

「追いてこようなんて思うなよ。」

曹長は立ち尽くすエヴァンスの出で立ちを見るなり少し早口でささやいた。

ユーゴヴィッチがギンターとともに決めた割り振りでは、彼女は救護所で衛生兵をサポートする役目だったが眼前の彼女は歩兵の装備を身に付け小銃を携えている。

エヴァンスは男がこれから何をしようとしているのか少し前から感付いていた。ギンター少尉との取り決めには無かったが、この男ならギンターや他の隊員にも明かさずたっただひとりでもやるだろうと。

強行偵察と残党の追撃

敵は退却したとはいえそう遠くには逃れていない。まだブルールの近くに潜んでいる可能性の方が高い。彼ら残党が襲ってくることは考えられないが、付近にいるかもしれない別のもう少し規模の整った部隊に連絡を取ったら厄介なことになりかねない。

ユーゴヴィッチは増援に現れた敵部隊と同じような車輛部隊が近郊にまだ残っている可能性を主張していた。

明朝までの作戦方針を巡るギンターとユーゴヴィッチの会話を注意深く聞き、言葉を拾って必死で考え男の思考を推測した末の彼女の答えが今の自分の姿だった。自分でもどうしてそこまでして今男の前にやってきたのか、その理由がはつきりとは説明出来なかった。

ただ、気がつくると男の姿を目で追いその言葉に耳を傾け、その考えに思いを巡らせている自分に気がついた。胸を一杯に埋めた想いに

抗うことを止めてそれにただ従った結果、気がつくところまで来ていた。

「い、いけませんか・・・」

こちらを見つめる瞳は潤んでいて戸惑いが隠せないようだったが、それは戦闘で怯えているときのものとは違って見えた。何か固い意思を宿しているような瞳だった。

ユーゴヴィッチはふと腕を撃たれた時のことを思い出した。

それまで怯えきっていた時とはまるで別人のように彼女が身を挺し、一瞬冷静さを失った自分を必死で止めたときと同じ目をしている

ユーゴヴィッチが胸に浮かんだ思いを振り払うように溜息をついて首を横に振る。彼女の意は汲んでも連れて行くわけにはいかない

「前も言つたる？お俺は“特別授業”を受けたことがあるって。こ
ういつのに慣れてるんだ。あんたやメルキオット軍曹、おたくの隊
長にも真似できやしない。」

「でも・・・」

食い下がろうとする女を制するように言葉を浴びせる。低くささやくようだったが、口調は少し威圧感を孕んでいた。

「いいか？この人数であの丘陵地帯に網を張るなんてハナから無理な話だ。俺たちがこの街に侵攻してきたように、敵が夜陰にまぎれて忍び寄ってくるかもしれない。ギンター少尉が言うようにこちらも消耗してるから偵察は出さないってことにはなつたが、万が一

を考えて確認しておく必要はある。ちょっと足を伸ばして見てくるだけだ。」

エヴァンスはぐっと口元を引き結んで黙って聞いていた。その目に宿した意思を変える素振りにはまったくたくない。まっすぐ自分に注ぐ瞳から戸惑いが消えて、じっとこちらを見据えていたが男はそれをやや厳しい目つきで見つめ返すと構わずに続けた。

「俺は仲間のために戦う。隊の部下や隊長、今回ならあんたら第7小隊もその仲間の内に入る。俺は俺にしかできない方法で仲間を守る。あんたの助けはいらぬし、解ってもらわなくても構わない。俺は行くよ。」

月の光に照らされた白い顔がみるみる赤く染まっていく。エヴァンスが見たこともない形相に変わるのをユーゴヴィッチは見逃さなかった。

「そんなの勝手です!!」

ブロンドの女が穏やかな物腰からは想像できない剣幕で迫ってきてユーゴヴィッチが少したじろぐ。

「あなたはとても頼りになるけどいつも危なっかしくて、このまま行かせてしまったらもう帰ってこない気がするんです。．．誰にも何も言わないまま姿を消していなくなるなんて、仲間を思う人のすることじゃありません!!」

ユーゴヴィッチがしばらく詰め寄る女の険しい顔を見つめていたが、やがて大きく肩で深呼吸をして表情を柔らかく崩した。

「仲間を信じてないわけじゃない・・・ただ、慣れてないんだよ、そういうの。」

「えっ!?!」

ユーゴヴィッチが口ごもりながら呟いたのでエヴァンスはよく聞き取れなかった。すると思いついたように男が顔を覗き込んできた。

「包帯はあるか？」

ユーゴヴィッチはエヴァンスが声を上げたことなど気に留める様子もなく、突然ケロつとした声で脈絡の無いことを訊いてきたので、語気荒く男に詰め寄った自分自身に対して気恥ずかしさがこみ上げてきた。

「は、はい・・・」

エヴァンスが背囊から真新しい包帯を取り出してユーゴヴィッチに手渡す。包帯を受け取るとユーゴヴィッチが潤んだブルーグレーの瞳のすぐ前に持ちあげてみせる。

「あなたの気持ちだけはもらっておく。だから俺ひとりで行かせてくれ。大丈夫、必ず帰ってくるよ。」

ユーゴヴィッチの低く穏やかなささやきにエヴァンスがはっと息を呑んで男の手から包帯をひたたくってしまった。

「私が交換します!あなたひとりではできないでしょう!?!」

彼女の咄嗟の動きにユーゴヴィッチが呆気に取られてしまう。

「．．．それとも、本当にアリシアじゃなきゃいけませんか？」

青白い月灯りを受けても尚その白い頬を紅潮させているのが分かり、ユーゴヴィッチが思わず笑みをこぼして女に応えた。

「聞いてたんだろ？さっきのは冗談だよ、心配するな。」

エヴァンスは笑い声を上げる男の顔をちらと見上げたが、目が合うと咄嗟に視線を逸らして押し黙ってしまった。積み上がった物資の上にユーゴヴィッチがどかんと腰を落とすとエヴァンスがその隣にそっと収まる。

「夜明けには戻る。その時はまたあなたに替えてもらうよ。」

ユーゴヴィッチは視線を落としたままだったが、エヴァンスがその細い横顔を見つめ小さく頷いているのが視界の端に映った。

エヴァンスがユーゴヴィッチの腕を取ると数時間前に自分で巻いた包帯を解き、止血帯を取り替えて新しい包帯をもう一度巻き直す。

ユーゴヴィッチはエヴァンスの手が腕に触れ、柔らかくしかし少し冷たいその感触とともに微かに傷が痛むのを感じながら、地面で揺れているふたつの青い影に視線を落とした。

20・戦いのあと（後書き）

今回も長くなった・・・もうラスト・エピソード手前です。
会話書くのが苦手。なんか戦闘シーン書いてる方が全然楽だ・・・
締めはやはりあのシーンにしよう・・・

21・ブルールの丘から

昼も夜も絶えることなく吹いている風が草を揺らし、丘の上に建つ風車をゆっくりと回しているはずだが、その音がどれもこれも今ではまったく聞こえてこなかった。

眼前に広がる景色もどこか朧げだったが、目の前の少女の姿ははっきりと見えていた。

血の繋がらない、しかしかけがえのないたったひとりの妹。

「イサラ… ippたいこれは…」

「兄さん、この丘を憶えていますか？」

うろたえる兄をよそに少女は笑みをたたえて語りかける。

「あの日…ブルールを去った日、私と兄さんとアリシアさんと一緒に街を見下ろしていた丘です。」

妹の言葉に促されるように兄はあたりをゆっくりと見回す。すぐそばに風車小屋が立ち緑の草が繁る丘で街が一望できる。夕陽に染まる茜色の街はあの日、ブルールから逃れた日と同じように静かに赤く佇んでいた。

「必ずみんなでブルールに戻ってくると誓った場所です。」

妹の言葉だけが頭の中ではっきりと聞こえる。語りかける妹の姿もはっきりと見えている。手を伸ばせば妹の身体に届きそうな気がし

た。

「イサラ…でもお前は…」

身体が動かない。そればかりか自分の声も聞こえてはこない。微笑みかけている妹の姿とブルールの街が目映っているだけのようだった。

「ほら…」

妹がふと鋼鉄の乗り物のすぐ脇の野を指差すと、そこには白い小さな花が揺れていた。

「アリシアさんが蒔いたコナユキソウの種が芽吹いて花を咲かせたんですよ。」

「アリシア…」

アリシアー

ブルールに帰郷した日、妹を迎えに行ったあの日に会った少女の名前ー

その名が頭の中で繰り返される。

「兄さん…」

小さな白い花から再び視線を戻すと、それまではつきりとそこにいた妹の姿がぼんやりと薄らいでいた。夕陽に暮れていた景色も日が落ちて空には星が瞬いている。

やがて身体感覚が戻るのを感じ兄は咄嗟に腕を伸ばした。今ではもう白い影になりかかっている妹の身体を抱き寄せようとしたのだ。

「ウエル…キン…」

聞き覚えのあるよく通る声が耳を打った。しかし、それは幼い頃からよく知る妹のものとは違っていた。

「イ…サラ…イサラ!？」

*

下半身の鈍痛がじんわりと感じられ、少し身を傾けて静かに呻いた。光が瞼を貫いて外気に触れていない眼球に届く。

呻いた拍子に飲み込んだ空気をゆっくりと漏らして、その口元を開く調子に合わせて瞼を開いた。

電灯の光が真っ直ぐ目に降りてきて、眩しさにもう一度呻く。

「少尉!？ ヴイルトウール少尉!！」

隣から少年の声がして、そちらへ首を動かして顔を向けた。

「フリングス伍長、隊長が目を覚ましました！」

そばかす顔のテイラー・エリクセンが隣の簡易ベッドに腰掛けていて、後ろを振り向きながら声を上げている。あどけなさの残るその

少年兵は右足の足首を添え木もろとも包帯でぐるぐるに巻かれていた。

「少尉、気分はいかがですか？」

フリングスがこちらを見下ろしながら優しい声を掛けて傍らまでやってきた。

「良くはないな・・・」

その小隊付き衛生兵に瞼を閉じて自分への処置と負傷者への救護に対する感謝を表した。

「起こしてくれないか？」

「まだ、横になられていた方が・・・」

そのままにいるように促す衛生兵にもう一度瞬きをして断りの意思を伝える。

「眠り過ぎたせいか背中が痛いんだ。」

フリングスが頷いて頭の後ろに手を差し入れてくれる。隣に腰掛けていたエリクセンが彼女を手伝いヴィルトウールの身を起こす。

「少尉！」

救護所の様子に気がついたピレスがテントを潜りこちらにやって来る。いつもは凜とした彼女の顔にも疲れが色濃く浮かんでいて、ヴィルトウールは少し面食らってしまった。

「？」気分は？」

ピレスの問い掛けに精一杯笑みを作って応える。救護所には簡易ベッドが並び、いずれも第4小隊、第7小隊の傷ついた兵士で埋まっている。先ほどまでの自分と同じように眠っている者、痛みに悶え呻いている者、ただベッドに腰掛けているか、ぼんやりと天井を見つめている者。

「状況は？」

ピレスの顔を見て思わずいつもの癖なのか普段通りの台詞で訊いていた。ピレスは少し驚いたような表情を見せたがすぐさま普段の口調で返してきた。

「はい、ギンター少尉、ユーゴヴィツチ曹長の指示のもと敵残党を掃討、数名は街の北に退却していきました。現在、北側郊外に第7小隊が警戒線を敷いて展開中です。現在まで敵影、交戦ともありません。同じく街の周囲に陣地を構築、残った者で警戒に当たっています。私とフリングス伍長らでこちらに救護所と待機所を設営、負傷者を収容しました。また中隊本部から通信を受け、バーロット中隊長が正規軍防衛部隊に先行してこちらに向かっているとのことです。到着は明日の1100頃かと。」

「そっか…」

ピレスの報告に頷き、おもむろに溜息が漏れた。まだ呼吸すらも億劫に感じられたせいだった。

「では、各員に連絡を…」

「いや、結構だ。彼らに任せる。」

自分と彼女のやり取りを見聞きしていたあたりの負傷者がこちらに視線を投げている。ヴィルトウールが気付いてそれらを見回して、傍らのフリングスとピレスに交互に視線を戻した。

「負傷者はこれで全部か？」

「ここに居るのは重症の者だけです。軽症のものは待機所に。警戒に当たる兵のなかにも傷を負っている者がいます。全部で十数名にはなるかと。」

「戦死者の数は？」

ふたりの女性兵士が少し表情を固くしたが、ヴィルトウールは気だるさに気圧されて彼女たちの態度に倣うことが出来なかった。

「両小隊合わせて7名です。別の場所に安置しました。」

ピレスが努めて淀みなく応えていたが、切れ長の目が厳しさを湛えているのが分かる。それが悲しみに抗う彼女の意思なのだと思った。彼女が一度肩で呼吸を整えてもう一度ヴィルトウールに向き直る。

「ブームスン伍長、あと・・・グリゲラ軍曹もそちらに……」

ヴィルトウールは伍長の言葉を受けてこっくりと頷いた。力なく投げ出されている自分の手に視線を落とした。

隊員の死をこれまで何度も経験してきたが、ヴィルトウールはまっ

たく慣れることができなかった。何人の兵が自分の下で命を落とす
ていったのか―

その数を思い出すよりも彼ら散っていった兵士の顔がありありと胸
に浮かんでくる。ヴィルトウールは胸に浮かぶ彼らの顔を思い我慢
できずに口を開いた。

「ビセンテ、ブームスン…グリゲラ…」

男がぼつりぼつりと亡き兵士の名を呟く。再び救護所にいる者たち
の視線がベッドの上の少尉のもとに集まっていた。

「マツカーシー…ギャリソン…レノン…フェリックス…」

「少尉？」

フリングスが小さな声で呼びかけたがヴィルトウールは構わず続け
る。

「バルテズ…ペイントシル…ヘッセリンク…ガゴ…フランチェスカ
…」

まるで呪文を唱えるかのように少尉が呟いているのをテントの中の
皆が見つめていた。皆が動きを止めて息を飲み静まり返っている。
少尉とともに戦い続けてきたピレスは、少尉が呟く名前の持ち主た
ちの顔がその胸の内に次々に浮かんでいるのを感じていた。

彼らは皆、第4小隊とともに戦った仲間たちだった。そして彼らは
皆二度と戻って来ることのない者たちだ。第7小隊の中にも彼ら亡
き兵士と知り合いだった者がいるはずだった。

少尉がやがて自分に集まる視線に気が付いて顔を上げる。ぐるりと皆の顔に順番に視線を送りはじめる。

「エシエン…ゼンデン…バリー…プティ…エリクセン…フリングス…ピレス…」

視線を送るひとりひとりの名を同じように呟いた。ゆっくりと彼らの名を確かめるようにして男が続ける。

「無駄には出来ない。誰ひとりとして命を無駄にはできない…」

ヴィルトウールは自分に言い聞かせるように言葉を繰り返していた。脚に続き両腕からも鈍い痛みが蘇ってきたが、顔には出さずに言葉を噛み締めるように口元を引き結ぶ。

「みんな…」

40過ぎの男の顔がテントの中の若い兵士たちの顔をぐるりと見回す。誰も彼もがこの傷ついた古参兵の言葉を自身の胸で同じように唱えていた。

厳かな顔つきで天を仰ぐ兵士もいる。死んだ仲間を悼み目を伏せている者もいる。まっすぐこちらを見つめているピレスの顔にも凜々しさが戻っていた。

テントの中にいるヴィルトウールの生徒たちは皆それぞれに帰らぬ仲間のことを思っていた。

「ほんとうにご苦労だった…」

低く通る男の音がテントに響く。静まり返っていたので外の風の音と羽虫の鳴き声が微かに届いた。

静寂を破るようにピレスが敬礼をしてくるりと背を向けた。

「夜が明けたら交代で兵を休ませてくれ。大尉が隊を率いて向かっているとなると、この隊も恐らくアマトリアンには帰らずナジアルへ向けてそのまま転戦することになるだろう。休息が取れる時に十分休んだ方がいい。あとで各員に伝えてくれ。」

「はっ！」

ピレスがもう一度礼をして、今度こそテントを潜り待機所に戻る。彼女の背中を見送ってから、傍らのフリングスを見上げる。

「外に出たいんだが…構わないか？」

「あまり動かせない方が…」

「故郷の空気を吸いたくてね…」

困り顔のフリングスに精一杯媚びた笑みを作ってみせたが、眠りから醒めたばかりでうまく顔の筋肉が動かさずうまく表情が作れなかった。フリングスが少し逡巡したあと、エリクセンのベッドに立て掛けてあった松葉杖を掴みヴィルトゥールに持たせた。

「わがまま言つてすまないな。」

フリングスが少尉の身体を支え立たせるべく両腕に力を込めた。ぐ

つと歯を食いしばっている彼女の顔に涙が一筋こぼれるのが見えたが、あえて知らないふりをして彼女の介助に従った。

フリングスの肩を貸してもらい松葉杖をついてテントを出る。脚の鈍痛がはつきりとした痛みが変わったが、軽症の右足を懸命に出して歩いた。

テントを潜り見上げると一面に星が瞬いていて空の高くなっているところにぼっかり月が浮かんでいる。街を抜ける風が傷ついた身体を撫でていき、涼しげな感触が心地よかった。

「あんなことを言って申し訳ない。彼らを看取ってきた君が一番辛いだろうに。思い出させてしまっただろう？」

フリングスが頭を振る。涙のあとが月灯りに反射していた。

「彼らに守られたから私は今こうして生きています。だから、私は彼らの犠牲に見合う人間なのかなって思っ…それだけの価値があるのかなって…私にそんな価値が…」

白く光る筋に沿って涙が伝う。ヴィルトウールは彼女の泣き顔を一瞥し、顔を前へ向け直して遠くを見つめた。

「それだけに見合う人間にこれからなるんだよ。生き残った私たちはこの先もずっとこのガリアで生きていく。精一杯生きてこの命を燃やす。そうやって彼らに命を返していけばいい。生き続けることで価値にしていくんだ。」

男の言葉に隣の若い衛生兵が嗚咽をあげながらも、はいとはっきり応えた。ヴィルトウールはただ遠くを見つめたままだ。

かつてこのブルールの街で教師だった男、エリック・ヴィルトウー
ルは故郷の街から夕闇に沈む地平の彼方を見つめていた。こちらを
見下ろす丘の上に月灯りを僅かに返す風車が見える。

街に吹くのと同じ風を受けて回るその風車はその回転を止めること
はなかった。

*

街から続く細い街道を丘の斜面に沿って上り、ようやく風車が立つ
丘までやってきた。

その風車の隣にかつてこのブルールを去る折に逃れる住民を帝国軍
の手から守った蒼き戦車が佇んでいた。

街にいるときよりも風が強く感じられ、ふたつに纏められた長い髪
の間を風がそよぐ。

このブルールの街で育ったアリシア・メルキオットはエーデルワイ
ス号の近くまでやって来て、かつてこの戦車を駆って祖国を守った
軍人の息子、ウェルキン・ギウンターが車上で仰向けになっている
のを認めた。

青い軍服を纏ったその青年はどうやら眠っているらしかった。

「アリシア。」

風車のそばにいたオスカー・ベイラートが人差し指を立てて自分の

名を呼んだ。隣には双子の弟、エミール・ベイラートが兄と同じG SRスナイパーライフルを携えてこちらに歩み寄ってきた。

「起こさないでやってくれよ。隊長、ずっと気を張っていたんだろ
うからさ。」

短髪の兄が掌で口元を覆い小声で話しかけてくる。メルキオットは
頷いて笑顔で応えた。

「うん、わかった。パン、焼いたから待機所に戻ったら食べて。」

「おう、ありがとう!」

「兄さん、静かに…」

兄のオスカーが弾けるような笑顔で声をあげたのを、弟が怪訝そう
な表情で諫める。メルキオットは小さな笑い声をあげて斜面を下る
双子の兄弟を見送った。

「そっか…ウエルキンずっと眠っていないみたいだったからな…」

くるりと車上の青年士官に向き直る。すると、ざわざわと風が草を
揺らす音に混じって男の声が聞こえてくる。

「ウエルキン?」

戦車の履帯に足を掛け、車上に首を伸ばす。ギョんターは相変わら
ず眠ってはいるようだが寝顔を少し歪め、うわ言を呟いている。ひ
どくうなされているようだった。

「ちょっと、ウエルキン？大丈夫！？」

勢い良く車上に飛び乗るとギユンターの側まで這っていった。

「イ…サラ…」

「え？」

「イサラー！！」

ギユンターがかつと目を見開いたかと思うともものすごい勢いで身を起こし、彼の顔を覗き込んでいたメルキオットの肩を両手でぎゅぐゅ掴んだ。

突然目覚めた男に驚いたメルキオットも、いつの間にかそばにいた女に驚いたギユンターも、互いに声が出ずに黙ったまま動けなかった。

「わあ！アリシア！！」

「ウエ、ウエルキン、どうしたの！？」

ギユンターが女の細い肩から手を離し、メルキオットが後ろに仰け反った。ふたりとも目をぱちくりさせて見つめ合う。

「あ、あの…」

メルキオットが這うようにもう一度ギユンターのもとに近づいていく。ギユンターがその姿をぼつと見つめていたが、はっと息を呑んで思い立ったように開いていた砲塔のハッチの中を覗き込んだ。

暗い車内の奥の操縦席にひとりの兵士が収まっている。

「ああ……」

その兵士の後ろ姿はギョンターが微かに期待を抱いていた人物のものとはまるで違っていた。小柄とはいえ男性であるクライス・チエルニーのその肩幅は、かつてその席に収まっていた少女に比べれば遙かに幅広でがっしりとしている。

今回の作戦が初陣になった戦車操縦士のクライスはやや大きな寝息を立てていた。彼はこの前哨戦の通信手を兼ねてはいたが、ギョンター自身も無線機を身につけていたので新兵の眠りを覚まさせるのは止めた。

「ごめん、ごめん……いつの間にか眠ってしまった……街を取り戻して少し気が緩んだのかな。」

ハッチから顔を戻して、車上の副官に向けて笑顔で詫げる。

「クライスがどうかしたの？」

「ああ、眠ってるよ。始めての作戦ですごく緊張してたみたいだったし……無線は僕でも拾えるから、寝かせておいてやろう。」

ギョンターがメルキオットのそばまで這っていくと、音を立てないようにそっと戦車側面に座りなおした。メルキオットがそれに倣って隣に座る。闇に沈むブルールの街の中心に月灯りを受けて仄白く光る親子風車の先端が見えた。

「ウエルキンは平気なの？」

「何が？」

「うなされてたみたいだったけど…」

メルキオットの問いを受け、先ほどまで見ていた光景を思い出した。妹の姿と夕陽に染められた故郷の街―

ためらいが胸に湧いてきたが、こちらを覗き込む瞳を受け止めて隠すのをやめようと思った。

「夢を見ていたんだ…イサラが目の前に現れてね。一瞬、これは現実なんじゃないかと思えるほどはつきりとした夢だったんだ。」

「そう…」

隣に座る女が悲しげな眼差しを地面に落とす。思いついたように向き直るとその悲しさを宿した瞳のまま口を開いた。

「あの…広場でのこと、本当にごめんなさい。もう一度ちゃんと謝らなきゃって思ってたんだ。」

ギユンターが顔を上げる。首を横に振るその青年の顔は穏やかな笑みを湛えていた。

「いいんだよ。うまくいったんだから。」

「いいえ。ちゃんと話しておかないといけないと思うから聞いて欲

しいの。」

ギウンターは穏やかなままだが笑みを消した表情で隣りに座る女を見つめた。

「今回の作戦が始まるまでのあなたを見ていても辛かった。あなたは誰よりもイサラの死を悲しんでいいはずなのに、隊のみんなの前では気丈に振舞っていて。私、ずっとウエルキンの隣にいたのにどうすればいいのか分からなくて…どうにかして力を貸してあげたいって思ってたのに、戦闘の最中で何も告げずに自分で決めてあんな無茶なやり方をしてしまったんだから…きつと、副官失格だよね。」

メルキオットが再び広場で立ち尽くした時のような表情に歪んでいく。ギウンターがそと隣の小さな肩に手を添えて応えた。

「みんなの気持ちは伝わっていたよ。アリシアが辛い気持ちでいるのも分かってたんだ。」

大きな瞳を潤ませながら隣に座る男の顔を見上げる。ギウンターはゆっくりと瞬きをして、泣きそうな女を慰めるように微笑みかけた。

「作戦に成功して街を取り戻すことが、みんなや君の気持ちに応えることだって言い聞かせていたんだ。勝利することがみんなやイサラの気持ちに報いることだって…僕自身がイサラの兄であることよりも、第7小隊の隊長であることを優先させていたんだ。みんなや君に謝らなくちゃいけないのは僕の方だ。それにイサラにも…」

「ウエルキン…」

メルキオットの顔がまた少しだけ歪んだ。ギウンターがふと目を瞑った。

「でも、夢のなかでイサラに許された気がしたんだ。あの子は夢でずっと笑ってくれていたから…」

メルキオットが目を瞑る男に気付かれないように目尻を拭う。こぼれ落ちた涙をやや強く吹きつけた風がさらっていった。

「そっか・・・ありがとう、ウエルキン。」

ギウンターが正面に向き直り、後ろ手を突いて星空を見上げるようにした。メルキオットもまたそれに倣って故郷の空を埋める星を見上げる。

星空を仰ぐその目にはまだ少し悲しみを引きずっていた。

「次の戦いでガリア戦線の行く末が決まるかもしれないよね。」
風が草を揺らし風車を回している。赤いスカーフを頭に巻いた女のか細い声が星空に溶けていく。

「ああ、ナジアル平原にはガリアと帝国の主力部隊が集結しつつある。これまでは比べものにならないほどの大規模な戦闘になると思う。」

「また大切なものが壊されて、たくさんの命が失われるのかな・・・」

風にかき消されそうな声だったが、ギウンターはしっかりと聞き取

っていた。眼差しを夜空に注いだまま少し力を込めて声を風に載せた。

「失ったものは元には戻らない。自然だって常に変化し続けている。ブルールも、イサラも…元には戻らないんだ。」

「ウエルキン…」

メルキオットが声を詰まらせたのが分かった。ギウンターはポンと身体を前に投げて膝に腕を置いて身を乗り出した。弾むようなその動きは力を込めた声を出すべく姿勢を正すためだった。

「でも君が教えてくれた様に新しいものを育むことはできる！このナジアル会戦に勝利すれば帝国軍を北東部の国境まで追い詰めることができるだろう。そうすればこの戦争だって終わりに近づくさ！」

革手袋に包まれた厚い手が男の胸の前で踊る。朗らかな表情を見せ隣に腰を据える副官を鼓舞するかのように少し大げさな動きで手を振った。

「戦争が終わったら忙しくなるぞ。風車塔を建て直して新しいブルールを作らなくちゃいけないからね。」

虫や植物について無邪気に語るメルキオットが良く知る青年の声だった。胸を詰まらせていた感情が潮を引くように消えていくのを感じた。強張った肩の力が抜けて、腹からふつつつと熱いものが湧いてくるような気分になる。

「私も手伝う。」

意思のこもった通る声が隣から返ってきた。ギウンターがもうすっかり笑顔の戻った女に無言で頷いてみせる。

「なんだか不思議：ウエルキンと話しているといつも元気が出てくるんだよね。」

見つめ返す赤褐色の瞳がその言葉の通りに奥に熱い意思を宿しているのが分かる。ギウンターが負けじと力を込めて眼差しを返す。

「僕も…君と一緒に戦える。」

力強い眼差しをメルキオットは目を逸らさずにまっすぐ受け止めた。

「うん．．．私、ウエルキンに出会えて本当によかった。」

風が青年の頬を撫でて、少女の長い髪が吹き抜ける方向へたなびいて揺れる。

ギウンターが踏み切って草地に飛び降りる。エーデルワイス号の脇に咲いているコナユキソウを踏まないように見極めて着地する。

夢のなかで妹が指差したコナユキソウ

「ねえ、ウエルキン。」

「ん？」

背後で自分と同じように草地に足を着いた気配がした。振り返ろうとした刹那、風が丘の峰に吹き抜けて少し背中を押されたように感じた。

「この戦いが終わったら…」

メルキオットの大きな瞳がじつとこちらを捉えていて、彼女が草を踏みながらこちらに歩み寄る。その目をしっかと受け止めたのち、彼女が白い小さなその花を踏まないかちらと視線を落とした。

「あなたに伝えたい事があるの。」

小さな白い花を捉えていた視界を赤いスカーフが遮った。小麦の芳しい匂いが鼻を撫で、胸の鼓動が目の前の女の小さな掌と額に当たって跳ね返ってきた。

ギョんターが自分の身体を抱きとめたのが分かる。ふわりとしたその感触は、まるで風が身体をさらうときのようだった。

メルキオットは静かに目を瞑る。丘を抜ける風が肩を撫でた後、同じくらいやわらかな手の感触と温もりが伝わってくる。

『アリシアさんが蒔いたコナユキソウの種が芽吹いて花を咲かせたんですよ。』

動かずにいるふたりの足元でコナユキソウの花弁が小さく揺れている。

その小さな花は月の光を返して白く輝いていた。

空に浮かぶそれと同じように、青く暗い野で瞬く星のようにその輝きを夜空に返していた。

エピソード

暦の上では9月も中頃になっていたが、照りつける陽射しはまだ夏の名残が色濃く、強い陽光が青い芝生に反射しても尚、眩しく感じるほどだった。

幾多の戦場を生き抜いた男は照りつける強い陽射しを受けて、数ある戦いの記憶の引き出しからひとつだけを取り出してその胸に思い起こしていた。

今日と同じ9月のある日、辺境の街を奪還したあの戦いの記憶

『ブルールはもう少し涼しかったっけ…』

当時纏っていた義勇軍のガリアンブルーの戦闘服とは異なる、黒色の戦闘服の上に防弾用の強化防具プロテクトギアを身に付けていたので、その暑さと汗の量からくる不快さは比ではなかった。

かの戦場で負った傷がかすかに残る左腕には、古代ヴァルキュリアの槍と盾の意匠からなる第101ガリア王立特務教導隊アクレッサのワッペンがある。

24歳のカレル・ユーゴヴィツチ中尉は第二次ヨーロッパ大戦ガリア戦役終結後、在籍していたランドグリーズの大学には復学せず義勇軍解散に合わせてガリア正規軍に入隊した。

戦前から構想された特殊部隊が、戦時中のある事件をきっかけとしてガリア公国の元首であるコーデリア・ギ・ランドグリーズ大公直轄の警護部隊ガーディアンとして形を変えて創設されるに至り、入隊資格を有し

ていたユーゴヴィッチはその部隊員に選抜された。

ユーゴヴィッチ自身、既に義勇軍時の実戦経験について高い評価を受けていたことに加えて、入隊時の選抜試験を兼ねる特殊戦闘技能教練課程を大学在籍時に1期生として履修済みだったこと、その成績が優秀であったことが上層部の目に留まったのだった。

ユーゴヴィッチは1年間の警護部隊在籍の後、現在の教導隊へ兼任で籍を置くこととなった。

大公直轄部隊への評価が高まっていることを受け、ガリア陸海軍隷下の特殊部隊創設の計画が正式に軍上層部で承認され、両軍の部隊員候補生の養成のため、警護部隊の中に彼ら候補生を指導する教導隊が設けられた。

ユーゴヴィッチは現在その教導隊の部隊長としてガリア南部に位置するランシール王立士官学校に赴任している。

校舎に併設されている訓練場で、若い候補生たちを相手に教官として特殊戦闘技術を習得させるべく、日夜彼らとの模擬戦闘を繰り返していた。

ユーゴヴィッチは芝の上でへたり込む若い士官候補生らの姿をぼつと視界に据えていたが、滲む汗を拭いその掌で照り返す強い陽射しを遮って膝の上にある手紙に目を落とした。

流麗な文字で綴られている手紙の差出人には“スージー・エヴァンス”とある。

エヴァンスの故郷でもあるブルーール奪還戦以降、彼女が所属してい

た第7小隊はナジアル会戦、ギルランダイオ要塞攻略戦を戦い抜き、帝国軍のガリア方面司令官マクシミリアンの首都急襲に際しても、これを退ける勇敢な働きを見せて事実上このガリアを救ったのだった。

ユーゴヴィツチらはブルールでの戦い以降、第7小隊と直接作戦を共にすることはなく、エヴァンスとは駐屯地で互いに顔を合わせることはあっても言葉を交わすことはなくなっていた。

彼女からの手紙は終戦後暫く経ってからユーゴヴィツチのもとに届くようになり、以降も季節が移り変わる折に送られてきた。

戦後、故郷ブルールに戻ったエヴァンス嬢は戦時中に交流があったひとりの記者を通じて、故郷の奪還戦を共に戦ったかつての曹長の消息を掴み、以降その男に宛てて手紙を書き送っていた。

初めて彼女から送られてきた手紙には1冊の書籍が添えられていた。

著者の名には”イレエヌ・コラー”とあった。

書籍はガリア戦役における義勇軍第7小隊の戦いの軌跡を綴った従軍記で、その中に記されたブルール奪還戦の項に第4小隊と自分の名が記されてあることをユーゴヴィツチは彼女の手紙で知った。

「あいつら…モノになりますかねえ？」

隣から低く野太い声がしてユーゴヴィツチは仕方なく応じるかのようにおもむろに顔を上げた。

中尉の隣に腰掛ける25歳のダニエル・クローゼ准尉が長い足を投

げ出して、いたずらっぽい笑みを浮かべてばやいた。

クローゼはユーゴヴィッチより後から部隊に選抜された二期生だったため、年下ながら上官にあたるユーゴヴィッチには節度を持って接していたが、ほとんど素人同然の学生の相手を日々繰り返し返していたので、その鍛え上げられた身体と優れた戦闘技能を持って余し退屈さにすっかり毒されていた。

それ故、ことあるごとに上官のユーゴヴィッチにばやいてみせるのがお決まりだった。ユーゴヴィッチ自身がかつての上官に対してそうしていたように

「まあ、まだまだ時間は掛かるがいずれ人並に動けるようにはなるだろうよ。」

いかにも戦士らしい体躯の相棒に向けて、小柄で痩せている士官が気だるい声色で返す。

ふたりの教官から模擬弾をしたたかに撃ち込まれ、その身体を痛めつけられた学生たちが汗にまみれて芝に伏しているのをユーゴヴィッチはただぼんやりと眺めているだけだった。

「選りすぐりのエリートと言っても、せいぜいこの程度なんですかね？」

防具の下に鎧のような肉体を持つクローゼが、その身体を大の字にして芝生の上に寝転んだ。

身長にして10cm以上高く、体重にして20kg以上重い相棒の姿には目もくれず、ユーゴヴィッチは再び視線を膝の間に落とす。

「手紙・・・いつもの娘からですか？」

ユーゴヴィッチは応えない。代わりに相棒が視線を投げている手紙をゆらりと持ち上げる。手紙に添えられた写真がぱらぱらと足元に落ちたので、クローゼが便箋から写真へと視線を移した。

「何の写真です？」

「ああ、先月西部の海で遊んだときのものだそうだ。」

「ええっ!？」

大男が飛び起きて鼻息荒く這い寄ってくる。

クローゼが引つ摺んだ写真に写っているのは海辺ではしゃぐ子供たちの姿だった。

「お前が期待しているようなもんじゃないよ。」

クローゼは大きいため息をついて写真を返すと、90kgに迫る身体をごろんと芝の上に転がせた。

「その娘、中尉に気があるんでしょ？何で他所の子供の写真なんか送ってくるんです？」

ユーゴヴィッチは黙ったまま写真を見つめる。

海辺で無邪気な笑顔を見せる子供たちは、かつて自分の上官だった男の生徒たちだった。あるいはその男の息子や娘とも呼べる存在だ。

良家の生まれであるエヴァンスは私財を投じ、故郷ブルールで戦災孤児救済のための基金を設立した。

集まった資金の一部は同じブルールにただひとつある孤児院にもあてられていた。元上官の男はその孤児院の教師であり養父でもある。男から便りはなかったが、交流のあるエヴァンス伝にかつての部下のもとにも近況が届いていた。

「その手紙、もうずっと送られてきてますよね．．．どんな娘なんですか？」

もう何千回と聞いた台詞だったが、筋骨隆々とした隣の相棒は凝りもせずにエヴァンスの手紙を見つけては訊いてきた。何の工夫も捻りもない問に対して、ユーゴヴィッチはその都度アレンジを凝らした回答ではぐらかしてきた。

「さあ、今はどうだろうな。最後に顔を合わせたのは二年前だから。ちょうど今ぐらいの季節だったかな。」

「そうやって誤魔化して．．．中尉、あのロージーって歌手とも知り合いなんですよ？その娘もあの歌手と同じくらい美人だったりするんじゃない．．．??？」

ブルール奪還戦を共に戦ったガリアの英雄である第7小隊の隊員は皆ほとんどがそれぞれの故郷に戻り、軍に残っている者はわずかだった。

カラー女史の執筆したガリア戦記クローニクルが世に出回る頃には、そこに記さ

れる殆どの者がガリアの各地に散ってしまっていたこともあり、第7小隊の存在は半ば伝説になっていた。

「ブリジット・シュタークか？なかなか勇敢な兵士だったよ。彼女はいつも先陣に立っていた。」

「へえ、ロージーがねえ．．．まさかその娘も勇ましい兵士だったとか!？」

エヴァンスにはおよそ兵士だと思える要素がまるでなかった。彼女が特別そうであるというわけではなく、戦中の義勇軍にはエヴァンスのような兵士は数多くいた。

それでも彼女は兵士の姿が似合わなすぎた。しかし、ユーゴヴィツチの記憶には不似合いなブルーの戦闘服を纏った彼女の姿しかなかった。

「いや．．．」

ユーゴヴィツチは言葉を継ごうとしてやめた。先ほど膝の間に落ちた写真の中から目に留まった一枚を拾い上げる。

「普通の兵士だったよ。あそこに転がってる小娘たちと変わらない。」

拾い上げた写真の端に小さくではあるが、すっかり大人びた美しい女性が写っていた。傍らにはかつての上官の男と、その男を慕っていた同じブルー出身の瞳が大きな娘の姿がある。

美しい女は日傘をさし、つばの広い帽子を被って、目の前ではしゃ

ぐごどもの姿に優しく微笑んでいる。写真に写る彼女の眼差しを見つめ、あの日の夜に自分の横顔に向けられていたブルーグレーの瞳を思い出した。

写真に写る眼差しはにっこりと微笑んだあのときの瞳のままだ。

ユーゴヴィッチが便箋をたたみ写真をその間に挟んで胸ポケットに静かに収めた。

大の字になっっている男は真上から注ぐ陽射しに目を瞑り汗に濡れた顔をしかめている。

ユーゴヴィッチがちらと腕時計に目を落とし、その場ですくくと立ち上がった。

「ハイフタイム
休息は終わりだ。」

「もう一度、ゲーム模擬戦闘ですか？」

クローゼは芝の上に大の字になったまま隣の上官を仰ぎ見た。

ユーゴヴィッチは答えず、オートマティックライフル練習用の自動小銃にゴム製の模擬弾が詰まった弾倉を込める。

黒塗りのその自動小銃は、大戦中に鹵獲した帝国軍の突撃銃をシュトゥルム模した教導隊専用の火器で、命中精度はガリア純正の銃にわざと劣るように作られているものの、人並み外れた戦闘能力を誇る教官のふたりにとってはさして問題ではなかった。

「今日は何人残りますかね？」

1クラスあたり20人以上の学生がいるが、昨日は最後まで訓練をこなしたのは3人しかいなかった。実戦を想定した模擬戦闘では、これまで誰一人として最後まで残っていない。実戦であれば全滅だった。

「さあな。」

上官の空虚な返答を合図にゆっくりと長身の戦士が立ち上がる。盛り上がる筋肉が胸の上の防具をその内側から押し、戦闘服の生地と擦れてギョツと音を上げる。

ユーゴヴィッチがニヤリと口元を緩め相棒の顔を見上げる。しかしその視線は研ぎ澄まされた鋭さを奥底に湛えている。

「そんなに女に必死になるんなら俺が紹介してやる。ただし条件付きだがな。」

「その手紙の娘を？」

目を見開く巨躯の准尉に向けて、ユーゴヴィッチがニヤケたままゆっくりと首を振って答えた。

「コイツはだめだ。」

写真を収めた胸のあたりをそつと抑える。

「特別な仲間だからな……」

クローゼがわざとらしく大きな溜息を漏らして頭を振る。

「他に女のアテが？此処ランシールにはガキしかいませんよ。」

「女の心配をする前に条件を聞かなくていいのか？」

「一応聞いておきましょうか？女の方もハナから期待しちゃいませんけどね。」

ユーゴヴィッチにはそこそこ長大に感じる専用火器も、クローゼが手にしていると子どものおもちゃのように見えた。クローゼがその自動小銃おとこに嫌々といった風に弾倉を込めた。

「条件は連中が全員残ることだ。こっちはふたりで相手して、あつちが学生とはいえ20人以上いる。それが3分持たずに全滅では話にならない。」

「俺の任務達成は絶望的ですな。」

クローゼが上官の嫌味に対してガチャンと乱暴に槓桿を引いて応えた。

「それが俺たちの仕事だ。泣き言をやめない限り美女にはお目にかかれなぞ。」

「“ぼやき”もダメだって言うんなら俺は女を取る！諸手を上げてペイント弾を浴びる方を選びますよ。」

部下の恨み節をユーゴヴィッチが涼しげな表情で受け流し横目で冷やかな視線を送る。口元はニヤけてはいたが、目は笑っていないかった。

クローゼは咳払いをしてみせて前言撤回の意を上官に伝える。

「レフテナント中尉、レ命令を。」

ユーゴヴィッチが笑みをこぼしていた口元を引き締めて低く抑えた声で命令を告げる。

「フェイズ全員、リスタート状況B-3から再開させる。1分と持たなかった間抜けはインターバル・ラン完全装備のまま罰走だ。」

カレル・ユーゴヴィッチ中尉の命令を受けた190cm近いダニエル・クローゼ准尉が声を張り上げて芝生の上でぐったりとしていた学生たちを叩き起こす。

ユーゴヴィッチは部下の大きな背中を見送った後、ゆっくりと照りつける陽射しを仰ぎ見た。

穏やかに丘の峰を抜ける風も、その風に揺れる草の音も聞こえてこない。

ただ、空高くある太陽は征暦1935年9月のあの日と同じくらいに暑く感じる午後の陽射しだった。

*

「おじさん!!」

軋む風車の音を破るような弾ける声がして、エリック・ヴィルトウ

ールはゆっくりと振り向いた。

母譲りの大きな瞳がじつとこちらを見上げている。その瞳と同じ赤褐色の髪が頭に巻いた大振りなスカーフの間から覗く。

ヴィルトウールにはすっかり見慣れた赤いスカーフもまた母と同じものだった。

アリシア・ギウンターの娘、イサラ・ギウンターが小さな手に余る大きなパンをしっかりと握っている。

「イサラ、これをおじさんにくれるのかい？」

「うん！ママと一緒に焼いたの！！」

「そうか、ありがとう。」

小さな幼児の手から、中年の男の厚い手に芳しい香りのする焼きたてのパンが渡る。

親子風車のほぼ真下にいるヴィルトウールは、風車塔のまわりに腰を下ろしている子供たちを見回した。

いつもは小さな体を弾ませて忙しく走り回っているばかりなので、ヴィルトウールは常に手を焼いていたが、今は皆イサラが配ったパンを頬張っているために静かだった。

「どれ．．．」

ヴィルトウールが丸い顔をほころばせているイサラの手にパンを戻

しその身体を抱き上げる。ずしりとした重さが腕を伝い、少し肉の付いた腹に力を込めた。

「また大きくなつたな・・・」

イサラはきやつきやと笑い声を上げる。ヴィルトウールもまたつられるように皺の刻まれた顔を緩めていた。

イサラを腕に抱いたまま、再建された二棟の風車塔の真下にヴィルトウールが跪いた。男の足元に一枚の石板が埋め込まれている。

男は親子風車の下を訪れる度にそこへ跪かずにはいられなかった。そして、その度にあの日の戦いの記憶を思い起こしていた。

7人の勇敢なるガリア義勇軍兵士の魂をここに鎮める 1935
年9月6日

「君たちが守った命がこうしてある。命を懸けて取り戻した街もこの通りだ。」

ヴィルトウールは風車塔の土台となっている台地の上から広場を見渡した。あの日の光景がまるで悪い夢だったかのようにブルールの街並は素朴な美しさを取り戻していた。

仲良く隣り合って腰掛けるふたりの子どもを見やる。少し年長の男の子の隣には黒髪のダルクス人の女の子がいる。ふたりの手にはイサラや他の子供たちの手にあるのと同じ大きなパンがある。

『エリック、俺はあんたのお陰で誇りを持って戦えた・・・』

「パパ！」

突然イサラが声を上げ、弾むボールのようにヴィルトウールの腕から飛び出していった。風車塔の土台の台地を駆け降りて、“アリシア・ベーカー”とペイントされたワゴンに歩み寄る男性のもとへと一直線に駆けていく。

「先生だ！」

ヴィルトウールの小さな子供たちも、イサラの後に続いてその男性のもとに一齐に駆け出した。傍らに並んで腰かけていた男の子が自分より少し幼いダルクス人の女の子の手をしっかりと握って、他の子供達と同じ方へ駆けていった。

イサラが今ではブルールの教師となった父親のウエルキン・ギョントアの胸に飛び込んだ。ワゴンからイサラの母親であるアリシアが降りてくる。

ヴィルトウールの子供たちがギョントア親子のまわりに輪になって集まる。

「先生！今度はいつ虫取りに連れて行ってくれる！？」

「川へ魚釣りに行くつよよ！！」

「野鳥観察は！？」

「花のスケッチに行く約束だろ！？」

『グリゲラ．．．あんたが守った誇りはちゃんと受け継がれている。この世界はあんたが命を懸けただけの価値がある。私はそう信じている．．．』

親子風車が大きな羽根に風を受け回転するのに合わせて木組みの支柱を軋ませている。広場には子どももの弾ける声が響き渡っている。

かつてウエルキン・ギウンターと同じくブルールの教師だった男、エリック・ヴィルトウールが仲間と共にその生死を懸けて取り戻したブルールの街は、今では古くから変わらない長閑な活気に満ち溢れ、人々が慎ましい暮らしを取り戻すまでになっていた。

ヴィルトウールはこの街を取り戻したあの日の夜、傷ついた身体を引きずりながら見た地平と同じ方角に視線を向けた。

鮮やかな緑に染まる丘をコナキソウの白い花が一面に埋めていて、遠く離れた街の中心からもはっきりと見えた。風に合わせて揺れるその花は、陽光に照らされて美しく輝いて街に彩りを添えていた。

「おじさん！！」

ずっと昔から自分を呼ぶその明るい声がさわやかなブルールの風に乗って男のもとに届いた。

その耳慣れた声のする方へエリック・ヴィルトウールはゆっくりと振り返った。

エピソード（後書き）

これで一旦執筆を終えます。。

最後まで呼んでくださった方、お付き合いいただきありがとうございます！
いました！

各話あとがきにオリジナル・キャラの設定・モチーフなどを追記する．．．かもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9429x/>

戦場のヴァルキュリア ~ブルールの丘から~

2011年11月21日23時47分発行